

ジェームズ一世期における 「ヴァージニア会社」とその説教について

課題番号11610489

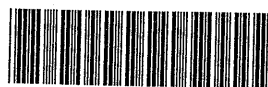
平成11年度～平成13年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書

平成 14年 3月

研究代表者 高橋 正平

（新潟大学法学部教授）

新潟大学附属図書館



3020005724

はしがき

本報告書は17世紀ジェームズ一世期のヴァージニア会社及び植民に関わるものである。ヴァージニア会社は本来商業的性格の極めて強い会社であったが、会社の公式文書や植民を擁護した説教を読むと会社の主たる目的として「福音」の普及があげられている。報告書では最初ヴァージニア植民がいかに宗教とは関係のない商業的な投資の還元を目的としているかを会社の公式文書から論じた。次にジェームズ一世期の大国スペインとの確執からヴァージニア植民を論じ、特に、スペイン駐英大使が見たヴァージニア植民を論じた。次にヴァージニア植民を擁護した一連の説教から最初ジョン・ダン(John Donne)の説教を取り上げ、その手法について論じた。ダンは聖書の一節をヴァージニア植民に適応し、ヴァージニア植民を正当化している。筆者は、更に、この聖書の適応に着目し、ダン以前の同じくヴァージニア植民を擁護した一連の説教を取り上げ、説教家がすべて聖書の植民への適応によって植民を支持していることを指摘した。最後に、筆者は聖書の適応がどこに由来するのかを扱い、それが聖書解釈の予表論(タイポロジー)の変形であることを論じた。予表論は本来は「旧約聖書」が「新約聖書」の予表となっていることを指摘することによって、両聖書の一貫性を主張する解釈である。「新約聖書」に書かれていることはすべて「旧約聖書」に見出されるとするこの聖書解釈は聖書の誕生以来中世、近世を通じ継承されてきた。ところが17世紀に入り、この予表論を社会的・政治的に利用する宗教人や文人が現れた。彼らは、「旧約聖書」の対型を「新約聖書」に見出さないで、彼らの時代の人物、出来事に見出したのである。つまり、「旧約聖書」や「新約聖書」の人物・出来事をジェームズ一世、チャールズ一世、クロムウェル等に適応したのである。筆者はこの予表論の変形がダンを始めとする説教家達の聖書の適応の根本を形成していることを論じた。そのためにダンの本来の予表論の使用を論じ、その後ダンの火薬陰謀事件記念説教からダンが「旧約聖書」をジェームズ一世に適応していることを指摘し、ダンのヴァージニア植民擁護の説教における聖書の適応との関係を論じた。

研究組織

研究代表者 高橋 正平 (新潟大学法学部教授)

研究経費

平成11年度	1,200千円
平成12年度	1,400千円
平成13年度	1,000千円
計	3,600千円

I ヴァージニア会社と公式文書 (1)

1606年4月10日発布のジェームズ一世の勅許状により本格的に活動し始めたロンドン・ヴァージニア会社は1624年に解散するまで合計三回の勅許状を発している。いわゆる公式文書によるヴァージニア植民宣言である。以後イギリスによるヴァージニア植民を国内外に宣言書し、植民活動が本格的に始まることになる。イギリスの海外進出はもとよりヴァージニア植民が最初ではない。ハリオット(Harriot)、ハクルート(Richard Hakluyt)、パーチャス(Samuel Purchas)等の記録が雄弁に物語っているように、イギリスはアメリカのみならずヨーロッパ大陸への進出をも企ている。そもそもイギリスの海外進出の目的は何であったのか。これが以後の本論のテーマである。ジェームズ一世の勅許状がうたっているように、ヴァージニア植民の目的は異教徒へのキリスト教布教であったのだろうか。ヴァージニア植民の宗教的性格を強調したミラー(Perry Miller)とは異なり⁽¹⁾、私は異教徒へのキリスト教布教は二次的な問題で、植民による金銭的な利益こそがヴァージニア会社及びヴァージニア植民の第一の主要目的であり、それであるがゆえに冒険植民者(adventurers)や植民者が未開の地ヴァージニアへ一攫千金を夢に抱き、イギリスを後にしたと私は考えている。この問題の解明にあたり私はヴァージニア会社・植民に関連する資料に吟味を加えるが、その資料には以下がある。⁽²⁾

- (1) 会社成立に関わる王と枢密院によって発布された特許状、勅許状及び命令書。
- (2) 宮廷管理書に記録されている冒険商人(adventurers)の活動報告書。ここには植民、土地の認可、その他植民を推進し収入増加のための経済政策・計画が記録されている。
- (3) 植民事業を行うに際し、会社が植民統治者へ与えた依頼、植民者への規則、指示。
- (4) 植民現地からの報告、宣言書、書簡、不平。
- (5) 一般人から植民事業への信頼を得、冒険商人を確保し、会社の会員の関心、支持を維持するために出版した宣伝書、広告、宣言書、パンフレット、説教。
- (6) 会社の会員と個々の植民者との間の私的往復文書。
- (7) 17世紀の他の会社や諸都市の記録と政府役人かヴァージニア会社の業務には直接関係していない人達の記録。

本論では、公的文書によるヴァージニア会社・植民に関する公的文書と私的文書から植民事業の実体解明にあたるものである。本論では主として上記の(1)(3)(4)を中心にして論を進めたい。最初ジェームズ一世の三つの勅許状、種々の指示・命令・布告と及びヴァージニアからの書簡・報告書、及びハリオットのヴァージニア報告書、*A brief and true report of the new found land of Virginia* (1588)、ハクルートの*Virginia Richly Valued* (1609)、ストレーチェイ(William Strachey)の*The Historie of Travel into Virginia Britannia* (1612)、パーチャスの*Hakluytus Posthumus* (1625)等からヴァージニア会社及びヴァージニア植民の目的、実体を明らかにしたい。

ジェームズ一世の勅許状は1606年4月10日、1609年5月23日、1612年3月12日の三回にわたって発布されているが、特に最初の勅許状はヴァージニア植民の

目的を明示したものとして注目に値する。ヴァージニア植民は1585年、87年のウォルター・ローレイ (Walter Raleigh) によるロアノーク島植民失敗後、ジェームズ一世が勅許状を發布することによってそれまでの私的な事業から国家的事業へと方針を変え、ヴァージニア植民に対し国家が主導権を握ったのである。ジェームズ一世がアメリカ植民を認可した背後には英国内の社会的な理由があり、対外的にはカトリック大国スペインへの対抗意識と英国のヨーロッパ諸国への経済的依存からの脱却があり、ヴァージニア植民により英国は自国経済の自給自足を望んでいた。この問題についてはハクルートが『西方植民論』 (*A particular discourse concerning the greate necessitie and manifolde commodityes that are like to growe to this Realme of Englande by the Westerne discoveries lately attempted*) (1584) で言及しているが⁽³⁾、彼によれば英国の毛織物等の市場開発、余剰物資の供給地、余剰人口に由来する失業者・浮浪者問題及びスペインを相手にする場合の基地としてのアメリカ植民の重要性からしてヴァージニア植民はどうしても必要であった。ヴァージニア植民は英国内の社会問題解消と同時に英国の国威発揚的な性格を伴った海外進出であったとも言える。英国の国威発揚と国内の社会問題解決を一気に狙ったヴァージニア植民はジェームズ一世の勅許状によってロアノーク島植民失敗後の英国民に新たな局面を迎えることになった。ヴァージニア植民の中心的存在となるジェントルマンの台頭、余剰人口の出現、植民事業へのロンドン商人とジェームズ一世王朝の関心があいまって、ジェームズ一世は1606年4月最初の勅許状 (charter) を發布し、ヴァージニア植民を国家事業として認可することになる。海外植民という大事業を行うに際し最大の問題点はその運営資金である。いかにして海外植民に必要な資金を集めるか否かが植民成功の鍵を握っている。ローレイのロアノーク植民が物語っていたようにもはや海外植民は個人の資金ではとうていやりおえることはできない。それでできるだけ多くの植民賛同者から資金を集めるために共同出資会社 (Joint Stock Company) が設立されることになった。会社はあらかじめ価格を決め、賛同者に株式を配当して資金を集め、植民の利益を出資者に配当する方法をとったのである。共同出資会社設立の趣旨からヴァージニア会社の全容が浮かび上がってくる。ヴァージニア会社はロンドン商人のヴァージニア植民での利益追求とジェームズ一世王朝がかかえる種々な問題解消が合致したことから生まれた商業的色彩が極めて強い会社である。ところが1606年の第一勅許状を見ると、会社の商業的性格は希薄化され、代わりに会社の宗教的使命が全面に出されていることがわかる。第一勅許状では植民地の地理的範囲の明示、ヴァージニア会社とプリマス会社の植民領域設定、王と王の代理人の権限の明示の後勅許状は次のように言う。

Wee, greatly commending garciously accepting of their desires to the furtherance of soe noble a worke which may, by the providence of Almightye God, hereafter tende to the glorie of His Divine Majesties in propagating of Christian religion to suche people as yet live in darknesse and miserable ignorance of the true knowledge and worshippe of God and may in tyme bring the infidels and salvages living in those parts to humane civilitie and to a setled and quiet govermente, doe by theise our lettres patens garciously accepte of and agree to their humble andwell intended desires; (p.2)⁽⁴⁾

「神の知識と崇拜の暗闇と不幸な無知のなかにまだ住んでいる人々へキリスト教を布教」し、「やがてはかかる地に住んでいる異教徒と未開人を人間的な礼儀正しさと落ちついた静かな統治」へと至らす「かくも高尚な事業の促進」とうたう上記の文章には商業的な会社の姿は全く見られない。ヴァージニア植民者へ強い影響を及ぼしたハクルートの『西方植民論』第一章でも彼は、英国の西方植民の第一の目的を「キリストの輝かしい福音を宣べ伝え」「正しい、完全な救いの道に引き入れる」こととし、これが「まず真っ先にやられるべき主要な仕事」とし、いかにキリスト教徒にふさわしい仕事を植民において行うかを強調している⁽⁵⁾。ジェームズ一世の第一勅許状はこのような流れを汲み、まずキリスト教の布教を全面的に掲げる。一般の植民者や冒険植民者が何をもってヴァージニア会社へ参加し、出資したかと言え、それは利益なのである。ヴァージニア会社を「共同出資会社」としたこと自体が会社の性格を如実に表している。一種の株式会社への投資者が何を目当てにしているかは容易に理解できる。しかしながら上に見たように会社の使命をキリスト教布教におく勅許状の真の意図はどこにあったのか。第一勅許状にはヴァージニアでの金、銀、銅発見の際して、金銀に関してはその5/1、銅に関しては15/1をロンドンの親会社に納めなければならないとの規定があり、ヴァージニア会社としてはこれが出資者への配当にあてるべき利益である。しかし第一勅許状は全体的にはヴァージニア会社植民の宗教的使命が特記され、一般の出資者や植民者の最大の関心事である利益配当についてはあまり触れていない。公式の勅許状で触れるには余りにも露骨すぎる嫌いがあったのかもしれないが、それにしても出資者が最も知りたい「利益」に関する記述が希薄なのは少々驚かされる。東インド会社同様ヴァージニア会社植民への最大の関心事は配当であったはずである。会社が期待していた金銀銅は発見されなかったが、タバコの発見と国内でのタバコ需要からくるタバコ栽培への関心はやはりその利益であった。ベン・ジョンソン等は『東行きだよおー!』(1605年)で「ヴァージニアには金が豊富である」と書き、またマイケル・ドレイトン(Michael Drayton)が「真珠や金を得るために、我々の真珠や金を手にするために、地球唯一の楽園ヴァージニアよ」(Ode To the Virginian Voyage, 1606)は当時の一般人がヴァージニアに対して抱いていたイメージであろう。ヴァージニアは人々に一攫千金の夢を実現させてくれる場所であったのである。1606年12月20日発布の『規約、指示、命令』(ARTICLES, INSTRUCTIONS AND ORDER)では国王直属ヴァージニア評議会の設置とその役員選出について記されているが、そこでもキリスト教布教について触れている。

...and wee doe especially ordaine, charge and require the said Presidents and Councillis and the ministers of the said several Colonies respectively, within their several limits and precincts, that they with all diligence, care and respect doe provide that the true word and service of God and Christian faith be preached, planted and used, ... (p.15)

1609年5月23日、ジェームズ一世は第二勅許状を発布する。この勅許状はベーコン(Sir Francis Bacon)の協力を得てエドウィン・サンディズ(Sir Edwin Sandys)が作成したと言われているが、ジェームズ一世の恣意的権力による統治から被統治者の同意と植民者の労働の結果を享受する権利重視の統治を容認したものである。注目すべき点は資金確保の

ために株式を公開し、自費でのヴァージニア渡航者は株主の地位が保証され、資金のない者はヴァージニアで7年働くという条件で会社の年季契約奉公人として渡航でき、7年の奉公があける際に奉公人は自由となり、さらに会社の利益の配当と最低100エーカーの土地の配分を受けることになった。この勅許状では、植民者にヴァージニアでの金銀銅等の発掘権を与えると共に、多くの職人、同業者組合にヴァージニア植民に参加させていることも注目に値する。ヴァージニア植民の目的がより明確化されている点で第二勅許状からヴァージニア会社の全容がうかがい知れるが、ヴァージニア会社組織の運営強化をねらい国王の介入を最小限にいとめ、植民者個人の権利を重視した点でアメリカ憲法の原点を指摘する人もいる。その第二勅許状でも最後にはヴァージニア植民の主要な目的は異教徒の改宗であると次のように言っているのである。

And lastly, because the principall effect which wee cann desire or expect of this action is the conversion and reduction of the people in those partes unto the true worship of God and Christian religion,... (p.54)

「神と真の宗教へのかかる土地に住む人々[インディアン]の改宗と救済」こそがヴァージニア植民が本来目指すべき大目的なのである。会社の商業的性格を明確にしたあとで最後に会社の宗教的使命をわざわざ付け加えることで会社はヴァージニア植民の大儀名文を植民関係者に訴えている。1609年5月、ヴァージニア総督トマス・ゲーツ(Thomas Gates)へのヴァージニア評議会の指示・命令・規約ではヴァージニア統治のために様々な助言がなされているが、カトリック大国スペインを意識したプロテスタントとしての英国国教会の布教活動の重要性を強調し、次のように言う。

You [Thomas Gates] shall take principall order and care for the true and reverent worship of God that his worde be duely preached and his holy sacraments administered accordinge to the constitucions of the Church of England in all fundamentall points,... And all atheisme, prophanes, popery, or schisme be exemplarily punished to the honor of God and to the peace and safety of his Church,... (p.57)

無神論、冒瀆、ローマカトリック教、教会分裂は神の名誉と教会の平和と安全のために戒めてとして処罰されねばならない。更にヴァージニア植民の最も敬虔・高尚な目的として原住民インディアンのキリスト教改宗を掲げ、実際にインディアンの子供をキリスト教に従って教育すべきことを指示している。

You shall, with all propensenes and diligence, endeavour the conversion of the natives to the knowledge and worship of the true God and their redeemer Christ Jesuis, as the most pious and noble end of this plantacion,... (p.57)

トマス・ゲーツへの会社からの指示には植民の強化のために南洋(太平洋)航路・鉱山の発見、交易、貢物、植民者のワイン、ピッチ、タール等生産向上をあげており、ヴァージ

ニア植民の結果への大きな期待が寄せられているにもかかわらず、キリスト教布教をヴァージニア植民の第一の目的としていることに植民事業目的の複雑さが窺える。ヴァージニア会社の宗教的使命の強調はこれ以後も続く。

1612年3月12日発布の第三勅許状は勅許状としては最後のもので、ヴァージニア植民がいかなる結果をもたらしつつあるかが徐々にわかり始めてきた頃であるが、最初に "the propagation of Christian religion and reclayminge of people barbarous to civilitie and humanitie" (p.76) に触れているのである。この第三勅許状では植民事業遂行のための資金集めに宝くじ導入の決定をしているのであるが、一方では宝くじによる植民資金集め、他方ではキリスト教布教といったように「聖」と「俗」が混在したヴァージニア植民の実体がかいま見れる。ヴァージニア会社発布の三回にわたる勅許状及び会社からの指示・命令等から本来は商業的性格の強い会社が宗教という大義名分を全面に持ち出し、植民の利益追求を背後に押しやっていることがわかる。ヴァージニア会社はすでに指摘したように本来は株式会社であり、株式会社は株主への利益の配分を行わねばならない。キリスト教布教の名のもとでは一般の人々が植民事業へ参加をしたかははなはだ疑問である。もちろん信仰心に厚い人もなかにはいたであろうが、ベン・ジョンソンやドレイトンが抱いていたヴァージニアのイメージがより一般人の間では強かったと思われる。ヴァージニアと言えば「金」なのであり、これはヴァージニア植民以前から英国がヴァージニア植民に抱いていた妄想であった。以上はヴァージニア植民に関する公式文書であるが、ヴァージニア会社による「宣言書」(declaration)と実際にヴァージニアへ行った人々の報告書や書簡ではヴァージニア植民はどのように報告されているか、次にこの点について触れてみたい。

2

1606年、1609年、1612年の勅許状発布後、ヴァージニア会社は当初の予想に反する植民へのかんばしくない実状を否定し、さらなる植民への関心を引き起こすために「宣言書」と報告書を出版する。実際1606年の植民以来植民が目指していた現地に政情の安定、経済的繁栄及びインディアンとの和解は期待していたほどではなかった。そのような状況のなかで「宣言書」や報告書は勅許状に沿い、ヴァージニア会社を全面的に支援する。これらを出版年代順に列挙すると以下の通りである。

- (1) Robert Johnson: *Nova Britannia* (1609年2月)
- (2) Robert Gray: *A Good Speed to Virginia* (1609年4月)
- (3) *A True and Sincere Declaration of the Purpose and Ends of the Plantation begun in Virginia* (1610)
- (4) *A True Declaration of the Estate of Virginia* (1610)
- (5) R.Rich: *News from Virginia* (1610)
- (6) Robert Johnson: *The New Life of Virginia* (1612)
- (7) William Strachey: *For the Colony in Virginea Britannia* (1612)
- (8) Alexander Whitaker: *Good News from Virginia* (1613)
- (9) Ralph Hamor: *A True Discovrse of the Present Estate of Virginia* (1615)

(10) *A Declaration of the State of the Colonie and Affairs in Virginia: with the Names of the Aduenturers, and Summes Aduanced in that Action* (1620)

(11) Edward Waterhouse: *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia* (1622)

この他にも当時の著名な説教家によるヴァージニア会社擁護の説教やヴァージニア植民者・探検家からの報告書—ハリオットの『ヴァージニア報告』(*A brief and true report of the new found land of Virginia*)、スミス (Thomas Smith) の『ヴァージニア入植についての真実の話』(*A true relation of such occurrences and accidents of noats as hath hapned in Virginia since the first planting of that Collony, which is now resident in the South part thereof, till the lastb returne from thence*)、ストレーチェイ (William Strachey) の『ヴァージニア旅行記』(*The Historie of Travell into Virginia Britannia*)、パーシー (George Percy) の『1606年ヴァージニア植民談話から集められた観察報告』(*Obsevationes gathetred out of a Discourse of the Plantation in Virginia 1606*) 等—及び私信があるが、それらについては校をを改めて論ずる予定なので、本論では上記の「宣言書」、実際にヴァージニア植民へ赴いた人達からのヴァージニア植民についての報告書からヴァージニア植民の実状を見てみたい。上記の(5)のRichの『ヴァージニア便り』はヴァージニア植民称賛の韻文で、(7)のStracheyの『イギリスヴァージニア植民のために』はヴァージニア植民運営・管理に関わる法律集で、本論とは直接関係がないので取り上げない。他の宣言書、報告書はいわばヴァージニア会社の宣伝文書で結果は自明であるが、勅許状との関係を見るとすべてが勅許状に沿った内容で、ヴァージニア植民賛美の文書であることがわかる。これらの宣伝文書ではヴァージニア植民の正当化、目的、利益について論じられ、ヴァージニア植民の先行きに暗雲がたちこめてきたなかで、出資者及び植民者に希望を与えることを目的としている。最初に(1)ジョンソンを見てみたい。ジョンソンが*Nova Britannia*を発表した1609年はヴァージニア植民にとって危機の年であった。1606年に勅許状を得て、ヴァージニア会社は同年8月と10月に植民者を送るが植民は成功と言えず、同年12月のクリストファー・ニューポート (Christopher Newport) 等による植民が一応の成功を収める。ニューポートは1608年6月に帰国するが、ヴァージニアでは指導者が次々と交代し、ヴァージニア植民の前途が危ぶまれていた時期であった。しかしこの機会にヴァージニア会社は巻き返しを狙い、次々と「宣言書」、報告書、説教による宣伝活動を開始した。ジョンソンの*Nova Britannia* はかかる背景から書かれた宣伝文書である。当然のことながらジョンソンはヴァージニア会社・植民を全面的に支持する。会社はそれをすぐさま出版し、ヴァージニア植民を希望する人達及び出資予定者に希望と安堵の念を与えようとする。ではジョンソンはいかにしてヴァージニア植民を擁護しているのか。ジョンソンは、最初にカトリック側 (特にスペイン) からのアレグザンデル一世の寄進状によるアメリカ大陸への領土権主張には何も歴史的根拠がないと主張し、イギリスのヴァージニア進出には何ら問題はないと指摘した後で、ヴァージニア植民の現状、目的、今後の取るべき道を指摘し、結果としてヴァージニア植民は十分に植民の価値があり、最初は利益がないように見えるが、決してあきらめることのないようにとの激励で終わっている。宣伝文書として果たすべきことは十分に果たしている内容のものである。ジョンソンにとってヴァージニア植民という "high and acceptable worke" は、"advance and spread the kingdome of God, and the

knowledge of his truth, among so many millions of men and women, savage and blinde, that never yet saw the true light shine before their eyes, to enlighten their mindes and comfort their soules. (B)⁽⁶⁾ に資する事業である。これは既に見た勅許状が挙げていたヴァージニア植民の第一の目的であるキリスト教のインディアンへの布教と一致しており、ヴァージニア植民がまずなすべきことは植民地でのキリスト教の推進と布教である。キリスト教に無知な原住民はいわば暗闇の中にいるのも同然で、その暗闇から原住民を救い出し、教化するのはキリスト教の義務であると考ええる。原住民をキリスト教に改宗させることは神の王国推進に至り、「迷える羊」である原住民を救うのは神から英国民に与えられた使命であるとさえ言う。このようにジョンソンはヴァージニア植民のキリスト教的使命を明確にする。ヴァージニア植民は世間で流布されているような金銭的利得を目的とした植民ではない。何はともあれ最初に考えるべきは異教徒のキリスト教への改宗であり、その改宗を通して英国は神の国建設に貢献する。これはヴァージニア会社としては崇高かつ遠大な模範的な植民のための大儀名文である。ジョンソンは次にヴァージニア植民の目的を国王の名誉と王国拡張とする。ヴァージニア植民を単なる個人的な商業的事業にとどめず、英国王と国家のためというより大きな視点からヴァージニア植民を見つめるところによって、人々に愛国心を植え付け、さらにはスペインにとって代わる世界のリーダーとしての英国を強く人々に訴えることを忘れない。ジョンソンは次のように言う。

But for my second point propounded, the honour of our King, by enlarging his Kingdomes to proue how this map tend to that: no argument of mine can make it so manifest, as the same is cleere in it selfe; Diuine testiments shew, that the hour of a King consisteth in the multitude of subiects, and certainly the state of the Iews was farre more glorious, by the conquests of Dauid, and under the ample traigne of Solomon, then euer before or after: (C2)

ジェームズ一世は David 王、Solomon 王にたとえられ、ヴァージニア植民は旧約聖書の David や Solomon の他民族征服に比較され、ジェームズ一世のアメリカ植民には前例があることを指摘する。王の名誉は臣下の増大にあり、そのためには他国の植民も許されるという論理である。予言者 Daniel は、多くの者を正しい道へ導き入れる征服により永遠に光り輝いた。そのようにジェームズ一世もヴァージニア植民によって異教徒を義の道へ導くことにより歴史に永遠にその名を留めることになる。ジョンソンのこれらの言葉にはジェームズ一世を意識した愛国的な王への賛辞が伺われるが、聖書の人物と彼らの行動を巧みに比較させ、ヴァージニア植民の正当化を訴えるジョンソンの手法は以後の宣伝文書のさきがげとなる。特に説教家達によるヴァージニア植民擁護はすべてこの手法によっており、以後ジェームズ一世のヴァージニア植民者は旧約・新約の様々な人物とその行動にたとえられ、「神の書」からのお墨付きを付与されるのである。この愛国的心情は更に続き、ヴァージニア植民により王の英知、威厳、名誉は世界の果てまで広がる。

And upon good warrant, I speake it heere in priuate, what by these new discoueries into the Westerne partes, and our hopefull settling in chiefest places of the Cast, with our former knowne trades in other partes of the world, I doe not doubt (by the helpe of God) but I may liue to see the

daies (if Merchants haue their due encouragement) that the wisdome, Majestie, and Honour of our King, shalbe spread and enlarge to the endes of the world, our Nauications mightely encreased, and his Maiesties customess more then trebled. (C2)

スペインを意識した英国国民に対する国威発揚の意図をも狙ったジョンソンはこのようにヴァージニア植民の目的を明確に述べる。英国国民のヴァージニア植民への熱意がさめつつあったなかでヴァージニア会社及びジェームズ一世側に立ち、ヴァージニア植民の正当性・有用性を強く国民に訴えるのである。ヴァージニア会社は本来は商業的な株式会社であり、出資者・植民者の目的は見返りとしての「利益」にあったことは確かである。それにもかかわらずジョンソンはさかんに宗教的使命と英国の国威発揚を植民の目的として挙げ、英国国民を激励しようとする。それではジョンソンはヴァージニア植民の利益に関して何も触れていないかというところではなく彼もそれについては触れてはいる。その前にジョンソンはヴァージニアの穏和な気候、豊富な資源を称賛し、植民に不足するものは何もないことを強調し、ヴァージニアを "this earthly Paradise"(B2)とさえ呼んでいる。ジョンソンはヴァージニアの土地の価値は今はないかもしれないが、時間と資金があればいずれは良くなるという。

And howsoeuer those grounds in Virginia are now but little worth indeed, yet time and meanes will make them better, considering how they passe our ground in England, both in regard of the soile and climate, fitter for many precious uses;(C)

ジョンソンが *Nova Britannia* を書いた 1609 年 2 月はヴァージニア植民を始めて 2 年が経過していたが、ヴァージニアでの植民実績は期待していたほどではなかった。とにかく植民者をヴァージニアへ送るには資金が必要である。しかしヴァージニアでの経過が思わしくない状況のなかで資金投資への見返りがあるかは疑わしかった。ジョンソンはこれらの事情を十分に把握したうえで、最初に植民の実体とはほど遠い宗教的使命を植民の目的に掲げ、その後には植民事業の本来の目的である利益的活動に触れる。この世の楽園であるヴァージニア植民による利益は何なのか。ジョンソンは金銀には触れない。12ポンド10シリングの出資によって出資者は7年後に少なくとも500エーカーの土地を取得できるのである。とにかくただちにヴァージニアへ行き、先発隊を支援することが先決であり、その結果によってさらに株の配当も可能となる。ヴァージニア植民は "so rich a prize of hopefull euents"(C2)であり、今そのチャンスを逸するべきではない。ジョンソンはヴァージニア植民の利益については直接的には言及しない。ただ何もしないでいるよりはまず行動せよと訴え、そのためにヴァージニア会社に投資を呼びかけるのである。ジョンソンの主張はヴァージニア植民宣伝文書としては模範的な文書と言える。聖書からの植民の正当化、スペインへの対抗意識からくる国威発揚、更にはヴァージニア植民投資からの確実な収益等、人々の関心事を巧みに取り上げている。ジョンソンは直接にはヴァージニアへは行ったことがないのだが、ヴァージニアの風土や豊かな自然についてはあたかも本人が見てきたかのような描写で、説得力のある内容となっている。以後のヴァージニア植民宣伝文書はジョンソンの宣伝文書と同様の手法で書かれることになる。次に同じ1609年4

月出版のロバート・グレイ (Robert Gray) の *A Good Speed to Virginia* を見てみたい。

3

グレイの *A Good Speed to Virginia* はスミスの『ヴァージニア入植についての真実の話』とジョンソンの *Nova Britannia* について、ヴァージニア植民に関する三番目の出版物である。グレイの *Good Speed* は2ヶ月前のジョンソンの *Nova Britannia* と内容が酷似しており、グレイは *Good Speed* を書くに際しジョンソンの *Nova Britannia* を読んでいたことは十分に予想され、実際グレイはジョンソンの *Nova Britannia* に言及している。ジョンソン同様グレイも旧約聖書の一節をヴァージニア植民に適応することから始める。グレイは、Joshua が Joseph の子供達の企てに許可を与えたのみならず祝福も与えたように、ジェームズ一世はヴァージニア植民者に与えてくれたと言う。いかにしてヴァージニア植民事業を聖書に適応し、読者に強いインパクトを与えるかは宣伝文作者の力量次第であるが、グレイはジョンソン同様ヴァージニア植民の宗教的使命を強調することを忘れはしない。「神の栄光」の促進と祖国の栄光と富みの拡大に従事する人は永遠の記録に残ると序文で述べ、ヴァージニア植民の目的を明確にする。それに反したただ現世的・世俗的な金銭目当ての植民者はそれだけで終わってしまうはかない存在である。グレイは次のように言う。

...they which preferre their money before vertue, their pleasure before honour, and their sensuall securities before heroicall aduentures, shall perish with their money, die with their pleasures, and be buried in euerlasting forgetfulness. (A3)

最初にこのように述べるグレイはヴァージニア植民の精神性を暗示する。ヴァージニア植民者は「美德」「名誉」「英雄的冒険」を具現化する人達である。利益を求めてヴァージニアへ行くのではない。冒頭にイスラエル人のカナン征服を記したヨシュア記の一節を掲げ、それを英国人のヴァージニア植民に適応する。グレイは英国の人口増加とヴァージニア植民をからませ、その先例をヨシュア記に求めるのである。ヴァージニア植民の場合植民により「神の栄光が促進され、王国領土が拡大され」、「国家の名誉と名声が世界の果てまで広がり、普及される」(B2)。ジョンソンと同様の愛国心である。ヨシュア記の中にヴァージニア植民の先例を見出すことでグレイはジェームズ一世をヨシュアと同一視する。旧約聖書にジェームズ一世の原型を見出すのである。なぜヨセフとヨシュアの子供達が領土を拡張したのかと言えば、人口増加への対処である。人口増加は国家が偉大であることの証であるが、限られた国土に収容できる人数は自ずから限られてくる。それでヨシュアが人口急増問題解決に選んだ方法は余剰人口の国外移住であった。しかしここで問題となるのは移住先の先住民との衝突である。この問題を先住民の教化という観点から解決する。おおむね未開の地に住む先住民は真の意味での神を知らない。そこで彼らに真の神を教え、真の神への道を歩ませることが神を知らない未開人にもまた神にとっても偉大なる行為となる。グレイは次のように言う。

Seeing therefore men by nature so easily yeelde to discipline and gouernment upon any reasonable

shewe of bettering their fortunes, it is euerie mans dutie to trauell both by sea and land, and to venter either with his person or with his purse, to bring the barbarous and sauage people to a ciuill and Christian kinde of gouernment, under which they may learne how to liue holily, justly and soberly in this world, and tp apprehend the meanes to saue their soules in the world to come, rather then to destroy them, or utterly to roote them out; (C2)

キリスト教の布教によって未開人を改宗させるという口実のもとに植民は可能となる。野蠻で未開な人々を文明化されたキリスト教的統治へと至らせることで未開人は現世で正しく生き、来世では魂の救済が保証される。あくまでも植民が行うことは先住民の教化であり、彼らにキリスト教を教え、広めることは神の王国拡大にも通じ、一方で人口問題解決、他方では神の国建設に貢献することになる。始めに「植民」ありきで、その後に植民正当化がくる。グレイにとってヴァージニア植民の第一の目的は先住原住民の教化であり、植民は "to drawe the Sauages from their barbarous kinde of life, to a more ciuill, honest, and Christian kinde of life" (C3) であり、未開人の教化を伴う植民はそれ自身が合法的なのである。グレイはこのように英国内の人口問題解消、キリスト教の布教と原住民の教化をヴァージニア植民の目的として挙げるが、ヴァージニア植民に反対することは「神、王、教会、国家」への反対であるとさえ言明する(D2)。植民の宗教的使命を強調するグレイは植民の利益性についても言及することを忘れはしない。そもそもヴァージニア会社が商業的色彩の強い会社であることを考えれば会社の商業性に言及することは当然であり、また、一般の人々も宗教的説得よりも即座の利益の見返りに興味をもっていたことは明白である。ここでグレイは単刀直入にヴァージニア植民の利益には言及しない。グレイが *Good Speed* を書いた1609年にはヴァージニア植民についての報告や実際ヴァージニアへ行った人達が帰国し、ヴァージニア植民の現状についての情報がかなり一般人にも届いていたはずである。ヴァージニア植民からの利益に対してはよい情報はなかった。グレイはそのような植民反対者に対して長い目でヴァージニア植民を考えることを要求する。現在の我々も先人の達成があればこそ恩恵や安楽な状態を受けているのであって、そのように我々は後生の人々のためにあるのだという。

We sow, we set, we plant, we build, not so much for our selues as for posteritie; we practise the workes of Godlines in thisa life, yet shall we not see the end of our hope before wee enjoy it in the world to come: It is a blessed thing to be blessed of posteritie. (D)

現在の人々はヴァージニア植民の結果がどうなるかは全くわからない。即座の利益がないからといって植民から手を引くことがあってはならない。長期的に見れば必ずや植民の利益はあるはずだ、とグレイは短期的な即座の利益を期待する人々を説得する。グレイは更に言葉を続けて永遠の備えを怠る者にはは確かな永遠の希望はありえず、自分のために存在する人は後生に名を残さないという。ヴァージニア植民に加わることはいわば永遠に名を残すことで、目先の利益などは全く問題ではないのである。今は何も利益はないかもしれないが長い目で見れば必ずや得る物があるという主張はこのあとの説教家特にジョン・ダンが強く聴衆に訴えていたテーマでもあるが、即座の利益のを願う人々に早まった期待は

捨てよと言う。グレイの *Good Speed* はジョンソンの *Nova Britannia* を受けて、ジョンソンが扱っていたヴァージニア会社の諸問題を扱っているが、特にヴァージニア植民を国内の人口問題解決手段として考え、それに伴う他国の植民地化の合法性、長期的な観点からの植民事業考察へと論が展開する。グレイにとってもヴァージニア植民のそもそもの目的は未開人へのキリスト教布教である。これが植民の大前提で、彼はそのために聖書から前例を見だし、ジェームズ一世の行うヴァージニア植民には聖書にも前例があることから植民の合法性を訴えるのである。一般の人々が最も関心があった利益については直接触れておらず、内容がやや理想的しすぎた点もある。しかし、ジェームズ一世から勅許状を受けた会社として利益称賛に走ることはできない。ジェームズ一世をも十分意識した宣伝文書としては「優等生」的な文書と言えよう。ヴァージニア会社・植民擁護の公式宣伝文書は言うなれば言いたいことは同じである。宗教的使命を帯びた植民の正当性こそが本来の植民の目的で利益は二の次である。ヴァージニア植民擁護の宣伝文書はこの主題をめぐって多くの人が文書を著すことになる。次に見るのはヴァージニア会社による1610年の公式の「宣言書」である。「宣言書」ではヴァージニア植民についてどのように記されているか。

1610年ヴァージニア会社の理事、評議員の許可を得て、*A True and sincere declaration of the purpose and ends of the Plantation begun in Virginia, of the degrees which it hath received; and means by which it hath been advanced: and the resolution and conclusion of his Maiesties Council of that Colony, for the constant and patient prosecution thereof, vntill by the mercies of God it shall retribute a fruitful haruest to the kingdome of heauen, and this Common-Wealth*⁽⁸⁾ という長々しいタイトルの宣言書が出版された。ヴァージニア植民に対する様々な批判、中傷、誹謗、風評からヴァージニア植民を擁護するために公式の宣言書によってヴァージニア植民の目的、degrees、植民の手段及び植民評議会の決意と結論を偽りなく述べることによって、ヴァージニア植民への人々の関心を高めようというものであった。この宣言書でヴァージニア植民を「宗教的な高尚な実現可能な」事業と見なしていることに注目したい。植民の第一の目的は福音布教である。

The Principall and Maine Ends...weare first to preach, & baptize into Chrisitian Religion, and by propagation of that Gospell, to recouer out of the armes of the diuell, a number of poore and miserable soules, wrapt vpp vnto death, in almost inuincible ignorance; (A3)

キリスト教を説き、福音の布教によりみじめな魂を悪魔の手から救出するという植民の目的はジェームズ一世の第一勅許状の文言を思わせる。ヴァージニア植民の第二の目的としてスペイン対抗の基盤としてヴァージニアに累壁を築くことである。

Secondly, to prouide and build vp for the publike Honour and safety of our gracious King and his Estates...some small Rampier of our owne, in this oportune and generall Summer of peace, by transplanting the rancknesse and multitude of increase in our people; (A4)

ヴァージニアにおける対スペイン用の防御用の砦を築くことと英国内の人口増解決のため

のヴァージニア植民は国内外の焦眉の問題を解消してくれる。最後に来るのが「利益」である。

Lastly, the apparance and assurance of Priuate commodity to the particular vndertakers, by recouering and possessing to them-selues a fruitfull land, from whence they may furnish and prouide this Kingdome, with all such....necessities, & defects vnder which we labour, and are now enforced to buy, and receiue at the currencie of other Princes, vnder the burthen of great Customes, and heauy impositions,... (A4)

ここで言及している "Priuate commodity" はヴァージニア会社への投資からの利益ではなく、「肥沃な土地」ヴァージニアでの農産物栽培から生ずる利益である。英国内で不足し他国に依存しなければならない農産物のヴァージニアからの供給により、他国からの経済的自立を目指す英国の政策と一致する利益である。これまで見てきた勅許状、ジョンソン、グレイと同様な内容の宣言書である。最初にヴァージニア植民の宗教的使命、対スペイン政策の一環としての植民及び豊かな土地ヴァージニアからの収益、これらがこの宣言書で述べられている。ジョンソンやグレイと異なり先住民の土地への植民についてはそれほど詳細には触れられていないが、これまでの植民の経過を述べ、ヴァージニア植民に対して様々なうわさ、中傷が流れていた中でヴァージニア会社は必死にそれらを打ち消し、植民の正当性・妥当性を訴え、植民への人々の関心を引き起こそうとしている。同じ1610年0年にもう一度ヴァージニア会社への誹謗反駁のために宣言書が出版されている。*Trve Declaration of the estate of the Colonie in Virginia, With a confutation of such scandalous reports as haue tended to the disgrace of so worthy an enterprise*⁽⁹⁾ がそのタイトルである。タイトルにもあるようにヴァージニア植民現状の紹介とヴァージニア植民誹謗への反駁を目的として書かれた宣言書である。宣言書の著者は、ヴァージニア植民を(1)合法性(2)実現可能性(3)利益性、の三点から考察し、ヴァージニア植民はいずれにも合致することを指摘する。植民の第一の目的は宗教[キリスト教]を原住民に植え付けることであり、二番目の目的は国家の名誉と利益である。更に福音を述べ伝えることは確定した真理であるとも言う。

whether it bee not a determined truth, that the Gospell should bee preached, to all the world, before the end of the world? (B)

福音を異教徒に述べ伝えることは絶対的な真理であるが故に、ヴァージニア植民の合法性はたとえそれが先住民の土地への進出であっても許される行為となる。ここでも植民という海外進出が宗教の名の下に合法化されているのである。宣言書ではキリスト教布教の大前提のもとに植民の合法化を強調するが、それでは聖書からの植民合法性についてはどうなのか。これについて宣言書はオリゲネスの「神の行動は我々[人間]の訓令である」を引用して、創世記11章をあげる。神は "scattering those clouen people, into as many colonies ouer the face of the earth, as there are diuersities of languages in the earth"(A3) と述べ、植民は神によって始められたと言う。神以上にすぐれた始まりはなく、神の英知は疑問の余地

がなく、後世に神の足跡は模倣されているとも言う。ヴァージニア植民の先例を聖書に見出し、それによってヴァージニア植民を正当化しようとするのはこれまでの方法と同様である。聖書に記されていることとヴァージニア植民は同様であると言うことによって人々の疑念を取り去り、安心感を与えるのである。宣言書では聖書以外にも過去の歴史から植民の事例を引き出し、ヴァージニア植民が初めてではないことを強調する。宣言書では最初に植民の宗教性を論じ、ヴァージニア植民の本来の目的をキリスト教布教に置く。それではヴァージニア植民の利益はどうか。ヴァージニアの土地の豊かさ、穏和な気候、統治形態、植民者の状態及び信心深い植民者の態度から植民が不可能であるはずはなく、必ずや植民は成功すると述べる。ヴァージニアの肥沃な土地に言及することはこの宣言書以前と同様で、ヴァージニア会社出版の公式文書では土地の肥沃さには必ず触れることになっている。ここで注意しなければならないことはヴァージニア会社の構成は会社に利益の還元を期待し、投資をする人と実際にヴァージニア植民へ赴いた人の二組から成っていたという点である。宣言書では前者のロンドンに留まり、ヴァージニア会社へ投資し、利益を期待する人々には触れず、ヴァージニア植民者について触れているのである。ヴァージニアは肥沃な土地に恵まれており、現在英国がヨーロッパ諸国に依存している産物がすべてヴァージニアで調達でき、不足するものは何もない。これほどの条件に恵まれながらもヴァージニア植民は結果が思わしくない。追い打ちをかけるように様々な悪い噂がヴァージニアから英国へ伝ってくる。宣言書によればヴァージニア植民の結果がかんばしくないでヴァージニア評議会は植民の継続か中止かを議論し、ヴァージニアにいるトマス・ゲイツ(Thomas Gates)を本国に呼び寄せ、ヴァージニア植民の現状を問いただした。宣言書はゲイツの報告に従い、ヴァージニアには英国の必要とするものがすべて手に入るという。木材、カイコのえさとなる桑の木(これによりイタリア産出の絹と同じ量の絹が短時間において期待できる)、鉱物(ヨーロッパの鉄に匹敵する良質の鉄となる)、索具の原料の麻大麻や亜麻、チョウザメのいる川、ブドウ、毛皮の材料となるビーバー、狐、リス、各種の果物、穀物(英国よりの三倍の収穫が見込まれる)等、あらゆる物が直接ヴァージニアから調達できるのである。英国が他国に依存している産物が直接ヴァージニアから調達することにより英国の経済が自立できるという最大のメリットがある。これは英国の他国からの経済的自立の観点から見れば、単なる利益とか収益とかいう個人的なレベルではなくより大きな国家的なレベルへと論点が移っていく問題となっている。作者の意図は個人的な利益をヴァージニア植民から期待するのではなく国家全体の利益に資するような利益を考慮すべきだということである。他国への経済的依存を脱し、自給自足の経済を強調する宣言書はヴァージニア会社への出資者、ヴァージニア植民者に愛国心を煽ることになる。宣言書の作者はヴァージニア植民の目的をキリスト教布教に置き、植民の商業性をできるだけ希薄にしようとしている。一般人の関心が植民の利益性にあったなかで作者は意図的に宗教へ視点を移し、商業的性格の強いヴァージニア会社・植民活動を背後に移している。これら宣言書の内容はしかし、これまでのヴァージニア会社の公式文書と比べた場合、それほどの違いはない。特徴としては英国経済の自立をからめてヴァージニア植民を論じていることである。

ヴァージニア評議会は1612年、1609年に *Nova Britannia* の出版を許可したロバート・ジョンソンに *The New Life of Virginea: Declaring the Former Successe and Present*

Estate of that Plantation, being the second part of Noua Britannia 出版の許可を与えた。⁽¹⁰⁾モスクワ、東インド会社総督でヴァージニア会社評議員の Sir Thomas Smith へあてて書かれたものである。その献呈で執筆の動機を明らかにしているように、それはヴァージニア植民への様々な誤解・中傷から植民事業の正当化を説くとともに投資家及び植民者に勇気と激励を与えようとするものである。ヴァージニア植民は国家の威信を賭け、国家の政治的・社会的・経済的諸問題の解消と国外的には大陸諸国への依存脱却を意図した国家プロジェクトで、単なるヴァージニア植民だけを目指したものではない。1610年の宣言書で強調されていた国家プロジェクトとしてのヴァージニア植民をジョンソンは強く意識し、ヴァージニア植民当初は植民を全面的に支持する。会社の存続が危ぶまれてくる1620年前後から会社及び会社関係者を批判する立場にまわるが *The New Life* ではまだヴァージニア植民に対して協力的姿勢を示している。これまでの宣言書や宣伝文書とはやや異なりヴァージニア植民の利益性を前面に持ち出さず、ヴァージニアの過去・現在・未来に触れ、ヴァージニア植民の現状は厳しいが決して破棄されるべき事業ではないことをジョンソンは強調する。我々の興味を引くのはジョンソンがヴァージニア植民の現状をいかに見ているかである。ジョンソンは植民の目的を王、国家、キリスト教に置き (D3)、商業性に触れることを避けているところがある。ただ宣伝文書の常套としてヴァージニアの肥沃な土地、豊かな自然、産物に触れてはいる。しかしこれまでの宣伝文書と異なり、直接的にヴァージニア会社及び植民からの利益は取り上げない。会社の宗教的使命についてジョンソンは聖パウロの異教徒改宗のための伝道活動に触れた後で次のように言う。

This is the worke that wee first intended, and haue published to the world to be chiefe in our thoughts, to bring those infidell people from the worship of Diuels to the seruice of God. This is the knot that you must vntie, or cut asunder, before you can conquer those sundrie impediments, that will surely hinder all other proceedings, if this be not first preferred. (E3)

「異教徒」を「悪魔の崇拜」から「(キリスト教の) 神への奉仕」へと至らせることがヴァージニア植民のそもそもの目的である。この改宗があつて初めて植民は万難を克服し、植民成就へと至ることができる。更にジョンソンは先住民の改宗に留まらず、原住民の子供への教育の重要性をも説く。彼らを非文明化された状態から文明化へ教化することがヴァージニア植民者の義務ともなるからである。彼らにキリスト教を教え、教化する際には「忍耐」と「人間性」が必要で決して暴力に走ってはならない。あくまでも平和に事を進めなければならず、かくしてヴァージニア植民から "earthly benefits" が自ずと生じてくる。このようにジョンソンは原住民への平和的なキリスト教布教の重要性を力説すると同時にジェームズ一世はキリストに匹敵する "King of peace" となりうることを示唆する。(F) 平和的なキリスト教布教を力説するジョンソンは他方でヴァージニア植民への人々の打算的な関心を批判し、スペインへのライバル意識から即座にヴァージニアへ行くべきだと言う。特に後者のスペインとのアメリカにおける覇権争いはこれまでも論じられてきており、格別新しいことではない。スペインに遅れをとればヨーロッパのみならず新世界アメリカにおいてもイギリスはスペインに劣勢となる。新しい植民地建設は国内外の山積する問題を解決するにあたり是非成功させなくてはならない事業であり、"that viprous brood" (G3)

のヴァージニア進出は阻止しなくてはならない。ヴァージニア植民の宗教的使命と同時に愛国心を扇ぎたて、人々の眼をヴァージニア植民へ向けさせようとする愛国者ジョンソンの姿がかいまみられる。しかしいかには高尚な理想的な理念を掲げても一般人がすぐさま諸手を挙げてその理念の実現に奔走するかは極めて疑問である。理想的な大義名分の裏にはより現実的な即座に入手できるものが必要である。ヴァージニア植民の場合それはヴァージニア会社への投資からの利益の還元であることは誰の眼から見ても明らかである。ジョンソンは *The New Life* でこの問題にはできるだけ触れないようにしていたが、しかしこの利益還元という現実の問題を論ずることなしには人々をヴァージニア植民へ送ることはできない。*The New Life* の終わり近くでジョンソンは次のように言う。

It hath been alreadie declared to the world in sundrie discourses, containing sufficient encouragement to men of vnderstanding, and therefore not needfull heere to lay out againe, the vndoubted certaintie of minerals, the rich and commodious meanes for shipping, and other materials of great vse, ... (G3)

ヴァージニアには確実な鉱物が、イギリスへの輸送には不自由せず、有益な原料がある。更には土壌、気候、貴重な植物と植民者に不利益をもたらすようなものは何もない。

And besides al which things, that Nature hath already seated there, the soil and climate is so apt and fit for industrious mindes, to make plantation of so many pretious plants...for the vse of mankind and trade of merchants, as to the sense and reason of such as haue seene it, no Countrie vnder heauen can goe beyond it. (G3)

「宝物」に富むヴァージニアに行かないことはない。ヴァージニアの豊かな資源、植物を見ればいかにヴァージニア植民への中傷が間違っているかが理解できる。ジョンソンはヴァージニア植民者の利益について言及し、ヴァージニア会社への投資者の利益についてはあまり触れていない。ただ *adventurers* に全く触れていないかというとはそうではなく、実際には触れているのである。ジョンソンは *adventurers* を (1) 即座の利益を期待し、植民の情勢が不利になるとすぐに植民から手を引いた人 (2) 三年間で三人の *adventurer* を会社へ供給することを引き受けたが最初だけで終わった人 (3) 植民に対して理解を示し、時間も金も惜しまず植民遂行に熱意を示した人、この三組に分類しているが、最後の *adventurer* に対してすらジョンソンは利益の確約はしない。ジョンソンは *Nova Britannia* でも露骨にヴァージニア植民の利益には触れず、もっぱら植民の宗教的使命を強調していた。*Nova Britannia* と比較すると、*The New Life* は読者へのインパクトが弱い。それは宣伝文書と言え、*Nova Britannia* ではヴァージニア植民を聖書から援護し、文体全体に植民のイメージの拡大があり、読者を引きずり込む緊迫感があったが、*The New Life* では聖書からの援護も少なく、作者ジョンソンの熱意がそれほど伝わってこない。宣伝文書としてはやや迫力に欠ける印象を与えないでもない。*The New Life* でジョンソンは新しいヴァージニア植民の生活を描き、世間で言われているようにヴァージニア植民が絶望的な状況にあるのではなく、植民の未来は明るいことを言いたかったのである。その観点から意図

的に植民の利益、商業的活動に触れるのを避けたとも言えるが、一般人の最も関心が高かった利益を論ずることはしなかった。植民の利益については *Nova Britannia* で触れているから今更論ずることもないとジョンソンは判断したのかもしれない。いずれにせよ *The New Life* では植民の宗教的使命が強調されて会社の商業的性格には触れられていないことは注目に値する。

1613年ヴァージニア・ジェームズタウンのピューリタンの牧師アレグザンダー・ウィテーカー (Alexander Whitaker) が現地からロンドンのヴァージニア評議会・ヴァージニア会社へ植民の現状を伝える *Good News from Virginia* を出版する⁽¹¹⁾。これはヴァージニア現地からの報告書であり、しかもピューリタンの牧師によって書かれていることからかなりの信憑性が期待できる報告書であると考えられる。ピューリタン牧師の見たヴァージニア植民の実体はいかなるものであるか、次にこれに触れてみたい。

ウィテーカーの *Good News from Virginia* はタイトルから判断するとヴァージニア現地の単なる報告書の印象を与えるが、実は説教の形式を取った聖書解釈からのヴァージニア植民擁護の報告書で、ヴァージニアの現状には後半で触れているにすぎない。この報告書には同じピューリタンのウィリアム・クラショー (William Crashaw) の序文があり、そこでなぜウィテーカーが *Good News* を書くに至ったかを述べている。彼によればヴァージニア植民に対する様々な中傷が飛び交っており、ヴァージニア植民への人々の熱意が冷えることを恐れてウィテーカーは *Good News* を書いたのである。クラショーはヴァージニア植民を福音布教の観点からのみ考え、ウィテーカーもその使命に燃えてヴァージニアへ行ったのである。ヴァージニアにはサタンが住み着いており、そのサタンと戦うために「ヴァージニアの使徒」 (Apostles of Virginia) としてヴァージニアへ行ったのである。宗教的使命をヴァージニア植民の第一目標とクラショーは考えるが、ウィテーカーが *Good News* を書く際に取り上げた聖書の一節は「伝道の書」11章1節の "Cast thy bread vpon the waters: for after many daies thou shalt finde it" 「あなたのパンを水の上に投げよ。多くの日の後、あなたはそれを得るかである」である。ウィテーカーの意図は神の国建設を目的としたヴァージニア植民への人々の関心は専ら金銭的な利益にあり、しかも即座の利益を望む物が多いことを指摘することである。しかもヴァージニア植民の現状はおもわしくなく、当初期待していたほどの実績をあげることができないでいる。それ故、人々のヴァージニア会社・植民への投資も思うようにいかない。このような悪循環を断ち切り、停滞したヴァージニア植民への人々の関心を更に喚起するために、ウィテーカーは聖書の一節を解釈し、それをヴァージニア植民に適応することによって植民への精神的援助を行うのである。この手法はこれまでも見てきたように多くの宣伝文書作者が利用していたものであり、またヴァージニア会社擁護の説教家がすべて利用した手法である。ウィテーカーが「伝道の書」を持ち出したねらいは、ヴァージニア植民は金銭的利益が目的なのではなくキリスト教布教がそもそも目的なのだということ、それにヴァージニア植民は神によって導かれた植民であるということである。これまでの宣伝文書とは異なり宗教的色彩が極めて強いものとなっているが、作者がピューリタンということもあってピューリタンのヴァージニア植民への態度を知るうえで興味深い。ウィテーカーは伝道の書の一節を以下のように解釈する。つまり援助を必要としている人に物惜しみせず施しをすれば、神はその慈善を見ているから、すぐには報いはないが現世においても来世においても必ずや神から報いが

あるというのである。

Giue liberally thine almes to all sorts of men, that may stand in need of thy helpe: hide not thine eyes at the miserable state of the afflicted; neither stop thine eares at the crie of the poore, though they be not able to recompence thy wel-doing: reproach not thine enemies, when he is punished, but rather ouercome his euill deeds withn thy goodnesse; neither suffer any to returne empty handed from there, whom God shall offer to thy liberality. (E)

神からの報いについては次のように言う。

For though thou canst not presently expect a plentiful reward of thy wel-doing, though the persons, to whom thou hast cast thine almes, bee not able to requite thee, or forgetfull of good turnes, yet be assured of it, that God beholdeth thy charitie, and at his appointed time requite thee, euen in this world, if it be good for thee, thou shalt taste of his bountie, but in the world to come hee hath reserued for thee a most glorious crowne of blessed immortalitie. (E)

現在は利益は期待できないが必ずや神からの報いはあるのだということをウィテーカーは本書で何度も繰り返す。性急な利益を期待すべきではないという主張は説教家達特にジョン・ダンが最も力説した点であったが、ウィテーカーはヴァージニア植民からの即座の利益を期待する人達に警告を発するのである。利益よりまずヴァージニア植民に物惜しみせずに投資をすることが異国における神の国建設に与ることであるという認識を新たにすべきなのである。神の栄光のために資力を惜しむことがあってはならないのである。神からの報いについてウィテーカーは次のようにも言う。

...though God doe not presently reward our well doing, but doe deter the requitall of it for many daies, yet thy good works shall not perish, but God at the appointed time, shall abundantly recompence thy liberality. (G3)

"the appointed time" がいつかは神のみが知ることである。しかしそのときには神は「善行」に対して必ずや報いてくれるのである。神からの報いに対して性急になることはないというウィテーカーは次のように言う。

Be not ouer hastie with God: God will not yet reward you, that he may make you more famous in the world, that the world may see your zeale, and beare witness to the patience of your faith, not to greedie haste of couetous desires. (H2)

イスラエルがカナンに定住できるまで40年を要し、最近では東インド会社が利益をあげうまで3年間かかり、スペインやポルトガルが西インド諸島に土地を構え利益をあげるまで様々な困難に遭遇してきた。これらを考えるとヴァージニア植民は決してあきらめるべきではない。ウィテーカーは世俗的な利益を植民に求めるのでなく、むしろ神の王国をヴ

ヴァージニアに建設するのだと植民の宗教的使命を強調する。

Awake you true hearted English men, you seruants of Iesus Christ, remember that the Plantation is Gods, and the reward your Countries. Wherefore, aime not at your present priuat[e] gaine, but let the glory of God, whose Kingdome you now plant, & good of your Countrey, whose wealth you seeke, so farre preuaile with you, that you respect not a present returne of gaine for this yeare or two; but you would more liberally supplie for little space, this your Christian worke, which you so charitably began. (H3)

神の王国を異境の地に建設することによって神が何も報いを約束しないかというところではなく、神は「伝道の書」でも「多くの日の後、得る」と言っている。神はアブラハムにカナンの地を、ソロモンには英知と富を、神の子としてキリストをそれぞれ約束し、神の約束に偽りはなかったことを証明している。ならばヴァージニア植民において神が約束を守らないことがあろうかとウィテーカーはヴァージニア植民への神の約束の確かさを疑わない。とにかく物惜しみせずヴァージニア植民へ協力すれば、必ずや報いはあるのだ。世俗的な金銭的な利益は求めるべきではない。ヴァージニア植民の使命をキリスト教布教においたピューリタン・ウィテーカーの熱弁が遠くヴァージニアからロンドンにまで直接響くような熱弁である。これまでの現地からの報告書は単なる事実の羅列に終始し、イメージの広がりには欠ける点があった。しかし、ウィテーカーの報告書は現役のピューリタン牧師の手になるだけに豊富な聖書からの引用・援用による説得は読者を魅了せざるをえない迫力を呈しており、従来の公式宣伝文書とは質を異にしている。何よりも特記すべきはウィテーカーがヴァージニア植民の使命をキリスト教布教におき、現世的な利益還元を最小化していることである。神の国建設の使命に燃えたピューリタンのヴァージニアからの報告書は殊更ヴァージニア植民の商業性には触れない。ヴァージニア植民には神の奇跡があり、「神の手」があるというが、ヴァージニアという土地そのものも神によって美化された地である(I)。ウィテーカーはヴァージニアの豊富な資源、産物に言及し、植民にとっては理想の地であることを示唆する。最後に次のようにウィテーカーが言うとき、彼は改めてヴァージニア植民の目的を高らかに掲げ、人々の心をヴァージニア植民へと煽るのである。

...remember that you fight vnder the banner of Iesus Christ, that you plant his Kingdome, who hath already broken the Serpents head: God may deferre his temporall reward for a reason, but be assured that in the end you shall find riches and honour in this world, and blessed immortality in the world to come. (I3)

ヴァージニア植民の宗教的使命の強調はこれまでの公式宣言書や現地からの報告書では見られなかったものである。戦闘的伝道者、悪魔の首を折った神及び神の国建設はいずれもピューリタンの特性を表すものとして興味深い。いずれにせよ俗世の富を嫌い、すべてを神のために注げというウィテーカーの主張はピューリタン以外の一般の読者にいかなる影響を及ぼしたかは推測の域を出ないが、ピューリタンのメンタリティを知る上で重要な報

告書となっている。

1615年、ヴァージニア植民秘書ラルフ・ヘーマーが1614年6月までのヴァージニアの現状報告書 *A True Discoverse of the Present State of Virginia, and the Successe of the Affaires there till 18 of Iune, 1614* を出版した。⁽¹²⁾ これは主としてそれまでの植民の結果とイギリス植民者とインディアンとの友好的な関係を報告したものである。この報告書だけなら特に我々の注意を引くことはないが、それには「読者へ」なる一文が添付されており、この小文がヘーマーのヴァージニア植民への真意を知るうえで極めて興味深い。なぜならそこでヘーマーはやはり宗教性の強い植民を強調しているからである。最初にヘーマーは次のように言う。

...what is more excellent, more precious and more glorious, then to conuert a heathen Nation from worshipping the diuell, to the sauing knowledge, and true worship of God in Christ Iesus? what more praiseworthy and charitable, then to bring a sauage people from barbarisme vnto ciuilitie? what more honourable vnto our countrey, then to reduce a farre disioyned forrainge nation, vnder the due obedience of our dread Soueraigne the Kings Maiestie? what more conuenient then to haue good seates abroade for our euer flowing multitudes of people at home? (G3))

ここにはこれまで言及されてき、これ以後も繰り返し強調される植民の宗教的使命が要約されている。異教徒の悪魔崇拝からキリスト教という真の宗教への改宗、原住民の未開な状態から文明化への教化、原住民の国王への服従、及びイギリス国内の急増する人口解消策としての植民、これらをヘーマーは述べる。ヴァージニア植民が単なる植民として終わるのではなく、イギリス国内の政治・社会とも密接に関連する国家的な事業であることをヘーマーは読者に訴えている。ヘーマーはヴァージニア植民への否定的な成果への一つの反論として旧約聖書の民数記を援用する。ヴァージニア植民と類似したエピソードをカナンの地を探索に行ったイスラエル人達の報告に見いだす。これはモーゼに命令されて約束の地カナンを探りに行ったカレブとヨシュア達の報告に関する箇所である。カナンの地を探りに行った人達のなかにはカナンの地に対して賛否両論があった。カナンは「乳と蜜の流れる地」であるが、そこに住む人達は強く、その町々は堅固で大きいのでイスラエル人は住むことができないと言う人達、それに対してカナンの地を攻撃し奪取することは可能だとモーゼに進言したカレブとヨセフである。主の命令に反し、カナンの地は征服不可能でその上下劣な中傷を言いふらす人達をモーゼは「疫病をもって彼らを撃ち滅ぼし」「あなた(カレブ)を彼らより大いなる強い国民としよう」と言っている。人々の嘆きを静め、カナンの地は「非常に良い地」であり、主の命ずるままにカナンの地征服を主張したカレブとヨシュアに耳を傾けなければならない、とヘーマーは言う。カレブは次のように言った。

Let us goe up at once and possesse it, for vndoubtedly we shall ouercome it; (H)

人々の中傷・批判をものともせず、ただ主の教え通りに実行すれば約束の地カナンは得られ、主からの祝福がある。しかもカナンの地をイスラエル人は武力ではなく「寛大」「愛」

「友好」「宗教」によって獲得した。このようにヘーマーは民数記からヴァージニア植民を擁護し、人々を激励する。ヘーマーは民数記をヴァージニア植民に適応するのである。なるほど今は植民はうまくいかず、人々から中傷・批判があるかもしれないがしかし、気にすることはない。なぜならば聖書でも同様なことがあったが神が成功へと導いてくれたからである。ヘーマーは、ヴァージニアをカナンに、植民者をイスラエル人にたとえ、巧みに論を展開し、ヴァージニア植民は必ず成功すると言うのである。ヘーマーにとって、ヴァージニアは "heavenly new Ierusalem" (H2) にも等しい地である。かくしてヴァージニア植民に対し疑心暗鬼になっている人々の不安を払拭しようとする。それではヴァージニア植民のもう一つの関心事である「利益」についてはどうか。ヘーマーはこれについて次のように言う。

what more profitable then to purchase great wealth, which most nowadaies gape after ouer-greedily: all which benefits are assuredly to bee had and obtained by well and plentifully upholding of the plantation in Virginia. (G3)

現地からの豊富な産物を購入すれば利益は必ず生ずると言う。とにもかくにもヴァージニア植民事業を支持し、会社に投資をすればよいのである。そして賛同者はただ真面目な植民者を現地へ送れさえすれば、結果は自ずと明らかとなる。そして利益を性急に求めてはならないとも言う。

As for profit it shall come abundantly, if we can with the husband-men, but freely cast our corne into the ground, and with patience waite for a blessing. (H)

ヘーマーは植民の商業性については多く言及しない。ただ植民の収益性については確約できることを強調している。ヘーマーは植民の主要な目的を異教徒の改宗とし、その収益性については軽く触れているだけである。ただ辛抱強く待てさえすればよいのである。ヘーマーのヴァージニア植民擁護はこのようにその宗教的使命及び収益性からなるが、それは従来の主張と変わるところはないのである。

ヴァージニア会社は1624年の解散まで更に二つの宣言書を出版する。1620年の *A Declaration of the State of the Colonie and Affaires in Virginia: with the Names of the Aduenturers, and Summes Aduentured in that Action*⁽¹³⁾ と 1622年の Edward Waterhouse の *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia*⁽¹⁴⁾ である。以下これらのなかでヴァージニア植民がいかに報告されているかを見てみたい。

1620年前後はヴァージニア植民統治に関して重大な変化が生じようとしていた時期であった。ジェームズ一世がヴァージニア植民総督選挙に直接干渉し、時の総督サンディズ (Sir Edward Sandys) の更迭を要求してきたからである。ジェームズ一世はヴァージニア植民評議会が本国の希望に反し、民主的な選出方法で総督を選ぼうとしていたことに難

色を示していた。サンディズはヴァージニア植民の歴史においては燦然たる名を残すが、ジェームズ一世からは本国の指令通りに行動しないことで反感を買っていた。このような時期にヴァージニア会社は1620年6月22日宣言書を出版するが、ジェームズ一世のヴァージニア植民統治への不満は触れられておらず、専らこれまでと同様ヴァージニアが不毛で利益をもたさらないとのうわさが虚偽で悪意に満ちたものであることに反論しているだけである。従来の公式宣伝文書と同様、いかにヴァージニアが肥沃で広大でかつ十分な水に恵まれているかを、穏和な気候、健康的な風土、豊かな自然への賛美とからませて、世間の批判に答えている。植民に専念する人々にとってヴァージニアは神の摂理によってイギリスに取っておかれた土地であり、王と国家にとっては力となり名誉となる土地である(A4)。ヴァージニアは "the richest commodities of most parts of the world" を産出し、現在ロシア、ノルウェイ、デンマーク、ドイツ、フランス、スペイン、ペルシア、イタリアに依存している産物を直接ヴァージニアで入手可能であることを指摘する。ヴァージニアは不毛な土地であるとの批判は誤っており、真実性に欠けることを強調する。イギリスのヨーロッパ諸国からの経済的自立についてはこれまでも論じられてきており、この宣言書が初めてではない。ヴァージニア植民を悪く思ったり中傷したりする人は「無知な人」か「腐敗した心」と「邪な意図」を持った人であると言う。

To conclude, it [Virginia] is a Countrey, which nothing but ignorance can thinke ill of, and which no man but of a corrupt minde and ill purpose can defame.(B)

ヴァージニア植民の正当性をこの宣言書では植民の現状を見ることによって訴える。最初に考えなければならないのはこれまでの植民者の数である。宣言書には A Note of The Shipping, Men, and Prouisions sent for Virginia, by the Treasurer and Company in the yeer, 1619 が付記されており、1619年のヴァージニア植民者1,200人が列挙されている。この数字から見てもヴァージニア植民への人々の理解が薄れたとは思われない。更にヴァージニアでは植民の運営・管理も整然としており、"the laudable forme of Iustice and gouernment" (B) が見られ、何ら問題はない。植民への人々の不安を取り除こうとする姿勢が見られる。これまでのようにヴァージニア植民の宗教的使命や商業的性格をこの宣言書では全面的に扱わない。ただ *adventurers* に対しては12ポンド10シリングで100エーカーの土地が手に入ることに触れているが、出資者がへの即座の利益還元は取り上げていない。ヴァージニアの自然条件から利益の還元が保証されることは言うまでもないと言いたいのであろうか。とにかくヴァージニア植民の現状を見れば、この植民がいかなる性格の植民であるかが理解できる、と宣言書は訴えたいようである。宣言書の最後で "this glorious worke, tending so much to the propagation of the true seruice of Almighty God, to the adding of greatnesse and honour to our King, and to the benefit of our whole Nation in disburdening their multitude"(B3) と言うとき、やはりヴァージニア植民の目的をキリスト教布教、国王への名誉及び急増人口問題解決に置いているのである。最後の文言はこれまでの公式宣伝文書に則した文言であるが、いずれの文書にもこれらの文言が表れるということはキリスト教布教というヴァージニア植民の目的がたとえそれが表向きの目的であったとしても共通の認識であったと言えるだろう。

1622年8月ウォーターハウス (Edward Waterhouse) は *A Declaration of the State of the Colonie in Virginia with a Relation of the Barbarous Massacre in the Time of Peace and League, treacherously executed by the Natiue Infidels, vpon the English, the 22 of March last* を当局の検閲を得て出版した。この宣言書は二つの意味において興味深いものである。一つは1624年にヴァージニア会社が解散するが、その2年前に書かれているということである。ジェームズ一世がヴァージニア植民の統治・管理に意義を唱え、総督人事に介入してき、それに対しヴァージニア植民側は徐々に本国からの影響を脱し、自らの手による選挙によって総督を選び、本国の意図とは裏腹に「民主的に」ヴァージニア植民を管理しようとしていた。もう一つは宣言書にもあるように宣言書出版3カ月前の3月22日にインディアンの襲撃を受け、347名が殺害されたことである。これはインディアンとの友好関係にあったとされていたなかでヴァージニア植民の歴史においては衝撃的な事件であった。このような緊迫した状況のなかでウォーターハウスは依然として従来通りにヴァージニアの肥沃な土地、豊かな資源を賛美し、イギリスが他国への経済的依存から脱却できることを強調しているのである。1620年の宣言書と酷似した内容で、1620年の宣言書もウォーターハウスが書いたのではないかと思わせる。たとえば次の文章は上に引用した文章と同一である。

To conclude...it [Virginia] is a Countrey which nothing but ignorance can thinke ill of, and which no man but of a corrupt minde & ill purpose can defame. (B3)

ウォーターハウスは、ヴァージニア植民の現状を土地の肥沃さ、豊富な資源、植民の実績から擁護し、人々の植民への不安を取り除こうとしている。これまでは1620年の宣言書の繰り返しで、格別新しさはない。1622年の宣言書で注目すべきはここでウォーターハウスが同年3月のインディアン襲撃に直接言及し、インディアンへの強硬な態度を表明していることである。これまでインディアンはイギリス人と比較的友好的な関係にあったが、彼らの裏切りにより347名ものイギリス人が殺害され、その名前はすべて記されている。インディアンはイギリス人の恩に仇で返すような残虐な行動をし、ウォーターハウスは彼らの裏切り行為を激しく攻撃し、"Viperous brood"、"wicked Infidels"(D) への露わな感情を示している。ウォーターハウスはこの事件を契機に (1) 裏切り行為への処罰 (2) インディアンの土地の没収 (3) インディアンの産物のイギリスの所有 (4) インディアンの教化よりは征服 (5) 奴隷としてのインディアン使用 (6) インディアンの虐殺事件の今後への教訓 (7) インディアン襲撃事件をイギリス人慰めの契機とすること、を強調する。ヴァージニア植民擁護者・支持者としてウォーターハウスはインディアン襲撃事件を単なる事件として終わらせることはしない。ウォーターハウスは、歴史を見ても大事業には必ず大惨事や危害がつきもので、ヴァージニア植民が経験したインディアン事件もイギリスが大事業を行っている証であり、何もくじけることはないと言う。大国は幾多の困難を経て初めて偉業を達成できると檄をとばすのである。いわば災い転じて福と成す精神である。"constancy" と "courage" で難局にあたるべきで(E3)、植民の機は熟しているとウォーターハウス言う。

To conclude then, seeing that Virginia is most abundantly fruitfull, and that this Massacre must rather be beneficiall to the Plantation then impaire it, let all men take courage, and put to their helping hands, since now the time is most seasonable and aduantagious for the reaping of those benefits which the Plantation hath long promised: (F)

幾分扇情的な印象も免れないが、インディアン襲撃事件後のヴァージニア植民への疑念・不安除去のためにはこれ位の檄は必要であった。インディアン襲撃を悲観的に見ないで逆境をばねに更なる植民遂行へと読者を駆り立てるレトリックの強い文章となっている。これまでの宣伝文書に見られたヴァージニア会社の宗教的使命や利益性にはほとんど触れていないが、ただ12ポンド10シリングの出資に対する100エーカーの土地の提供については前回同様触れている。全体的なまとめとしてウォーターハウスは次のように言う。

Lastly, it is to be wished, that euery good Patriot will take these things seriously into his thoughts, and consider how deeply the prosecution of this noble Enterprise concerneth the honor of his Maiestie and the whole Nation, the propagation of Christian Religion, the enlargement, strength, and safety of his Maiesties Dominions, the rich augmentating of his Reuenues, the imploiment of his Subjects idle at home, the increase of men, Mariners and shipping, and the raising of such necessary commoditie, for the importaion of which from forren Countries so great and incredible summes are continually issued and expended. (F)

ここにヴァージニア植民の目的がすべて列挙されている。ヴァージニア植民は(1)国王と国家全体の名誉(2)キリスト教の布教(3)国王領土の拡張、教化、安泰(4)国家収入の増大(5)無職者の雇用(6)植民者、水夫、輸送の増加(7)必要産物の栽培、に関わる「崇高な事業」である。ヴァージニア会社が単なる商業的事业ではなく国家全体に関わる事業であることをウォーターハウスは述べる。これらすべてはこれまで論じられてきたことであって、ウォーターハウスはそれを繰り返しているにすぎない。ただここでもキリスト教布教をヴァージニア植民の目的の一つに挙げていることに注目したい。ウォーターハウスの宣言書の新しさはインディアン襲撃事件に言及したことで、ジョン・スミス(John Smith)は1624年出版の*The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summer Isles*のインディアン襲撃事件記述(第四卷)でほとんどすべてウォーターハウスの記述に従っている。⁽¹⁵⁾ウォーターハウスはインディアン襲撃事件を更なる植民の発展の契機にしうることを強調し、ヴァージニア会社及び植民者を励ましている。しかし、キリスト教布教や植民の利益性にそれほど言及していないことは従来の宣伝文書の性格からすればルール違反の感がないでもないが、巧みに読者を植民へと煽るレトリックにはヴァージニア会社擁護の説教を思わせるものがある。

1606年にジェームズ一世から最初の勅許状を得て、国王公認のもとにヴァージニア植民は本格的に始まった。本論では三つの勅許状、ヴァージニア会社出版の宣言書、及び個人の現地からの報告書等を吟味することによってヴァージニア会社・植民の実体をさぐるようになってきた。本論の目的は公式のヴァージニア植民関係書類と私的な個人のヴァージニア植民への見解からヴァージニア会社及び植民の核心へ迫ることである。本論では後半

の個人のヴァージニア植民からの報告書、旅行記、書簡を扱えなかったが、これらについては次章で論じたい。

注

- (1) Perry Miller: *Errand into the Wilderness* (Massachusetts: Harvard University Press, 1956), Chapter IV 参照。
- (2) S. M. Kingsbury (ed.): *Records of the Virginia Company of London* (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1906-1935), vol. I, p. 23.
- (3) ハクルート「西方植民論」(東京: 岩波書店『イギリスの航海と植民二』、1985)、特に第20章参照。
- (4) *The Three Charters of the Virginian Company of London with Seven Related Documents; 1606-1621 with an Introduction by Samuel M. Bemiss* (Virginia, 1957), p.2. 以下勅許状や規約・指示・命令を引用する際は頁数のみを記す。
- (5) 『イギリスの航海と植民二』(東京: 岩波書店、1985)、p.19, p.20.
- (6) テキストは以下を使用した。Robert Johnson: *NOVA BRITANNIA* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1975) 以下頁数のみを記す。
- (7) テキストは以下を使用した。 *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613 Facsimile Reproductions of Works by Robert Gray, Richard Rich and Alexander Whitaker* (New York, 1976) 以下頁数のみを記す。
- (8) テキストは大英図書館所蔵による。以下頁数のみを記す。
- (9) テキストは大英図書館所蔵による。以下頁数のみを記す。
- (10) テキストは以下を使用した。Robert Johnson: *THE NEW LIFE OF VIRGINEA* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1971) 以下頁数のみを記す。
- (11) テキストは以下を使用した。 *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613 Facsimile Reproductions of Works by Robert Gray, Richard Rich and Alexander Whitaker* (New York, 1976) 以下頁数のみを記す。
- (12) Ralph Hamor: *A true discovrse of the present estate of Virginia* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc., Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1971) 以下頁数のみを記す。
- (13) テキストは以下を使用した。 *A Declaration of the State of the Colonie and Affairs in VIRGINIA: with The Names of The Adunturors, and Summes aduentured in that Action* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1973) 以下頁数のみを記す。
- (14) テキストは以下を使用した。Edward Waterhouse: *A Declaration of the State of the Colony in VIRGINIA* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1970) 以下頁数のみを記す。
- (15) John Smith: *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summers Isles* (Ann Arbor: University Microfilms, Inc., 1966), p.105 ff.

References

J. Adair: *Founding Fathers The Puritans in England and America* (London: J. M. Dent & Sons

- Ltd., 1982)
- C. H. Andrews: *The Colonial Period of American History* (New Haven: Yale University Press, 1934)
- Philip L. Barbour: *The Three Worlds of Captain John Smith* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1964)
- Philip L. Barbour: *The Jamestown Voyages under the First Charter 1606-1609* 2 vols (Cambridge: At the University Press, 1969)
- Philip L. Barbour: *Pocahontas and Her World* (Boston: Houghton Mifflin Comapny, 1969)
- R. Beverley: *The History and Present State of Virginia* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1947)
- C. B. Bridenbaugh: *Vexed and Troubled Englishmen 1590-1642* (New York: Oxford University Press, 1968)
- A. Brown: *Early Politics in Early Virginian History* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1901)
- P. H. Bruce: *Institutional History of Virginia in the Seventeenth Century* 2 vols. (Massachusetts: Peter Smith, 1964)
- W. F. Craven: *Dissolution of the Virginia Company* (Massachusetts: Peter Smith)
- J. H. Kettner: *The Development of American Citizenship* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1978)
- G. B. Parks: *Richard Hakluyt and the English Voyages* (New York: American Geographical Society, 1928)
- E. J. Payne (ed.): *Voyages of the Elizabethan Seamen to America* (Oxford: At the Clarendon Press, 1893)
- G. W. Prothero (ed.): *Select Statutes and Other Constitutional Documents Illustrative of the Reigns of Elizabeth and James I* Third Edition (Oxford: At the Clarendon Press, 1906)
- David B. Quinn: *Set Fair for Roanoke Voyages and Colonies, 1584-1606* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1985)
- David B. Quinn: *England and the Discovery of America 1481-1620* (New York: Alfred A. Knopf, 1974)
- A. L. Rowse: *The Elizabethans and America* (London: Macmillan & Co Ltd, 1959)
- A. L. Rowse: *Shakespeare's Southampton Patron of Virginia* (New York: Harper & Row, 1965)
- Patricia Seed: *Ceremonies of Possession in Europe's Conquest of the New World, 1492-1640* (Cambridge: University Press, 1995)
- Bernard Sheehan: *Savagism & Civility Indians and Englishmen in Colonial Virginia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980)
- J.M. Smith (ed.): *Seventeenth-Century America* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1959)
- John Stoye: *English Travellers Abroad 1604-1667* rev.ed. (New Haven and London: Yale University Press)
- L. G. Tyler: *England in America* (New York: Greenwood Press, 1969)

- Alden T. Vaughan: *American Genesis Captain John Smith and the Founding of Virginia* (Boston and Toronto: Little, Brown and Company, 1975)
- T. J. Wertenbaker: *The Shaping of Colonial Virginia* (New York: Russell & Russell, 1958)
- T. J. Wertenbaker: *Virginia under the Stuarts 1607-1688* (New Jersey: Princeton University Press, 1914)
- T. J. Wertenbaker: *Give me Liberty The Struggle for Self-Government in Virginia* (Philadelphia: The American Philosophical Society, 1958)
- T. J. Wertenbaker: *The Planters of Colonial Virginia* (New Jersey: Princeton University Press, 1958)
- L. B. Wright: *Religion and Empire The Alliance between Piety and Commerce in English Expansion 1558-1625* (New York: Great Seal Books, 1959)
- L. B. Wright: *The Atlantic Frontier Colonial American Civilization* (New York: Octagon Books, Inc., 1965)
- Louis B. Wright (ed.): *The Elizabethans' America* (Massachusetts: Harvard University Press, 1966)
- Silvio Zavala: *New Viewpoints on the Spanish Colonization of America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1943)

II ヴァージニア会社と公式文書(2)

一私業から始まりジェームズ一世による特許を得て国家的事業としてアメリカ・ヴァージニア植民に本格的に乗り出したヴァージニア会社は当初から様々な問題に直面し、ヴァージニア植民を放棄する決意直前まで事業は暗礁に乗り上げた。ヴァージニア会社は、公式の文書を公表し、植民の実体を隠蔽する「楽園」ヴァージニアを人々の胸に植え付けようとした。ヴァージニア植民の目的はキリスト教・「福音」の普及であり、異教徒の改宗にある。ヴァージニア会社は植民の目的・使命に異教徒の改宗を掲げ、植民行為を正当化しようとした。しかし、公式文書から既に明らかにしたように、ヴァージニア会社のそもそもの本来の目的は植民から期待される「利益」であった。ヴァージニア会社へ出資した人達の最大の関心は「利益」にあった。本論では、ヴァージニア現地からの報告書、旅行記、書簡からヴァージニア植民の実体を解明しようとするものである。論を進めるにあたり、Arthur Barlowe: *The first voyage made to the coastes of America...* (1584), Thomas Hariot: *A True Report of the New Found Land in Virginia* (1588), Ralf Lane: *An account of particularities of the employments of the English men left in Virginia...* (1586), George Percy: *Observations* (1607), Edward Maria Wingfield: *Discourse* (1608?), John Smith: *A True Relation of Such Occurrences and Accidents of Noate as Hath Hapned in Virginia* (1608), Richard Hakluyt: *A particular discourse concerninge the greate necessotie and manifolde comody growe to this Realme of England by the Westerne discoveries lately attempted* (1584), *The Principall Navigations, Voiages, Traffiques and Discoveries of the English Nation...* (1589; 1598-1600), William Strachey: *The Historie of Travell into Virginia Britania* (1612), Richard Eburne: *A Plaine Path-way to Plantations* (1624), Samuel Purchas: *Hakluytus Posthumus (or Purchas His Pilgrimes)* (1625), 等から彼らがいかなる目的をもってヴァージニアへ行ったか、何をヴァージニアで実際に行ったのかを調べ、更に他の現地の書簡、ヴァージニア会社に関するパンフレット等からヴァージニア植民の実体、現状を明らかにしたい。

1

1606年ヴァージニア会社がジェームズ一世の特許状を得て、本格的にイギリスの国家的事業としてヴァージニア植民に着手する以前からイギリスは世界各地へその植民地を広げようとしており、ヴァージニア植民はそれらイギリスの植民地確保事業の一環であった。ジェームズ一世の特許状を得る前にもイギリスはヴァージニアへの数々の植民を試み、その報告書から我々は植民の実体をつぶさに見ることができる。そもそもイギリスがスペインが制覇していたフロリダの北のヴァージニアに植民地を建設しようとした意図はどこにあったのか。この問題はまたなぜイギリスが北米の植民地建設にあれほどまでの熱意を示したのか、にも通ずる大きな問題である。島国イギリスが海外植民地を建設しようとした背景には何があったのか。植民活動は単なる個人の冒険心からではなくイギリスの政治、社会、経済問題が密接にからみあったなかから生じてきたものであると言わねばならない。ヴァージニア植民以前にイギリスの植民活動についてその理論的な基盤となった書にハクルート (Richard Hakluyt) が1584年に書いた『西方植民論』(このフルタイトルは上記

の通りであるが通常 *Discourse of Westerne Planting* と記される⁽¹⁾)がある。この書はイギリスの海外進出の理論的支柱となった書で、イギリスの海外進出問題にとっては欠くことのできない書であるが、そこでハクルートは彼以後のイギリス植民者の行動の指針となるべく殖民政策の正当化を強く時の女王エリザベスに訴え、イギリスの海外進出の必要性・重要性を説いている。ハクルートによればイギリスの海外進出・植民のそもそもの理由はイギリスの社会及び経済にある。大国スペインの西インド諸島制覇に対抗しての北アメリカにおける活動の拠点としての西方殖民を力説しながらも、その第1章では西方殖民の第一の理由を「キリスト教の信仰」の「宣べ伝え、教え広めてゆく責任」と考え、それが「なにを置いても、まず真っ先にやられるべき主要な仕事」とし、キリスト教布教のために植民地を作ることが急務だと言っている。ハクルートによれば、キリスト教布教が第一で、植民地建設はキリスト教布教にとっては副次的性格を有するものなのである。しかしこのキリスト教布教は誰の眼から見ても異論の出る余地のない大義名分を借りた植民地建設擁護の口実で、その裏には当時のイギリスが直面した社会及び経済の諸問題があり、それに身動きができなくなっていたイギリスが何とかして自らの打開策を求めようとしていた事実があったのである。その証拠にハクルートは第20章で西方殖民の真の理由をエリザベス女王に訴え、イギリス毛織物の販売、西インド諸島におけるスペイン制覇の阻止、国内失業者の雇用確保等が殖民事業から確保できることを強調しているのである。なぜイギリスが海外に進出しなければならないのか、なぜ植民を行わねばならないのかは単にキリスト教の布教という宗教的次元にとどまる問題ではない。イギリスは西方における殖民成功を契機としたヨーロッパ諸国からの経済的自立を望み、結果として西方殖民がスペイン、ポルトガル、オランダと肩を並べうる超大国への脱却を目指したイギリスの存亡をも賭けた国家的事業であったことが理解出来るのである。イギリス殖民の歴史はハクルートやパーチャス (Purchas) によって詳細に論じられているが、それらはイギリスの閉塞した経済の活路を殖民によって解決しようとする試みであることを示している。その殖民の一端がヴァージニア殖民であったわけであるが、ここにも今見たハクルートの殖民擁護の論理がそのまま反映されている。「帝国主義者ハクルート⁽²⁾」にとってイギリスの殖民活動は経済的な国家の病弊をいやしてくれる格好の手段であった。ハクルートの『西方植民論』は彼以後のイギリス植民に大きな影響を及ぼしたが、彼はまたイギリス国家の将来を海外植民と海外交易に位置づけたイギリス植民史上記念碑的大作である『イギリス国民の主要な航行、航海、交易及び発見』を1589年に書いたが、その序文でも彼はスペインを意識し、イギリスの国威発揚を鼓舞し、次のように述べる。

[it is high time for us]with all speede to direct our course for the milde, lightsome, temperate, and warme Atlantick Ocean, over which the Spaniards and Portugales have made so many pleasant prosperous and golden voyages....this dare I affirme; first that a great number of them have satisfied their fame-thirsty and gold-thirsty mindes with that reputation and wealth.⁽³⁾
(Vol.p.22)

スペインやポルトガルの中南米での植民成功にならぬ、イギリスも西方植民に乗りだし、スペインやポルトガルのような列強に肩を並べることのできる機会を得ることが出来る。

彼はさらに言葉を続けて「イギリスも... アメリカその他の未発見地をスペイン人やポルトガル人と分かち合うことが可能なのだ」ともいう。ヴァージニアは "the great & ample country" であり、その内陸は "so sweete and wholesome a climate, so rich and abundant in silver mines, so apt and capable of all commodities, which Italy, Spaine, and France can afforde,⁽⁴⁾" (pp.39-40) である。温暖な気候、豊富な銀に恵まれ、イギリスがスペイン、イタリアに依存している産物の調達ができる土地、それがヴァージニアである。ハクルートは、国際舞台でのイギリス地位向上をヴァージニア植民に賭け、ヴァージニア植民によるイギリス経済の自立をも植民から求めている。ウィリアムズによれば、ハクルートの登場によって彼以前の黄金探求としてのイギリスの植民政策に一種の帝国主義が台頭し、宝探しに農業に、重金主義が重商主義にとって代わられた⁽⁵⁾。ハクルートは『西方植民論』と『イギリス国民の主要な航行、航海、交易及び発見』において以後のイギリス植民の論理的基盤を形成し、彼以後の植民関係者は大なり小なりハクルートの植民論の反復であると言っても過言ではないだろう。ハクルートはイギリス国家の命運は海外にあることを十分に認識していた。それは他国とりわけスペインの世界の舞台における急激な台頭である。スペインは島国イギリスにとって格好のモデルとなりうる。スペインができないことがどうしてイギリスにできないことがあるのか。このようなイギリス国民の思いを代弁し、イギリス国民を西方植民へと駆り立てたのがハクルートであった。その意味でハクルートはイギリス植民の理論的擁護者であったと言えよう。

ハクルートの書が西方植民擁護の理論書であるとすればバーロー (Arthur Barlowe) の『アメリカ海岸への最初の航海』(*The first voyage made to the coastes of America*) (1584年) はその実践版であると言える。バーローはヴァージニア探検の詳細をウォールター・ローリに報告しているが、そこで彼が語っているのはキリスト教の普及ではなく、まさしくヴァージニアの地勢調査、インディアンとの交渉である。我々はバーローの報告書にキリスト教布教に励むバーローの姿を見ることはできない。バーローにとってヴァージニアはイギリスに「収益をもたらす」土地である⁽⁶⁾。ヴァージニアにおける豊富な動植物、インディアンとの交渉がヴァージニア探検の主目的であり、インディアンをキリスト教に改宗させたとの報告はない。ヴァージニアの豊かな土地に言及してバーローは次のように言う。

ここの土壌は世界でいちばん豊穡で、芳香を放ち、肥沃で健康にもよいようです。香りがよく用材となる樹木が 14 種類以上もあり、その下生えとなっているのは、大概是月桂樹のような木です。イギリスのオークに類した木も土地にあります⁽⁷⁾が、それよりずっと大きく、材質もはるかに上です⁽⁷⁾。

バーローの報告では豊かな土地以外に顕著なのは現地人に対する好意的な見方である。人々は「この上もなくやさしく、愛情に満ち、忠実で、いっさいの術策や裏切りと無縁、黄金時代さながらの生き方」を送っている。彼らより「もっと親切で、もっと愛情豊かな人たちは、世界中どこを捜してもいるはずがない。」⁽⁸⁾ (p. 252) バーローの報告は概して楽観的であると言える。その真意はどこにあったのか。以後のイギリス人の植民に希望を与えようとしたためかあるいはエリザベス女王の機嫌をとり、海外殖民事業への援助を

女王から期待するためであったのかは推測の域を越えないが、ともかくバーローのヴァージニア報告はイギリス人のヴァージニア植民への期待と希望を十分に意識した報告書であると言える。

初代ヴァージニア総督のレイフ・レーン (Ralf Lane) は1585年8月17日から1586年6月18日までロアノーク島を探検しており、彼の報告書はハリオットの報告書と共に以後の植民の "main sources" になった (K.R.Andrews, p.207 footnote) と言われているが、⁽⁹⁾レーンがロアノーク島で行ったことはまさしくロアノーク島の探検調査であり、原住民との友好、敵対関係を通して原住民の性状を記録することであった。レーンは、ロアノーク島探検の主なる目的を「鉱山の発見」と「南海 (太平洋) の発見」とし、「そのいずれかが実現しないことには、我々が探検したこの地域にわが同胞が居住するようにはならないからです。上述の二つの中のいずれかでも発見しえたら、この地域は、この世でおよそ人間の居住するもっとも快適な、もっとも健康な、かてて加えてもっとも豊饒な地となるでしょう。」⁽¹⁰⁾と言いきっている。レーンのロアノーク島探検の目的は鉱山と太平洋への航路発見にあり、原住民のキリスト教への改宗については何も触れられてはいない。ハクルートが強調した「福音」の普及は全く記述されず、その報告書はもっぱらロアノークが英国の植民地としてふさわしい地であるかの実地調査であり、それはまた現地人との接触を通して現地人が「侵入者」に対していかなる態度をとっているのかをもあわせて報告することに終始している。1606年に本格的に始まることになるヴァージニア植民以前の現地からの報告書には共通点がある。それは現地の調査・探検とインディアンとの交流である。ヴァージニアに行った人達は現地の地勢をつぶさに調査し、時には地図を作成し、また行き先々で出会うインディアンとの交渉を通してイギリス人に対して友好的な部族と敵対する部族を分類し、その居住地をも地図に記入することを探検・調査の第一の目的としていたことがわかる。ヴァージニアへの探検家達の報告書はおおよそこのような特徴をもっていたが、1606年以降のヴァージニア会社から派遣された者たちの報告書についても同様なことが言える。

1606年12月の第一次ヴァージニア植民隊としてヴァージニアへ向かい、1609年から1610年までヴァージニア植民総督を勤めた George Percy の『観察』 (*Observations gathered out of a Discourse of the Plantation of the Southerne Colonie in Virginia by the English, 1606*) は最初のヴァージニア植民の現状を詳細に報告しているが、そこに我々が見るのはキリスト教布教に励むパーシーの姿ではない。それは西インド諸島からヴァージニアまでの航海と現地の調査、インディアンとの交流を通しての彼らの生活習慣の記録である。豊饒の地としてのヴァージニアが "...the Country being so fruitfull, it would be as great a profit to the Realme of England"⁽¹¹⁾として描かれ、ヴァージニアがいかに大きな利益をイギリスにもたらすが述べられている。1607年5月ヴァージニア評議会委員長に選任された Edward Maria Wingfield はカトリック教徒である故に委員長を解任されたが彼は *Discourse* を1608年に書き表す。そこで Wingfield は、Newport 船長のイギリス帰国以後のヴァージニアでの出来事を詳細に記すると同時に自らの評議会委員長解任の理由には何ら正当性がないことを述べ、身の潔白を主張する。ヴァージニアでの内紛が語られ、植民の目的や成果については何ら触れられていない。ヴァージニアでの評議会委員長解任劇釈明にすべてがあてられており、評議会委員長経験者から植民についての個人的な

見解は聞かれない⁽¹²⁾。(Barbour: The Jamestown Voyages under the First Charter 1606-1609, Vol. I, pp. 213-234) 1610年ヴァージニア植民の"governour"、"captain-general" に任命された Delaware 卿は、ヴァージニア評議会に書簡を送っているが、肥沃な土地、豊富な物資・植物といったヴァージニアへお決まりの賛辞を送り、ヴァージニア植民は「極めて価値のある事業」で「神の栄光」「国家の名声」「植民推進者のなぐさめ」のためになると言い⁽¹³⁾、さらに、植民は「多くの価値ある産物の収益」をもたらし、国家は「名誉」を、個人は「利益」を獲得できる「名誉ある事業」であると言う⁽¹⁴⁾。デラウエアはヴァージニア植民を宗教的及び商業的な観点からとらえているが、1606年に国家的事業としてヴァージニア植民が始まり、その後現地からはかんばしくない報告が本国に届くなかでデラウエアは必死に植民の意義を再度訴えるのである。

2

ヴァージニア植民は言うに及ばず17世紀イギリスの海外植民地開発に精力的に取り組んだ人物にジョン・スミス(John Smith)がいる。スミスは1606年ヴァージニア会社からヴァージニアへ派遣され、植民地建設に加わり、その間インディアンの捕虜となり、処刑直前に酋長の娘ポカホントスの嘆願によって処刑を免れたり、Jamestown の評議会から死刑の判決を受けたり、更にはヴァージニア植民評議会の議長にまでなった波乱に富んだ生涯を送った半ば伝説的な人物である。ジョン・スミスはヴァージニアに関して主として次の三冊を世に送っている。『ヴァージニア入植についての真実の話』(A True Relation of such occurrences and accidents noats as hath hapned in Virginia since trhe first planting of that colony,... (1608) (以下『真実の話』と略記)、『ヴァージニアの地図』(A Map of Virginia, 1612) 及び『ヴァージニア、ニューイングランド、サマー諸島通史、1584年から現在の1624年にいたる冒険商人、植民者、総督の氏名を付す』(The Generall History of Virginia, New-England, and the Summer Isles with the names of the Adventurers, Planters, and Governours from their first beginning An: 1584 to this present 1624) (以下『通史』と略記)である。いずれもヴァージニア評議会議長にもなったスミスの手になるだけにその信憑性は信じるに値する報告書であると言えるが、自己顕示欲の強いスミスの極端に個人的な個所は削除されたと報告書もあるという。スミスは1608年6月2日フェニックス号がヴァージニアを離れるまでを『真実の話』で扱っているが、スミスはこれまでと同様ヴァージニアの探検・調査を語るが、それは従来のヴァージニア報告と同様である。ヴァージニアは肥沃な土地を有し、豊富な動植物に恵まれている。スミスにとってヴァージニアは、「極めてすぐれた快適な地であり、気候は温暖にして健康的、土地は肥沃、期待しうる産物は(その栽培と育成が適切なら)豊富」で、「さして苦勞もせず利益をあげることができる⁽¹⁵⁾。」しかし、植民の宗教的使命に言及することも忘れない。ヴァージニア植民は「神の栄光を称えるためであり、邪教の徒の間に神の真実の教えを打ち立て、迷信と偶像崇拜とを打ち壊し、何千という迷える羊―彼らは今に至るまで異教と偶像崇拜と迷信という無明の道を踏み迷ってきたのだが―をキリストの囲いの中に導き入れること⁽¹⁶⁾」を目的ともするのである。しかしながら、植民の宗教的使命については報告書ではその実践は見られない。そのほとんどはヴァージニアの土地の調査、特にジェームズ川の上流の探検及びインディア

ン部族との接触、食物交渉であり、また、探検隊内部の内紛でもあり、肝心のキリスト教伝道は全く行われていない。『真実の話』は、ジェームズ川周辺の探検書としてはそれまでの報告書には見られない詳細な記録であるが、ヴァージニア植民の異教徒改宗という理想的な目的は文言だけは力強く響くがその響きは実際にはインディアンには届いていない。報告書の最後で「船荷としてスギ材を積み込めば本国の出資者たちに喜んでもらえる」と言い、「交易や通商の上でも大いに利益をもたらすこの地域」の恩恵にイギリスは必ずや与るとスミスは断言する⁽¹⁷⁾。スミスにとってヴァージニア植民はヴァージニア会社出資者にとっての個人的な利益と国家の利益を同時に確約してくれる殖民であり、キリスト教伝道は実行を伴わない言葉だけのものとなっている。スミスの『ヴァージニアの地図』(A Map of Virginia, 1612)はスミスがポウハタンによって捕虜にされ、処刑直前にポウハタンの娘ポカホンタスによって救助されたというその真偽のほどは定かではない有名なエピソードに触れているが、そこでもスミスの関心事はヴァージニアの探検・調査であり、彼はそれをもとに詳細な地図を作製しているほどである。『ヴァージニアの地図』でスミスはヴァージニアに触れて次のように言う。

The mildnesse of the aire, the fertilitie of the soile, and the situation of the rivers are so propitious to the nature & vse of man as no place is more convenient for pleasure, profit, and mans sustenance. ⁽¹⁸⁾ (p.18)

温暖な空気、肥沃な土壌、川の状況は他の土地には見られない「喜び、利益と植民者の生計」に好都合である。これは『真実の話』でスミスが言及していることで、報告書が必ず言及しなければならない内容のひとつであるが、スミスはヴァージニア植民が国家にいかにも利益をもたらすかを国家の経済的自立の観点から強調する。イギリスは、モスクワ、ポロニア（ポーランド）、スイス、フランス、スペイン、イタリア、オランダが産出する資源をすべてヴァージニアで調達できるとスミスは言う。

Then how much hath Virginia the prerogative of all those flourishing kingdomes for the benefit of our land, whenas within one hundred miles all those are to be had, either ready provided by nature, or else to bee prepared, were there but industrious men to labour. ⁽¹⁹⁾ (p.18)

イギリスのヴァージニア植民の真の目的がこの一節に読みとることができる。イギリスの西方植民の第一の目的はハクルートが『西方植民論』ですでに明らかにしていたように、イギリス経済のヨーロッパ諸国への依存からの脱却であった。イギリス経済の自立を植民に託していたイギリスの悲願が西方植民地開発にあり、スミスもその点については十分承知していたはずである。しかしながらスミスは植民の目的をヴァージニアの経済的開発とはしない。ヴァージニアは兵士の育成、水夫の訓練、商人には交易、善人には利益をもたらす場であるが、しかし何よりも重要なのはヴァージニア植民は「あわれな異教徒を神の真の知識と聖なる福音」へと導く事業なのである⁽²⁰⁾。ここでもスミスはヴァージニア植民の宗教的使命を忘れることはない。スミスはの集大成ともいうべく『ヴァージニア、ニューイングランド、サマー諸島通史、1584年から現在の1624年にいたる冒険商人、

植民者、総督の氏名を付す』(The Generall History of Virginia, New-England, and the Summer Isles with the names of the Adventurers, PLanters, and Governours from their first beginning An:1584 to this present 1624) (以下『通史』と略記)ではどうか。6巻から成る『通史』はハクルート、パーチャスの流れを汲むイギリスのヴァージニア、バーミューダ及びニュー・イングランドでの植民活動の記録である。スミスの本書執筆の意図はイギリス人の植民への関心を喚起し、彼らの眼を投資に向けさせ、誠実な効率的な政府、適切な計画、勤勉な入植者及び国家からの積極的な援助が植民には不可欠であるかを読者に訴えることである。ヴァージニア植民は3巻と4巻で扱われているが、『真実の話』や『ヴァージニアの地図』と重複している箇所が多い。『通史』におけるヴァージニア植民に関するスミスの記録はその表題にもあるように1584年から1624年までのイギリス人のヴァージニアでの探検・植民活動記録である。彼が本書を執筆する2年前ヴァージニアにおけるイギリス人とインディアンとの友好関係を根底から断ち切ったインディアンによる大虐殺事件が生じ、イギリスのインディアンへの態度は一気に硬化する。インディアンによる大虐殺はイギリス側からすればヴァージニア植民の徹底化のまたとない絶好の口実到来という訳である。それ以後イギリスのヴァージニア植民地化は急速に進む。そのような背景の中で書かれた『通史』はそれゆえヴァージニア会社へのこれまでのてねるい植民活動への批判が見られる。スミスは歴代のヴァージニア総督の植民活動を客観的に描いている印象を与えるが、所々にスミスの本音が聞かれ、ヴァージニア植民がいかにかに人々の期待に裏切ってきたかが容易に理解できる。自己顕示欲の強く、自己をやや英雄化する傾向のあるスミスからすれば色あせた感のするヴァージニア植民を国民の期待通りに実行できるのは自分しかないということを書き示したかったのである。彼がいかにかに多くの困難を排し、ヴァージニアを探検・調査したかがインディアン特にパウハタン王との交流から生々しく描かれる。インディアンとの交渉、裏切り、探検隊内部の内紛・反目を通して、スミスはヴァージニアがいかにかなる土地であるかを描く。前作同様ヴァージニアの肥沃な土壌、豊かな動植物にふれ⁽²¹⁾、ヴァージニアがいかにかに植民に適しているかを強調する。これらの報告はこれまですでに彼が記録していたことで新しい記述はない。ただ彼がヴァージニアの出納係と評議会にあてた書簡にはスミスのヴァージニア植民についての率直な態度が表れており、彼のヴァージニア会社への要求や不満やらが吐露されている。会社からの金銭的な援助の不足、大工、農夫等の必要性を訴え、非協力的な植民者のなかでは十分な植民活動が出来ないことに彼は強い不満をもらす⁽²²⁾。植民の目的である異教徒の改宗には触れられていない。彼らの関心は "present profit" にあり、 "profitable returns" にあった⁽²³⁾。ヴァージニア植民の現状には決して満足はできないが、スミスは決して植民の将来に悲観することはない。ヴァージニア植民はわずかな人的金銭的援助から始まったが、これまでの植民活動はそれなりの成果をあげていると言う。

notwithstanding all their factions, mutinies, and miseries, so gently corrected, and well prevented: peruse the Spanish Decades: the Relation of Master Hakluit, and tell me how many ever with such small meanes as a Barge of 22 tuns, sometimes with seven, eight, or, nine or but at most, twelve or sixteene men, did ever discover so many fayre and navigable Rivers, subject so many severall Kings, people, and Nation, to obedience, and contribution, with so little bloodshed⁽²⁴⁾

ヴァージニア会社からの不十分な援助がありながらも植民は徐々に拡大しているとスミスは言う。スミスがヴァージニアに期待していたのは公式文書が雄弁にうたっていた異教徒の改宗ではない。スミスはその発見に疑問が生じていたにもかかわらず、金と銀の発見は可能だと信じて疑わない⁽²⁵⁾。スミスにとってヴァージニアはなにはともあれ英国の経済的自立を可能に至らせる「黄金の土地」であり、"the fittest place for an earthly Paradise"⁽²⁶⁾であった。にもかかわらずスミスは異教徒への福音伝道を強調することを決して忘れはしない。スミスは序論で『通史』執筆の目的を4点あげているが、その第一点はジェームズ一世の植民による領土拡大の正当化と異教徒の改宗である。

...the reducing Heathen People to ciuilitie and true Religion, bringeth honour to the King of Heathen. (A Preface of foure Poynts, I)⁽²⁷⁾

これに加え、スミスは紳士にヴァージニア植民の資金的援助を訴え、その見返りはかならずや期待できると言う。

Let your [Gentlemen's] bountie supply the necessities of weake biginnings,...; the returne cannot choose in the end but bring you good Commodities, and good contentments, by your aduancing shipping and your fishing so usefull unto our Nation. (A Preface of foure Poynts, II)⁽²⁸⁾

ここで言う「見返り」が物質的な収益であることは明らかである。また、作者不詳のスミスを称える詩にもヴァージニア植民によって "the golden Iasons fleece" を得ることが出来ると書かれている⁽²⁹⁾。この Jason は、言うまでもなくギリシア神話のジェーソンが金の羊毛を捜し求めたことへの言及であり、ヴァージニア植民も「金の羊毛」に匹敵する利益を英国にもたらすことができることを意味している。このように見てくると「異教徒の改宗」はあくまでも植民の建前であり、本音は植民活動から得る物質的な利益であることが理解できる。イギリスにとってそれはヨーロッパ諸国依存の経済からの自立的経済への脱皮であり、ヴァージニア会社への個人の出資者及び植民者には物質的な利益である。ヴァージニア植民の目的が本来キリスト教の普及になかったことは誰の目から見ても明白なことであった。ニュー・イングランドへのピューリタンの植民活動と異なり、ヴァージニア植民者にとっては「山の上にある町」を築くことが本来の目的ではなかった。その植民活動の主なる目的はあくまでもイギリス内外の政治、社会、経済と密接に連動していた。イギリスの国家の命運を賭けたと言っても過言でない事業であったのである。スミスにとってヴァージニア植民は「神の栄光」「祖国の名誉」及び「人々の利益」をすべて実現できるものであった⁽³⁰⁾。停滞したヴァージニア植民事業を打破すべくスミスがヴァージニア会社に訴えた要請にも十分な物資、援助があればヴァージニア植民の更なる開発は可能であるとの自信に満ちた言葉が聞かれる⁽³¹⁾。これはスミスの本音であろう。自他共に認めるイギリスを代表する植民地開拓者としてのスミスの顔がここに見られるのである。ヴァージニア植民のスミスの意図はイギリスの領土拡張とイギリスへの物資の調達にあったが、「異教徒の改宗」について全く言及していないのかというと言及はあるのである。それはパウハタン王の娘のボカホンタスのイギリス人ジョン・ロルフとの結婚である。インディアンと

キリスト教徒との結婚、それはましく異教徒のキリスト教徒への改宗であった。ヴァージニア会社にとって植民の主たる目的たる異教徒の改宗を宣伝する事件はこれまではなかった。ポカホンタスは結婚後ロンドンに行く。改宗した異教徒をイギリス国民に見せようという意図からか彼女をロンドンに連れて行ったのはヴァージニア植民がいかに初期の目的に成功しているかの証拠を国民に示したかったのであろう。しかし、ポカホンタスの改宗はほんの一部にすぎない。逆に多くの植民者インディアン側に逃亡したという。ポカホンタスの血をひくアメリカ人が現在200万はいると指摘する人もいる⁽³²⁾。文明が非文明に、キリスト教が非キリスト教に敗れるという皮肉な結果でもある。スミス及びヴァージニア植民関係者にとってインディアンのポカホンタスのキリスト教徒ロルフとの結婚は「異教徒改宗」の絶好の宣伝となり、彼らの「異教徒改宗」努力の証でもあった。スミスは、『通史』でポカホンタスの結婚に触れ、ポカホンタスは英語を話すことができるようになり、キリスト教をよく教えられ、イギリス人のやり方にならって非常に「折り目正しく」なり、「礼儀正しく」なったと言っている⁽³³⁾。これこそヴァージニア植民の本来の目的であったが、しかし、インディアンの改宗に関しての記述はこれしかなく、植民者の関心はインディアンの領土の獲得と本国への物資の調達及び現地の調査であった。

3

ヴァージニア植民を取り巻く資金的援助の不足、現地からのヴァージニア植民についての絶望的な報告が飛び交い、ヴァージニア植民が悪化の道をたどり、一般の人々のヴァージニア植民への関心が薄れ始めつつあったなかでヴァージニア植民を大々的に擁護した人物に **William Strachey** がいる。彼はバーミューダ島での難破の後1610年ヴァージニア到着し、秘書及び記録官を勤め、翌年11月に帰国した。翌1612年彼は『英国ヴァージニア旅行記』(*The Historie of Travell into Virginia Britania*) を出版する。そこで **Strachey** はヴァージニア植民の目的、意義、正当性を論じ、沈滞化した植民熱を再度燃え立たせようとする。ヴァージニア現地から帰国したばかりの人物の手になる『旅行記』は宣伝文書的な性格を有し、執筆にあたってスミスやハリオット等を利用したと言われているが、その内容は英国の植民の正当性、ヴァージニア現地の調査、インディアンの生活・習慣記述にわたっている。最初の問題はヴァージニア領土権を主張するスペインに対してである。**Strachey** にとって、ヴァージニア植民はスペイン領土への侵害ではなく、すでに **Cabot** によって発見されている英国の領土である。ヴァージニア植民は原住民にとって不当ではないのかとの疑問について、彼はインディアンはキリスト教の恩恵を付与されるべく異教徒であり、非文明人を文明人へと教化することはインディアンにとっても望ましいことであると言う。ヴァージニア植民への人々の関心を低下させていた理由にはヴァージニアの領土権を主張するスペインと先住民インディアンの土地への侵入に対する正当な理由及び植民からの即座の利益の可能性の二点であった。**Strachey** はそもそもヴァージニア植民の目的をどこにおいていたか。この重要な問題について **Strachey** は徹底して異教徒改宗という宗教的使命を強調する。彼以前にも植民の宗教的使命に言及していた者はいたが、**Strachey** の植民の宗教的使命観をかれほど強調した者はいない。この点に関しては、ヴァージニア会社を擁護した説教家達を連想させる。彼は次のように言う。

yt being the pious, and only end,...to endeavour the conversion of the natiues, to the knowledg
and worshippe of the true God, and the world's Redeemer Christ Iesus⁽³⁴⁾ ..

原住民の真の神の知識と崇拜、この世の救い主キリストへ改心させることが植民の「敬虔な唯一の目的」となる。Strachey にとってヴァージニア植民の本来の目的は異教徒の改宗である。これはハクルートが『西方植民論』で強調した植民の目的であり、以後様々な冒険家、植民者が繰り返し主張してきた点であり、我々は Strachey の異教徒改宗としてのヴァージニア植民論を聞いてもとりわけ驚きはしない。彼の宗教的使命としてのヴァージニア植民論は第一巻全体に行き渡る主張であるが、植民者にはインディアンを「サタン(35)の幻惑」から解放し、無垢なるインディアンの心を勝ち得、キリスト教徒の知識を共にする道が切り開かれているとも言う。Strachey は、更に聖書を援用し、唯一真なる神とイエス・キリストを知ることが幸福のすべてであり、「すべての国民に洗礼を施す」ことがインディアンにも適応できることを述べる⁽³⁶⁾。キリスト教の普及の名のもとにたとえそれが原住民に危害を及ぼすことになろうとも未開状態の改善に至ることになるので許されることになる⁽³⁷⁾。Strachey は、キリスト教伝道師のように聖書からの引用と過去の世界の歴史からヴァージニア植民の前例を探し、それらを根拠にヴァージニアにおける異教徒改宗の正当化を主張するのである。Strachey は1612年というヴァージニア植民が危機的状況に陥った時期にヴァージニア植民の原点に戻り、ジェームズ一世の特許状に書かれていた異教徒の改宗を植民の主なる目的にする。この論点はヴァージニア会社擁護の説教家及び当時のヴァージニア会社・植民関係者の文書に必ずと言っていいほど言及されたことで、特別新しいことではない。我々はむしろ Strachey が『旅行記』のなかで述べているもう一点に注目したい。それは植民の目的を宗教的使命に置いておきながらも、やはりイギリスの経済と個人の利益をもまた忘れていないことである。ハクルート以来イギリスはヨーロッパ諸国への経済依存からの離脱をヴァージニア植民に求めていたが、Strachey も同じ論点に立ち、ヴァージニア植民がイギリス経済の自給自足をもたらす契機になると言う。

Our country of Virginia hath no want of many Marchandizes (which we in England accomplish in Denmark, Norway, Prusia, Poland, etc., fetch far, and buy deare,⁽³⁸⁾) ...

Strachey は、イギリス経済がいかにヨーロッパ諸国に依存しているかを第一巻十章で更に述べる。モスクワとポーランドにはピッチやタール等、スイスには鉄と銅、その他スペイン、イタリア、オランダにイギリスが依存している物資がある。しかしイギリスが他国に依存している物資はすべてがヴァージニアで手に入り、航海の危険や海賊に襲撃される危険を犯す必要もない。なおヴァージニアは兵士を育て、水夫には実践の場を提供し、商人には交易、善人には異教徒をキリスト教に改宗させることへの報いがあり、イギリスが必要とする物資の調達以外に人口急増に伴う失業をも解消してくれる場でもある。

All these temporaize with others for necessity, but all as vncertayne as Peace and Warre besides the Charge, travell and daunger in transporting them by Seas, Landes, Stormes, and Pirates: then

how much may Virginia haue the prerogative for the benefitt of our Land, when as within 100 myles all these are to be had either ready provided by nature, or ells to be prepared were there but indusrious men to labour, so as then here a place, a nurse for soldires, a Practize for Mariners, a Trade for Merchauntes, a Reward for the good and that which is most of all, a busines most acceptable to god, to bring poore Infidels to his knowledge,⁽⁴⁰⁾

ヴァージニアがイギリス経済の自立の契機となることを Strachey は述べるが、しかしそれがヴァージニア植民の本来の目的ではない。Strachey は植民の経済的目的を極力押さえ、その宗教的使命を本来の目的とする。彼は、スペインが中南米で金を発見したようにヴァージニアにも金発見の可能性があると示唆し⁽⁴¹⁾、植民に人々の関心を引きつけようとする。すべては "Tyme the true Reveylor of great thinges"⁽⁴²⁾ に任せる以外に道はなく、やがては植民の結果も明らかになるという。今は植民活動が停滞しているがやがては「福」をもたらすことになる。ヴァージニア植民に即座の結果を求めるべきではなく、長い眼で植民を見つめればいずれは良い結果が生じてくるというのである。Strachey は、植民の経済的活動を二次的にとらえ、経済的な目先の利益に先走る人達に警告を発することも忘れはしない。

...such is the busines [of Virginia] , as yt should awake all charitable Christians to follow yt according to the goodnes of the Cause, and not according to the greatnes of profit and Commodity e.⁽⁴³⁾

Strachey は第一巻を終えるにあたり、再度植民の目的に触れる。植民の目的は道徳的に善に成りうる可能性を持ち合わせているインディアンの教化・改宗にある。

to teach them [Indians] both which is the end of our Plantation amongst them, to let them knowe what Vertue and Goodnes is, and the Reward of both: to teach them Religion and the Crowne of the Righteous, to acquaint them with Grace, that they may participate with Glorye: which God graunt in Mercy vnto them....⁽⁴⁴⁾

Strachey は『旅行記』の前 1610 年、*A true reportory of the warcke, and redemption of Sir Thomas Gates Knight; upon, and fro the Ilands of the Bermudas: his coming to Virginia, and the estate of that Colonie then, and after, under the government of the Lord La Warre* を書き、バークミューダ島及びヴァージニアで見聞したことを虚飾なく描いたがためにヴァージニア会社はその出版を望まなかったといういわくがあった⁽⁴⁵⁾。そのような事情を考慮してか『旅行記』のヴァージニア報告はヴァージニア会社を喜ばせ一般の人々のヴァージニア植民への行動欲をあらたに奮い立たせるにあたり大きな影響を及ぼしたと思われる。丁度同じ頃ヴァージニア会社が当時著名な説教家にやはりヴァージニア植民の宣伝的説教を依頼し、説教家がこぞって植民の意義を訴え、異教徒の改宗こそが植民の真の目的であると雄弁を奮っていたことと軌を一にしている。Strachey の『旅行記』の本音はしかしながら異教徒の改宗にはない。植民の裏の目的を十分認識してた Strachey は、その真の目的を押さえ、代

わりに宗教的使命を植民の目的とする。このあたりヴァージニア植民の苦悩がうかがわれると言ってもいいだろう。ヴァージニア会社としては資本主義的な植民開発を植民に期していたが、それを前面に押しのを控え、キリスト教的伝道精神を植民の目的とする。中南米におけるスペインに対抗してかより人道的なキリスト教的な使命をイギリスの植民の目的とした背景には海外植民に対する英国の苦渋があった。Strachey の『旅行記』はこのような事情を反映した旅行記であると言える。

4

1625年、聖職者のサミュエル・パーチャス (Samuel Purchas) はイギリスの植民記録を集めた『ハクルート遺稿 パーチャス巡礼 イギリス国民及び他国民による航海と旅行の世界歴史を含む』(以後『パーチャス巡礼』と略記) (*Hakluytus Posthumus or Purchas His Pilgrimes Contayning a History of the World in Sea Voyages and Lande Travells by Englishmen and others*)、20冊を出版する。それはタイトルにもあるように、イギリスの航海者・海外進出者記録の集大成『イギリス国民の主要な航海・貿易及び発見について』(*The Principal Navigations, Voiages, Traffiques and Discoveries of the English Nation Made by Sea or Overland to the Remote and Farthest Distant Quarters of the Earth at any Time within the Compass of these 1600 Years*. 1589年1巻、1598-1600年3巻追補)を出版し、イギリスの海外植民・交易熱に拍車をかけたリチャード・ハクルート (Richard Hakluyt) の仕事を受け継ぎ、ハクルート以後の17世紀初頭のイギリス人による海外冒険者たちの記録を編纂したものである⁽⁴⁶⁾。出版年の1625年と言えばヴァージニア会社が解散した1年後であるが、パーチャスは『パーチャス巡礼』で過去のイギリス人による航海・海外進出・探検をハクルートに倣って編集している他に、彼自らの植民論を展開している。パーチャスはヴァージニア植民については1606年から1624年までを18冊と19冊で述べているが、我々にとって興味深いのは19冊9巻20章である。ヴァージニア植民にイギリスが着手して以来ほぼ20年の歳月が流れ、紆余曲折を経ながらもヴァージニア植民は継続されてきたが、ここにパーチャスはイギリスの海外植民論を詳細に述べ、イギリス植民及びヴァージニア植民に強力な援護を行い、本論にとっては欠かせない重要な章となっている。ハクルートの論点はそれほど新規な論ではなく、ハクルートがイギリスの将来を海外植民と海外貿易に賭けたと同様パーチャスもこれまでと同様の主旨の論を展開する。彼はヴァージニア植民及び植民一般の正当性、必要性を論じるが、ヴァージニア植民についてはこれまでの公式文書に見られた目的、すなわち異教徒のキリスト教への改宗を第一の目的としていることに注目したい。ヴァージニア植民は "so Noble a worke"⁽⁴⁶⁾ であり、キリスト教を広め、異教徒を教化するにあたりイギリス国王の荣誉に資する事業であることを最初に明確化する。

We greatly commending and graciously accepting of their desires to the furtherance of so Noble a worke, which may by the providence of Almightye God hereafter tend to the glorie nof his Divine Majestie, in propagating of Christian Religion, to such people as yet live in darknesse, miserable ignorance of the true knowledge and worship of God, and may in time bring the Infidels and

これは1606年の第一次特許状の文言と変わらない。我々は何度も「異教徒の改宗」について聞かされてきたが、スミス同様1622年のインディアンによる大虐殺事件があってもなお「異教徒の改宗」を植民の目的にあげているパーチャスにイギリス人の寛容精神を見る気がするが、裏を返せばイギリス人のスタンドプレイとも映る宣言である。いずれにせよヴァージニア植民の目的は「異教徒改宗」である。この主張は第19冊9巻20章で更に強調される。この章でパーチャスは聖書を援用してヴァージニア植民の正当化、合法化について述べる。20章のタイトルは、「アメリカのイギリス植民とりわけヴァージニアとサマー諸島からイギリスに生じるであろう利益を示す論述」とあるように、ヴァージニア植民がいかにかイギリスにとって利益のある植民事業であるかの論証である。パーチャスにとって植民は神抜きでは考えられない。最初にして最後の考慮すべくは神であり、神から植民の命令を受け、植民が神に栄光をもたらすが問題となる。パーチャスは創世記第一章の「地に満ちよ、地を従わせよ」という神の言葉を援用し、ヴァージニア植民の正当性を述べる。これによりキリスト教徒は他国へ進出することに何ら問題はなくなる。他の国の土地を自国のものとすることは神の命令を実践していることに他ならないからである。他国の植民化はこの神の言葉によって許される行為となる。

Hence is it that Christians (such as have the Grace of the Spirit of Christ, and not the profession of his merit alone) have and hold the world and the things thereof in another tenure, whereof Hypocrites and Heathens are not capable of.⁽⁴⁸⁾

キリスト教＝文明の価値観から非キリスト教＝非文明を一方的に裁断する論理である。聖書を楯に非キリスト教徒の住む地を植民地化するためにキリスト教徒が考案した征服のロジックである。この論理はまたキリスト教の神が唯一真であるという結論にも至るキリスト教の未開宗教への暗黙かつ絶対的優位に基づく論理でもある。多種多様な価値観が存在する現代社会には到底通用しようにもない論理が17世紀初頭には十分に効力を発揮していた。聖書に記されていればそれを盾にいかなることも可能であった。植民地化された原住民がいかなる思いをイギリス人に抱いていたかは知る由もないが、聖書の言葉は文明が非文明を文明の恩恵に与させることができるという信念に裏打ちされたキリスト教徒イギリス人の植民合法化・正当化の根幹であり、他国のいかなる人も異を唱えることができなほどの効力を発揮していた。別の角度から見ればキリスト教がいかにかまだ十分な価値判断の基準でありえたことを示す証でもあったが、キリスト教の名の下にあらゆるものが許容された時代でもあった。パーチャスはヴァージニア植民擁護にあたり最初に聖書を持ち出すことにより、他国の植民地化を正当化し、次にヴァージニア植民の具体的な擁護に入る。ヴァージニア入植は「野蛮で未開な墮落している人達」をキリスト教徒にすることである。(p.222)しかしながら、そもそもイギリスはヴァージニア入植への権利を有しているのか、という疑問が出てくる。これはスペインがすでにヴァージニアの領土権を主張していることへの反論でもあるが、イギリス国内にはスペイン寄り一派がおり、しかも他人の土地への侵入であるとも言える入植であり、ヴァージニア入植権利は大きな問題であ

った。パーチャスは、上に挙げた未開人のキリスト教化と関連する「すべての地球を満たす自然の権利」を持ち出す。そしていかなる国も他人によって所有されていなければ自然法と人類法により植民権利が生じ、後の入植者によって土地の所有権を奪われることはない。これは創世記の「地に満ちよ」と先住権による入植の正当化である。ここで問題なのはヴァージニアにはすでに先住民が居住している事実である。これに対してのパーチャスは次のように述べる。ある国のいくつかの土地に人が住んでいて、他の土地に人が住んでいない場合、上記の他人による先住権がない場合入植権が生じてくる。特に先住民が未開人で定住所有権がない場合には入植は可能となる。二番目の入植権利は商品売買の権利 (Merchandise) である。これは端的に言えば、ある国が物資に事欠くときそれは他国との交易によって充当できるというものである。パーチャスによれば神はすべての国の産物を分散させたので、富める国もあれば貧しい国もある。しかし重要なのは全世界は「人類一つの共同体であり、各国は公共善のために他国と話し合う」ことができるということである⁽⁴⁹⁾。イギリスの場合、自国における物資の不足のためにヨーロッパ諸国に依存しているが、その物資がヴァージニアで補充できれば産物の売買権は否定できなくなってくる。パーチャスは、原住民がヴァージニアの豊かな産物を有効に活用せず、他国に利用させないことは不信心な非人間的なことであると言う。

It is therefore ungodly, and inhumane also to deny the world to men, or like Manger-dogges (neither to eat hay themselves, nor to suffer the hungry Oxe) to prohibite that for others habitation, whereof themselves can make no use; or for merchandise, whereby much benefit accreweth to both parts⁽⁵⁰⁾

これは物資に事欠くイギリスにとってはヴァージニア入植の格好の口実となる。さらにパーチャスは論を進め、豊富な物資を有していながら他国にそれを分譲しない場合人類の慣習法によって懲罰の対象となると言う。かかる論法によりイギリスはヴァージニアへの正当な入植権を主張できると同時に、侵入、征服も正当化され、自然法、国際法からも保証される。

That natural right of cohabitation and commerce we had with others, this of just invasion and conquest, and many others praevious to this, we have above others; so that England may both by Law of nature and Nations challenge Virginia for her owne peculiar propriety⁽⁵¹⁾ (pp.224)

これまでパーチャスは聖書、自然権、国際法によりイギリスのヴァージニア入植権を主張してきたが、更にパーチャスは、(1) イギリス人、セバスチャン・カボットによるヴァージニア発見 (2) 実際的なヴァージニアの所有 (3) 所有の継続 (4) 時効による所有権取得 (5) 原住民の自発的服従 (6) 原住民の権利中断 (7) 所有権委譲 (8) 現地誕生のイギリス人による自然相続 (9) 実際の売却 (10) 合法的な土地譲渡 (11) 王への原住民隷属、からイギリスのヴァージニア植民の権利の正当性を強調する⁽⁵²⁾。

ヴァージニアへの入植の権利を主張した後パーチャスは入植の目的に移る。入植の目的は既に触れたようにキリスト教植民の建設であり、原住民のキリスト教徒への改宗である。

ヴァージニア原住民は「文明」「技芸」「宗教」に無知で、「サタンの压制」に心を奪われている。イギリス人の勤めは彼らを「暗黒の力」から解放することである⁽⁵³⁾。(p.231)かくして原住民も悪魔も克服され、ヴァージニアを一人の夫と婚約させ、キリストへ純潔な処女として捧げるのである。ヴァージニアがキリストの花嫁となることによってヴァージニアにおけるキリスト教的使命は完結する。ヴァージニア植民の宗教的使命はあくまでも本来商業的色彩の強い植民遂行のための隠れ蓑、煙幕であり、建前であると私は考えているが、パーチャスは聖職者にふさわしく聖書からの適切な引用によりヴァージニア植民の宗教性を巧みに浮かび上がらせる。しかしパーチャスはヴァージニア植民の真の意図を知っていた。なぜなら彼は次に植民のもう一つの目的、一般の人々の第一の関心事である植民から得られる物質的利益についても論じているからである。スペインが中南米を制圧し、そこから産出される金・銀によってヨーロッパの大国の地位にまで上りつめたスペインの植民の成果をイギリスはヴァージニアで挙げようとしていた。E.ウィリアムズによれば、スペイン王室が中南米の金から得た収入は1503年にはわずか8,000ドゥカードであったのが1608年には200万ドゥカード、1626年には250万ドゥカード以上との記録が残っている⁽⁵⁴⁾。スペインという「貯水池」の「水源」が中南米にあったのである。1595年ローリ(Sir Walter Raleigh)によるギアナ帝国の発見の目的はまぎれもなく金の発見であり、ローリは金・銀の重要性をイギリスは十分に知っていた。西方植民の歴史を背景にすればヴァージニアの植民者、冒険者、投機者の植民の夢が金・銀の発見にあったことはとりわけ驚くことではない。ところがヴァージニアには金・銀は産出されず、植民関係者の失望は殊の他大きく、これがヴァージニア植民熱低下の大きな原因となっていた。大国スペインが北米の植民地建設に消極的であった理由の一つは金・銀発見の可能性が北米には少なかったからである。ヴァージニア会社としては何としても金銀と言う目に見える植民の成果がほしかった。金・銀発見の可能性は一縷の望みであったが、結果は人々の期待を裏切るばかりで、金・銀発見の吉報はついに本国には届くことはなかった。パーチャスは、しかしながら、金・銀発見ができなかったことに対して悲観的になることはなく、むしろ金銀など発見できなかったことは幸いであると述べる。それはなぜか。金銀は諸悪の根源で、人間の欲望をむきだしにさせ、金銀のために暴力に訴え、近隣諸国とは争いを起こさざるをえない。金銀は人間の欲望の象徴である⁽⁵⁵⁾。これはトマス・モアが描くユートピア人のスペインの金・銀称賛への諷刺を思い起こさせる。なにしろユートピアでは、金・銀は「汚らわしい不名誉なもの」で、彼らは便器や罪人用足かせや鎖に使用するほど価値のないものである。パーチャスは金・銀が人々にもたらす弊害を説き、物質的な富よりも精神的な富を強調する。たとえばユダヤ人にとっての「約束の地」であるカナンには金はなかったが、代わりに豊かな土壌に恵まれ、「ミルク」と「はちみつ」が流れ、人々は "bottomlesse gulfes of lust"⁽⁵⁶⁾ にさいなまれることはなかった。これこそが真の意味での豊かさであり、人間を欲望のとりこにする金銀は少しの精神的豊かさを与えてくれない。人間の真の幸福を考えると、金・銀は逆に人間の心をむさしくさせ、人間は金・銀のために真の人間性を忘れてしまうというのである。パーチャスにとってヴァージニア植民の目的は金・銀の発見ではない。それは神の国建設であり、隣人愛であり、国民・国王・国家の名誉である。ヴァージニアに金・銀は発見されないがそれに匹敵するほどの様々な産物にあふれている。温暖な気候、肥沃な土壌、豊富な動植物、「楽園」のトポ

スとしてのヴァージニアの称賛が続く。パーチャスは、Strachey のようにヴァージニアの産物によるイギリスの経済的自立には触れないが、ヴァージニア植民が国内の人口増加による失業者には雇用の供給、犯罪者には再生の場を提供してくれ、更には水夫の養成、兵士の訓練をももたらす契機ともなりうる。パーチャスにとってヴァージニア植民は資本主義的帝国主義的なイギリスの海外進出ではなく、その重要性は宗教的な使命にある。それ故パーチャスは出来る限り他国を刺激するようなことはしていない。職業が牧師ということもあり、ヴァージニア植民の宗教性をとりわけ強調した論述となっている。パーチャスが『パーチャス巡礼』を書いた1625年はヴァージニア会社が王の特許状を取り消され、会社を解散した1年後のことであり、ヴァージニアは民間の手による発展の道を進むことになる。パーチャスはハクルートの後を引き継ぎ、17世紀初頭のイギリスの海外進出の歴史を描いたわけであるが、一般の人々にとってヴァージニア植民の実体が明らかになりつつあり、もはや「楽園」としてのヴァージニアは非現実的な幻想でしかなかった。そのようなヴァージニアを取り巻く厳しい現実のなかですら—その現実があればこそ—言うべきか—パーチャスは理想的な「神の国」建設を植民の第一目標とする。人々の最大の関心事である植民からの物質的な利益については触れもせず、ひたすらキリスト教の伝道を説くパーチャスに当時の読者がいかなる反応を示したかは知る由もない。ハクルートに始まった植民の意義、目的をふまえての一聖職者の "Apology for Virginia Plantation" とも言うべく論考がパーチャスのヴァージニア植民論であり、それは当時人々がヴァージニア植民に対して抱いていた植民への不安、疑問を払拭し、植民へのイギリス人の行動欲を一層鼓舞するものであったと言える。ヴァージニア植民の経緯を見るとイギリス国内でのヴァージニア会社植民特許状取り消し、植民への冷静な観察、ヴァージニアの現状、ヴァージニア統治の内紛等からヴァージニア植民が一層厳しい状況に置かれていたなかでパーチャスは人々に聖職者にふさわしいキリスト教精神にあふれた理想的な植民論を展開する。

5

1606年のジェームズ一世の特許状により国をあげてのヴァージニア植民が始まり、イギリスは本格的に北米の植民活動に着手した。ハクルートの書が明らかにしているように、1606年以前にも Sir Humphrey Gilbert, Sir Walter Raleigh, Sir Richard Grenville によってイギリスによるヴァージニア遠征は行われているが、1606年以降のヴァージニア植民はその規模においてイギリス植民のなかでも特に大々的なものである。Captain Newport, Geroge Percy, John Smith, Lord Delaware, Thomas Gates 等様々な植民者がヴァージニアに赴く。彼らはいかなる目的をもってヴァージニアへ赴いたのか。これまで見てきたようにイギリスのヴァージニア植民は単なる宗教的な次元にとどまるものではなく、17世紀イギリス初頭の政治、社会、経済、宗教に関わる植民であった。農地の囲い込みによる失業者、浮浪者、犯罪者の急増、人口増加による都市部への人口移動、イギリスはこれまでにない失業者と人口増加の対処に迫られていた⁽⁵⁷⁾。経済的にはイギリスは国内で必要とする主要物資をヨーロッパ諸国に依存していた。更には自国の主要産物である毛織物売却の不振、宗教的にプロテスタントとカトリック教との対立、そして眼を外に向けるとス

ペインがいた。イギリスより一世紀も早く16世紀初めから中南米に進出し、ほぼ中南米を制圧し、その金・銀をほしいままにし、スペインを一躍ヨーロッパの大国にまで押し上げる。イギリスが現状に留まればイギリスがスペインや他の国々からも遅れをとり、ヨーロッパの二流国の地位に甘んじなければならないことは誰の眼にも明らかであった。このような国の様々な問題を一举に解消し、イギリスをスペインと同等の地位にまで引き上げてくれると思われたのがヴァージニア植民であった。ヴァージニア植民こそイギリス国家の明るい未来を約束してくれるはずであった。それゆえ、ヴァージニアの目的は最初からわかりきったことであった。植民地獲得による国内の社会問題の解決、スペインが中南米から獲得した金・銀に匹敵する金・銀の発見、ヴァージニア会社投資者への利益の配当、これらはすべてヴァージニア植民は本来社会的商業的性格の強い植民であったことを示している。現地からの報告書、詩人、パンフレット作者、それに説教家までもが楽園ヴァージニアの宣伝に走る。肥沃な土壌はナイルやユーフラテスをも凌駕し、植物は繁茂し、魚、鳥、獣に不足することはない豊穡な土地ヴァージニア、温暖な気候、健康的な空気、すべてがヴァージニアを理想化する。ヴァージニアはまさに「楽園」であった。ヴァージニアでの豊富な物資がイギリス経済の自立を促進してくれる。ヴァージニアでの入植が成功すれば国内に居住できない貧困者・犯罪者・浮浪者に定住の場を供給できる⁽⁶⁸⁾。いわゆるピューリタン革命のさなかにクロムウェルですらアイルランドのカトリック教徒や国内の犯罪者をヴァージニアへ送ろうと計画していた。さらには国内の余剰産物特に毛織物をヴァージニアで処理できる。いかなる点から見ても宗教が入り込む余地はない。ところが植民関係者はこぞってキリスト教の普及、異教徒の改宗を植民の最大の目的とする。イギリス植民論のさきがけとなった『西方植民論』でハクルートはイギリスの植民地拡大を宗教とからませ、植民の目的はキリスト教の普及であると言った。彼にとっては北米に植民地を築くことは神の意図を実現することに他ならなかった。ハクルート以後の植民論は多かれ少なかれこのハクルートの植民論に依拠していることは明らかである。本来は宗教的な色彩の弱いヴァージニア植民をかたくなまでに異教徒のキリスト教への改宗という観点からとらえていることは何を我々に語ってくれるのか。新世界に神の国を建設することが植民の目的と言ったが、これはイギリスが神の国ではないことを物語っているのか。イギリスに神の国を見出すことができないから新天地に神の国を築こうと言う意味なのか。これは見方を変えればイギリスという国を否定する見解になる。つきつめればイギリスへの決別である。ヴァージニアは新しい「カナン」「楽園」「ユートピア」である。あるいはキリスト教国としての理想国のイギリスをさらに理想化した国家をヴァージニアに建設しようという意図だったのか。それにしても当時のイギリスがキリスト教国家として非の打ち所のない国家であったとは言い難い。むしろ社会的にも経済的にもイギリスは混迷のなかにた。ジェームズ一世は1625年にこの世を去り、息子のチャールズ一世が後を継ぐが、国内政治はピューリタンからの攻撃を迎える。このように考えてくるとヴァージニア植民は宗教的使命をその主要な任務としたのではなくむしろイギリスが資本主義国家として世界に飛躍するための基盤作りがその根底にあったと言えるのではないかと。それはまたハクルートが語っていたように帝国主義国家としてのイギリスの始まりでもあったとも言える。ヴァージニア会社としては植民の目的をその経済性に置くこともできた。そのほうがヴァージニア会社への投機熱をあおり、植民資金の獲得も容易であったはずである。とこ

ろがヴァージニア会社はその本来の目的を忘れたかのごとく頑迷にも異教徒改宗を植民の最大の責務とする。思えばイギリスより早くカリブ海を支配したカトリック大国スペインの中南米植民活動の目的はイギリスと同じく表向きは異教徒の改宗であった。スペインが異教徒改宗の名の下に何を中南米で行ったかは歴史が雄弁に物語っている。結果として中南米からの「金」「砂糖」「奴隷」を武器にスペインはヨーロッパの強国になってしまう⁽⁵⁷⁾。異教徒改宗は植民の建前であり、本音は帝国主義的な海外植民地獲得であった。スペインにならぬイギリスも西方植民に奔走し、当初のドレーク(Sir Francis Drake)等の単なる海賊行為からハクルートの『西方植民論』をまけてイギリスが本格的に北米への植民化を始める。そしてその目的は「神の国」建設であった。ヴァージニア植民たけなわの頃、東インド会社取締役・理事のトマス・マンは「イングランドの東インドとの貿易に関する一論」(1621年)や「ロンドン商人東インド会社の請願と進言」(1628年)を書き、イギリスの外国貿易の重要性を指摘している⁽⁵⁹⁾。マンは、ヴァージニア会社のようにキリスト教的な使命を海外進出の目的とはせず、明確に外国貿易による国富と国力の増大を求めている。ところがヴァージニア植民の場合は「神の国」建設を見せ玉にしたイギリスの社会的経済的利用の対象としての資本主義的帝国主義的な植民地獲得であった。17世紀英国が直面した諸問題の解決、言うなれば英国の存亡を賭けた植民活動を背後に追いやり異教徒のキリスト教への改宗にこそ植民の目的があることを高らかにうたい、それを隠れ蓑として利用した植民であったと言える。

注

(1) *Discourse of Western Plantation* は以下に所収のものを使用した。David B. Quinn (ed.): *New American World* Vol.III. pp.71-123. なお、以下の日本語訳も参照した。ハクルート『西方植民論』(東京:岩波書店『イギリスの航海と植民 二』、1985, pp17-229.)

(2) E.ウィリアムズ 川北稔訳『コロンブスからカストロまで I』(東京:岩波書店、2000)、p. 86.この書は1492年から1969年までの主としてスペインによるカリブ海制圧の史であるが、初期のスペインの中南米侵略とイギリスを含む他のヨーロッパ諸国との覇権争いが描かれている。

(3) Richard Hakluyt: *The Principal Navigations, Voyages, Traffiques & Discoveries of the English Nation* (London & Toronto: J.M. Dent and Sons Limited, 1927), Vol.I. p.22.

(4) Hakluyt, Vol.I, pp.39-40.

(5) ウィリアムズ、p. 88.

(6) Arthur Barlowe: *The first voyage made to the coastes of America* のテキストは David B. Quinn (ed.): *New American World* Vol.III. pp.276-282 を使用した。なお、以下の日本語訳も参照した。バーロー『アメリカ海岸への最初の航海』((

(7) Quinn, p. 279. バーロー、p. 249.

(8) Quinn, p.279, p.280. バーロー、p.252.

(9) K. R. Andrews: *Trade, plunder and settlement* (Cambridge: Cambridge University Press, 1991), p. 207.

(10) David B. Quinn (ed.): *New American World* Vol.III. p.300. レーン『ロアノーク島入植記』

東京：岩波書店『イギリスの航海と植民 二』、1985, pp.265-300.)

(11) L.G.Tyler: *Narratives of Ealy Virginia 1606-1625* (New York: Barnes & Noble, Inc., 1966), p. 20.

(12) Philip L. Barbour: *The Jamestown Voyages under the First Charter 1606-1609*, Vol.I, pp.213-234)

(13) Tyler, p. 231.

(14) Tyler, p. 214.

(15) John Smith: *A Trve Relation of such occurrencess and accidents noats as hath hapned in Virginia since the first planting of that colony...*[Edward Arber ed.: *Capt. John Smith's Works* (New York:AMS Press, 1967)], p. 4. スミス『真実の話』(東京：岩波書店『イギリスの航海と植民 二』、1985, p. 405.) , p.105 ff.

(16) Arber, p. 4. スミス、pp. 405-406.

(17) Arber, p. 40. スミス、p. 462.

(18) John Smith: *A Map of Virginia* (Amsterdam: Walter J. Johnson, Inc. Theatrum Orbis Terrarum Ltd., 1973), p. 18.

(19) Smith, *A Map of Virginia*, p. 18.

(20) Smith, *A map of Virginia*, p. 19.

(21) John Smith: *The Generall Historie of Virginia, New-England, and the Summers Isles* (Ann Arbor: University Microfilms, Inc., 1966), p.21, 22, 25, 26, 29)

(22) Smith, *The Generall Historie*, p. 72.

(23) Smith, *The Generall Historie*, p. 72.

(24) Smith, *The Generall Historie*, pp. 82-3.

(25) Smith, *The Generall Historie*, p. 148.

(26) A. T. Vaughan: *American Genesis* (Boston: Little, Brown and Company, 1975), p. 176.

(27) Smith, *The Generall Historie*, A Preface of foure Poynts, I.

(28) Smith, *The Generall Historie*, A Preface of foure Poynts, II.

(29) Smith, *The Generall Historie*, A.

(30) Smith, *The Generall Historie*, p.150.

(31) Smith, *The Generall Historie*, p. 113.

(32) ピーター・ヒューム 岩尾龍太郎・正木恒夫・本橋哲也訳『征服の修辞学』(東京：法政大学出版、1995), p. 418. なお本書の第四章は「ジョン・スミスとポカホンタス」である。

(33) Smith, *The Generall Historie*, p. 121.

(34) William Strachey L.B.Wright and V.Freund(eds.): *The Historie of Travell into Virginia Britania* (Nendeln/Liechtenstein:Kraus Reprint Limited, 1967), pp. 7-8.

(35) Strachey, p. 18.

(36) Strachey, p. 23.

(37) Strachey, p. 25

(38) Strachey, p. 21.

(39) Strachey, p. 117.

- (40) Strachey, p. 118.
- (41) Strachey, p. 118.
- (42) Strachey, p. 118.
- (43) Strachey, pp. 132-133.
- (44) Strachey, p. xxiii.
- (45) テキストは Samuel Purchas: *Haklutas Posthumus or Purchas His Pilgrimes Contayning a History of the World in Sea Voyages and Lande Travells by Englishmen and others* 20 vols. (New York: AMS Press Inc., 1965) を使用する。
- (46) Purchas, vol.xvii, Book 9, ch.1, p. 400.
- (47) Purchas, vol.xvii, Book 9, ch.1, p. 400.
- (48) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 219.
- (49) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 223.
- (50) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, pp. 223-224.
- (51) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 224.
- (52) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 224, p.229.
- (53) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 231.
- (54) ウィリアムズ、pp.16-17.
- (55) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 232.
- (56) Purchas, vol.xviii, Book 9, ch.20, p. 233.
- (57) 人口増加について、サースクは次のように言っている。「1520年代のはじめ、イギリスの全人口はおよそ225万であった。1603年には350万と記されている。...最も急激な人口増加は1520年から1640年の間に生じた。」[ジョオン・サースク『消費社会の誕生 近世イギリスの新企業』(東京:東京大学出版会、1984)、p.206]なおロバート・グレイは*A Good Speed to Virginia*(1609)でイギリスの人口急増の解決策として過剰人口のヴァージニアへの移住を強調している。(Robert Gray: *A Good Speed to Virginia* ed. Wesley F. Craven in *Early Accounts of Life in Colonial Virginia 1609-1613*(New York: Scholars' Facsimiles & Reprints, 1976), B3.
- (58) 浮浪者、犯罪者等の植民地移住については以下の書に扱われている。[A.L.バイアー佐藤清隆訳『浮浪者たちの世界 シェークスピア時代の貧困問題』(東京:同文館、1997)、特に第9章参照。
- (59) トマス・マン 渡辺源次郎訳 『外国貿易によるイングランドの財宝』(東京:東京大学出版会、1965), pp. 153-279.

References

- J. Adair: *Founding Fathers The Puritans in England and America* (London: J. M. Dent & Sons Ltd., 1982)
- C. H. Andrews: *The Colonial Period of American History* (New Haven: Yale University Press, 1934)
- Philip L. Barbour: *The Three Worlds of Captain John Smith* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1964)

- Philip L. Barbour: *The Jamestown Voyages under the First Charter 1606-1609* 2 vols (Cambridge: At the University Press, 1969)
- Philip L. Barbour: *Pocahontas and Her World* (Boston: Houghton Mifflin Company, 1969)
- R. Beverley: *The History and Present State of Virginia* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1947)
- The Three Charters of the Virginian Company of London with Seven Related Documents; 1606-1621 with an Introduction by Samuel M. Bemiss (Virginia, 1957)
- Daniel J. Boorstin: *The Americans: The Colonial Experience* (New York: Vintage Books, 1958)
- C. B. Bridenbaugh: *Vexed and Troubled Englishmen 1590-1642* (New York: Oxford University Press, 1968)
- A. Brown: *Genesis of the United States*, 2 vols. (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1890)
- A. Brown: *Early Politics in Early Virginian History* (Boston and New York: Houghton, Mifflin and Company, 1901)
- P. H. Bruce: *Institutional History of Virginia in the Seventeenth Century* 2 vols. (Massachusetts: Peter Smith, 1964)
- C. Cherry ed.: *God's New Israel Religious Interpretation of American Destiny* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina, 1998)
- F. Chiappelli ed.: *First Images of America*, 2 vols. (California: University of California Press, 1976)
- W. F. Craven: *Dissolution of the Virginia Company* (Massachusetts: Peter Smith, 1964)
- J. H. Kettner: *The Development of American Citizenship* (Chapel Hill: The University of North Carolina, 1978)
- S. M. Kingsbury (ed.): *Records of the Virginia Company of London*, 4 vols (Washington, D.C.: Government Printing Office, 1906-1935).
Carolina Press, 1978)
- S. H. Palmer and D. Reinhartz eds.: *Essay on the History of North American Discovery and Exploration* (Arlington: the University of Texas, 1988)
- G. B. Parks: *Richard Hakluyt and the English Voyages* (New York: American Geographical Society, 1928)
- E. J. Payne (ed.): *Voyages of the Elizabethan Seamen to America* (Oxford: At the Clarendon Press, 1893)
- G. W. Prothero (ed.): *Select Statutes and Other Constitutional Documents Illustrative of the Reigns of Elizabeth and James I* Third Edition (Oxford: At the Clarendon Press, 1906)
- David B. Quinn ed.: *The Hakluyt Handbook*, 2 vols. (London: Hakluyt Society, 1974)
- David B. Quinn: *Set Fair for Roanoke Voyages and Colonies, 1584-1606* (Chapel Hill and London: The University of North Carolina Press, 1985)
- David B. Quinn: *England and the Discovery of America 1481-1620* (New York: Alfred A. Knopf, 1974)
- A. L. Rowse: *The Elizabethans and America* (London: Macmillan & Co Ltd, 1959)

- A. L. Rowse: *Shakespeare's Southampton Patron of Virginia* (New York: Haper & Row, 1965)
- Patricia Seed: *Ceremonies of Possession in Europe's Conquest of the New World, 1492-1640* (Cambridge: University Press, 1995)
- Bernard Sheehan: *Savagism & Civility Indians and Englishmen in Colonial Virginia* (Cambridge: Cambridge University Press, 1980)
- J.M. Smith (ed.): *Seventeenth-Century America* (Chapel Hill: The University of North Carolina Press, 1959)
- John Stoye: *English Travellers Abroad 1604-1667* rev.ed. (New Haven and London: Yale University Press)
- L. G. Tyler: *England in America* (New York: Greenwood Press, 1969)
- Alden T. Vaughan: *American Genesis Captain John Smith and the Founding of Virginia* (Boston and Toronto: Little, Brown and Company, 1975)
- T. J. Wertenbaker: *The Shaping of Colonial Virginia* (New York: Russell & Russell, 1958)
- T. J. Wertenbaker: *Virginia under the Stuarts 1607-1688* (New Jersey: Princeton University Press, 1914)
- T. J. Wertenbaker: *Give me Liberty The Struggle for Self-Government in Virginia* (Philadelphia: The American Philosophical Society, 1958)
- T. J. Wertenbaker: *The Planters of Colonial Virginia* (New Jersey: Princeton University Press, 1958)
- L. B. Wright: *Religion and Empire The Alliance between Piety and Commerce in English Expansion 1558-1625* (New York: Great Seal Books, 1959)
- L. B. Wright: *The Atlantic Frontier Colonial American Civilization* (New York: Octagon Books, Inc., 1965)
- Louis B. Wright (ed.): *The Elizabethans' America* (Massachusetts: Harvard University Press, 1966)
- Silvio Zavala: *New Viewpoints on the Spanish Colonization of America* (Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 1943)

III スペイン大使が見たヴァージニア植民

1606年にジェームズ一世の特許状により国家的事業として本格的に始まったヴァージニア植民は、17世紀初頭の英国内外の政治・社会の諸問題を抜きにしては考えられないものであった。なぜ英国は北米ヴァージニアの植民を始めたのか。ヴァージニア植民に少なからずの影響を与えたと思われる1584年出版のハクルート(Richard Hakluyt)の『西方植民論』(*Discourse of Westerne Planting*)は、エリザベス女王に対して英国のアメリカ大陸植民の必要性を訴えた英国植民の理論的支柱であったが、そのなかでハクルートは英国植民の正当性、妥当性を詳細に論じている。植民本来の目的であるキリスト教の普及は言うまでもなく、新たな交易による植民地からの物資の供給、英国産物(毛織物)の輸出、失業者解消、国内産業の活性化、大国スペインの中南米における覇権への対抗等を西方植民のメリットとしてハクルートは挙げているが、ヴァージニア植民もこれらにそった形で行われていた。ヴァージニア植民に関して筆者は、植民の本来の目的は利殖であったが、会社は殊更植民の宗教的使命を強調し、ヴァージニア会社本来の目的を宗教の名の下においていると考えている。ヴァージニア植民が一般人の関心・興味をよんだのもそれは会社への投資からくる利益であったのである。ヴァージニア会社は言うなれば宗教的使命とはほど遠い国内の閉塞した社会、経済、政治からの脱却を目指した国家の命運をかけた事業であったのである。このヴァージニア植民は1606年にジェームズ一世から特許状を得て、北米ヴァージニア植民に乗り出すわけであるが、その当初からスペインの英国駐在大使は詳細に植民活動を観察し、それを本国のフィリップ三世に報告していた。その大使は、Pedro de Zuniga(1605年7月-1610年4月又は5月)、Alonso de Velasco(1610年4月又は5月-1613年秋)、Galician Gondomar(1613年秋-1618年、1620年-1622年)の三人である。彼らはロンドンからヴァージニア植民に関する情報をフィリップ三世に送り、フィリップ三世はまた彼らに指示を出している。しかも報告書は第三者に読まれなくするためにわざと読みにくくしてある。筆者がスペイン大使の報告書を知ったのはバーバー(Philip L. Barbour)編纂の『第一特許状下のジェームズタウン航海1606-1609』(*The Jamestown Voyages Under the First Charter 1606-1609*)⁽¹⁾である。ここにはZunigaのフィリップ三世への報告が15通、フィリップ三世の指示が1通、記載されている。この後筆者は、ブラウン(Alexander Brown)の『アメリカ合衆国の起源』(*The Genesis of the United States*)⁽²⁾を読む機会を得たが、そこにはアメリカ植民に関する一次資料が網羅されており、スペイン大使の書簡もすべて含まれている。本論文の資料も主としてブラウンの資料によっている。それを読むと、いかにスペインがヴァージニア植民に当初から強い関心を持っていたかが理解できる。本論では、Zuniga, Velasco, Gondomarの順に彼らのフィリップ三世への報告とフィリップ三世からの彼らへの指示を見、スペインがヴァージニア植民をどのように見ていたかを明らかにしたい。スペインがヴァージニア植民に関心をもった理由の一つは、北米はそもそもスペインの領土であるのに、いかなる根拠をもって英国がヴァージニアを植民できるのか、ということであった。この問題点を中心にスペイン大使スニガ、ヴァレスコ、ゴンドマルのフィリップ三世への書簡を見てみたい。

1. Zuniga の報告書

スニガのフィリップ三世への最初の書簡は1606年3月16日付けである。この一カ月後の4月10日にジェームズ一世の第一特許状がヴァージニア会社へ公布されているので、スニガは一カ月前にすでにヴァージニア植民の情報を得ていたことになる。当時のスペインのスパイ網はヴァージニア評議会、ヴァージニア会社及びヴァージニアに張りめぐられていたが、スニガはスパイを通して、政府の秘密を得ていたのである。

They also propose to do another thing, which is to send 500 or 600 men, private individuals of this kingdom to people Virginia in the [West] Indies, close to Florida. They sent to that country some small number of men in years gone by, and having afterwards sent again, they found a part of them alive.

They brought 14 or 15 months ago about ten natives, that they might learn English, and they have kept some of them here [in London] and others in the country, teaching and training them to say how good that country is for people to go there and inhabit it. The chief leader in this business is the Justiciario [Chief Justice, Sir John Popham], who is a very great Puritan and exceedingly desirous, whatever sedition may be spoken of, to say that he does it in order to drive out from here thieves and traitors to be drowned in the sea. I have not yet spoken to the king about this; I shall do so when I see in what way they will try to satisfy me in the council.⁽³⁾

スニガは、ヴァージニア植民が具体化する前に既にヴァージニア会社の動向を把握し、第一に5-600人をヴァージニアへ送る計画をヴァージニア会社は持っていること、第二に、ヴァージニアから原住民をヴァージニア宣伝のために英国に連れてきて、教育を施していること、第三に、スペインからのヴァージニア植民への抗議に対し、植民は英国から泥棒と反逆者を追い出すためだという英国側の返答に言及している。スニガは、ヴァージニア植民について逐次フィリップ三世に報告しているが、スパイを通してとはいえ、数字の正確さには間違いがあるが、そう間違った情報は得ていない。この報告で注目すべきは英国のヴァージニア植民はスペインにとっては 'sedition' (煽動、治安妨害) であるというスペイン側からの主張とヴァージニア植民の目的である。'sedition' から、スペインが英国のヴァージニア植民を自国領土への侵害であると考えていることがわかる。スペインがヴァージニア植民に対して持っていた最大の反対理由は、ヴァージニアが本来はスペインの領土であるということであった。なぜスペインがヴァージニアをスペイン領土と宣言しているかはこの後のスニガのジェームズ一世との会見からもまた Robert Johnson の *Nova Britannia* やその縮約版 *New Britain* でも言及されており、スニガは特に *Nova Britannia* や *New Britain* を読んでおり、英国側のヴァージニア植民の根拠を知っていた。ヴァージニア植民の目的を国内の泥棒と反逆者を国内から追い出すためであるというジョン・ポップム卿からの引用は一部はあたっているが、それが植民目的のすべてではない。スニガの書簡が次に現れるのは翌1607年1月である。10カ月間もの間、スニガがフィリップ三世に全く報告をしていないとは考えられず、1606年3月から1607年1月までの間についてスペイン側のヴァージニア植民についての反応を我々は窺い知ることができない。1607年1月の報告でスニガは、英国がプリマス港からも植民者をヴァージニアへ

送っていることを記しているが (the second colony とはプリマスからの植民である)、ジェームズ一世がヴァージニア植民を全面的に支援し、前年1606年の第一特許状から得たのであろうが、ヴァージニア植民地の緯度にも触れている。

The pretext which they assert is, that the King [James I] over here has given them permission and his Patents to establish their religion in that Country, provided that they rob no one, under the penalty, if they do not obey he will not take them under his protection. He grants them leave to occupy any island within a hundred miles from the sea-coast; he orders that the second colony (as he call them in his patents) shall not come within one hundred miles of where the other may be established, without speaking of the distance at which they are bound to be from your Majesties subjects. He yields to one of these Colonies all the firm land which lies [illegible] to 45 and to the other from 45⁽⁴⁾ to 55°.

ジェームズ一世の特許状に触れて、ヴァージニア植民の目的の一つであるキリスト教布教、入植地の緯度を挙げているが、その数字も正確である。更にヴァージニア植民の目的として、スペインから得ていた物資をヴァージニアから得ることができること、太平洋航路の発見についても触れ、スニガが英国のヴァージニア植民の動向を詳細に観察していることを示している。ジェームズ一世はエリザベス女王時代のイギリスのスペインとの関係を改善しようと計画し、1604年スペインと講和条約を結び、両国は大使を派遣し合うほど良好な関係にあったが、スペインからすればイギリスのヴァージニア植民は両国の友好的関係を悪化させるものであった。スニガから報告を受けたフィリップ三世がヴァージニア植民を即刻阻止するようスニガに促しているのも十分に理解できる。スペインは当時カリブ海、中央アメリカ、メキシコ、それに南米の多くを支配下においていたが、フロリダからそう遠くないヴァージニアにイギリスが植民地を建設した場合、そこを拠点として英国が南下し、スペインと領土争いを展開し、最悪の場合戦争という事態に発展しかねない。スペインが英国のヴァージニア植民で最も恐れていたのはスペインの中南米における覇権に対する英国の台頭であった。ヴァージニア植民を許すことは英国の北米への進入を認めることになり、それがひいてはスペインの権威の失墜にも至る。スニガのフィリップ三世への報告で注目すべきは、ヴァージニア植民におけるジェームズ一世の特許状や会社の公式文書での植民の宗教的使命にスニガはそれほど言及せず、植民を英国の海賊行為の基盤としてとらえていることである。スニガは、ヴァージニア植民と宗教との関連について全く言及しないかというのではなく、確かに言及はしている。しかし、それよりは英国の海賊行為の拠点としてヴァージニア植民をとらえ、それをフィリップ三世に報告し、フィリップ三世もそれに応じ、ヴァージニア植民は断じて許されべきではないと指示するのである。スニガやフィリップ三世のヴァージニア植民反対の大きな理由はヴァージニア一帯が本来はスペインの領土であるという主張に由来している。Ciriza の書簡にはスニガ同様のヴァージニア植民への反感が見られる。

...it was thought proper that with all necessary forces this plan of the English should be prevented, and that it should not be permitted in any way that foreign nations should occupy this country,

because it is, as has been said, a discovery and a part of the territory of the Crown of Castille, and because its contiguity increases the vigilance which it is necessary to bestow upon all the Indies and their commerce--and this all the more so if they should establish there the religion and the liberty of conscience which they profess, which of itself already is what most obliges us to defend it even beyond the reputation which is so grievously jeopardised.⁽⁵⁾ . . .

ヴァージニアがカスティーユ王の領土であること、ヴァージニアが英国の領土となる場合スペインはますますヴァージニアへの警戒を強化し、それがスペインの他の領土からの注意をそらさせる結果となり、特に宗教を中心にヴァージニアが植民地になる場合はなおさらである。この書簡でも言及されているが、ヴァージニアがスペインの領土であるという主張はスペイン側から繰り返される主張である。そもそも何を根拠にスペインはヴァージニアを自国の領土と主張しているのか。それに対して英国はいかなる態度をとっているのか。この問題の解決なくして英国のヴァージニア植民はありえない。これについてはすでに言及したハクルートの『西方植民論』（1584年）で既に論じられており、ハクルート以後の英国のスペイン反論の発端は実はハクルートの書にあるといってもよいだろう。ハクルートは、『西方植民論』でスペインがいかなる根拠に基づいてヴァージニアを自国の領土と主張しているかを論じている。それによれば「スペイン生まれの教皇アレクサンデル六世が教書によって西インド諸島全域をスペイン国王たちと子々孫々に贈った」（第19章）のである。これに対しハクルートはそもそも教皇にはそのような贈与を行う合法的な権威がないこと、教皇がこの世のものや地上の王国を勝手に与えたり分けたりすることは本来の教皇の職務とは無縁であると論ずる。教皇側は贈与の先例を旧約聖書に見出し、贈与の正当化を主張する。しかしながら、旧約の例では神からの命令によって行われたのであり、神が名指せば教皇も旧約と同じことをしてよいが、しかし、アレクサンデル六世の場合、彼は「見たこともなければ聞いたこともない多くの王国を、しかもそれがどんなところか、どれだけ大きいかも知らず、いや実を言えば、それらが自然界にあるかどうかさえ分かりもしないのに、自分の宮殿で教書を認め、これを与えてしまったような者はいまだかつてなかった」のである。アレクサンデル六世はまさにこれをしたのである。彼がなぜこの贈与を行ったかといえ、それは「すべての人から魂の救済を手に入れたい、野蛮な国の人々を征服して、信仰の道につかせたい」からであった。しかし実際にスペイン人は何を行ったか。何百万もの原住民を殺戮するのが彼らが行ったことではなかったか。教皇が贈与を行った理由はコロンブスが発見する土地をポルトガルや英国に持っていかれるのを恐れ、先手を打って教皇は「全西インドの一切合切を、突如としてスペインの国王たちに与えた」のである。いかなる点からみても教皇の贈与は理解できない恣意的な行為である。ではハクルートはヴァージニア一帯をどのような理由で英国の領土と主張するのか。これは第18章で論じられていることである。ハクルートによれば、歴史的事実がヴァージニアの英国領土の根拠となる。ハクルートは、「西インド全域とはいわないまでも、少なくともフロリダから北極圏にいたる地域については、イングランド女王のもっている権原の方が、スペイン人やその他いかなるキリスト教の君主のそれより、はるかに合法的で正当なものである⁽⁷⁾」ことを過去の歴史に照らし合わせて論ずる。ヴァージニア一帯がいつ誰によって発見されたか、いつ人が住み始めたかを論ずることから始める。ハクルー

トは、古い年代記により、西インド地方はコロンブスが1492年に発見するまえに1170年にすでにマドックという北ウエールズの王が発見していることを指摘する。二番目には、西インドについてのコロンブスの申し出を最初に受諾したのはヘンリー七世であり、コロンブスの弟を英国に送り、ヘンリー七世と西インド発見について商議しており、これが西インドへの英国の権限を重大なものにしている⁽⁸⁾のである。更にコロンブスの弟の言葉として、ハクルートは次のように言う。

... つまり西方の島々と大陸とを問わず、その大部分が、もずもって発見されたのはイングランド国王のためであり、発見者はセバスチャン・ガボータ、つまりプリストル生まれのイングランド人で、ヴェネツィアの人ジョン・ガボータの息子、時はわれらが主の年、1496年であった...⁽⁹⁾

かかる歴史的経過からしても、英国人がスペインより早く西インド大陸を発見しており、その占有権は英国にあるというのがハクルートは論点である。「少なくとも... 北緯58度から赤道方向に向かって38度のところまでは、キリスト教徒のなかでわれわれイングランド人が、最高の権利と権原をもっている⁽¹⁰⁾のであります。」ハクルートのヴァージニアへの英国領土主張の背景は以上見てきたように、最初に教皇アレクサンデル六世の贈与の不当性、およびヴァージニアの最初の発見者が英国人であるという歴史的事実、この二点からヴァージニア植民の正当性を論ずるのである。

英国側のヴァージニア領土権主張にもかかわらず、スペインは英国大使スニガのフィリップ三世への報告書からも明らかなように、執拗にスペイン領土を主張する。スニガがハクルートの書を読んだか否かはわからないが、スニガは英国の主張は知っていた。彼の強硬な態度には教皇アレクサンデル六世の寄贈と1604年の英国との講和条約があった。スニガは実は1607年9月27日にジェームズ一世に謁見し、直後1607年10月フィリップ三世へ謁見の詳細を報告している。更に重要なことはRobert Johnsonの *Nova Britannia* を要約した *New Britain* をフィリップ三世へ送っていることである。ジョンソンも英国人として英国のヴァージニアへの権利主張を行っているが、それをスニガは知っていた。ジョンソンの『新しいブリテン』についてはこのあとで触れるが、ここでは最初にスニガのジェームズ一世との会見を見て、そこでスニガは何を主張しているか見てみたい。

スニガは英国のヴァージニア植民についてフィリップ三世の不快の念をジェームズ一世に伝え、ヴァージニアはスペイン西インドの一部であると主張し、ヴァージニア植民は「極めて不快 (obnoxious)」であるとフィリップ三世は見なさざるをえないと言う。これに対してジェームズ一世は次のように答えている。

- (1) [ヴァージニアについて]何が起きているかジェームズ一世は知らない。
- (2) ヴァージニア航海についてフィリップ三世がヴァージニアの権利を有していることはわからなかった。
- (3) ヴァージニアはスペインからは遠い土地で、英国及びフランスとの平和条約でも西インド諸島を除いて英国国民がヴァージニアへ行くべきではないとは規定されていない。

(4) スペイン人が新しい地域を発見したように、英国民も同じことをすることができる⁽¹¹⁾とジェームズ一世には思われていた。

ジェームズ一世のスニガへの返答には(1)や(2)のようにその真実性を疑わせるものもあるが、ジェームズ一世は概して英国のヴァージニア植民については教皇アレクサンデル六世のヴァージニア贈与や英国が最初にヴァージニアを発見したことには触れず、ことさらスペインをいたずらに刺激しないようにという態度が見られる。スペインと講和条約やスペイン王女と息子との結婚問題とかがあって、ジェームズ一世は微妙な立場にあったことは確かで、スニガとの会見でもジェームズ一世はスニガに対して強硬な姿勢を見せることはせず、「平和愛好家」としての一面を見ることができる。上記のジェームズ一世の返答に対してスニガは、英国民が西インド諸島へ行くべきでないことは平和条約の一条件であると答える。スニガとの会見でジェームズ一世がヴァージニア植民者の自己責任を強調し、英国政府とは無縁であると言っていることは驚きである。スニガとの会見は前年1606年に第一特許状を発した後であり、ヴァージニア植民はいわばジェームズ一世が認可した政策であったにもかかわらず、植民者の自己責任を説明するジェームズ一世の真意は理解できない。スニガはジェームズ一世に何とかしてヴァージニア植民をあきらめさせようとし、ヴァージニアは不毛な土地であり、海賊行為以外何にも適さない土地で、海賊行為は決して許されないと言う。土地の不毛に加え、富を求めるヴァージニア植民者はだまされており、ヴァージニアから得るものはジェームズ一世にはなにもない、即座にヴァージニア植民は中止すべきであるとスニガは執拗にジェームズ一世にせまる。ジェームズ一世のスニガへの返答の中で、ジェームズ一世は殖民者はどうにもならない連中で、王としては問題の改善を行いたいと言っていることは注目に値する。ジェームズ一世は、スニガが言ったすべては確かであると十分承知しているとさえ言っている。スニガのフィリップ三世への報告のすべてが事実であるとは言いきれないが、王への公式報告書でスニガがそれほど虚偽の報告をするとは考えられない。とすればジェームズ一世との会見にも否定できない真実がうかがえると考えるのは妥当である。この会見のなかでスニガは、ジェームズ一世が適当な処置を取らなければ両国の関係は悪化すると半ば脅迫めいた口調で強硬に植民の阻止を訴えているが、これはスペイン側がヴァージニアは不毛で植民には適さないと言いつつも実際は英国の植民がスペインにとっていかに重大な影響を及ぼすかスニガは十分理解していたかの証拠である。それは又大国スペインの警告を無視してまで英国が強硬な行動に出ることによる大国スペインの権威の失墜へのスペインの危惧であろう。フロリダをも含めて西インド諸島でのスペインの権威の衰退は将来のスペインの西インド諸島における地位に大きなダメージを与えかねない。最悪の場合、スペインの西インド諸島からの撤退をも考えねばならないことになる可能性もある。それゆえ、スペインとしては英国のヴァージニア進出は是が非でも阻止しなければならない。それに英国のヴァージニアへの進出を認めれば他のヨーロッパ諸国も英国に追随するおそれがある。スニガは強硬にジェームズ一世に対してヴァージニア進出をあきらめさせようとしている背景には単なる英国の海外進出という問題にとどまらず、スペインの海外政策への重大な影響問題がからんでいたのである。スニガのジェームズ一世との最初の謁見はこのような観点から見ると非常に興味ある謁見となっているが、この報告を見る限り謁見の主導権はスニガにある印象を受ける。スニガはジェームズ一世の性格を見通して、自分に有利に会見を誘導し

ており、ジェームズ一世を手玉に取っている感が強いが、これはジェームズ一世の計略なのかもしれない。なぜならばこの会見でスニガに従順に応じている様子を見せながら、その裏ではヴァージニア植民者をロンドンのみならずプリマスからも送り出しているからである。フィリップ三世への報告書の終わりでスニガは次のように言っている。

These explanations of the Council [promised by the king] are apt to be very long and protracted here, and in the meantime they may send more people there [to Virginia], and fortify themselves there, for I hear that from Plymouth, they have settled another district there near the other--I shall be careful to find out about what is going on, and I shall report to Y.M.; but I should consider it very desirable that an end should be now made of the few who are there, for that would be digging up the Root, so that it could put out no more ⁽¹²⁾ e .

この会見から1週間後、スニガはフィリップ三世へ報告を送るがそこでもジェームズ一世は、ヴァージニア植民問題を注意深く調べてみると英国人はヴァージニアへは行けないよ うだと言っているが、植民者がヴァージニアへ行くのを阻止したり現地にいる人達に帰国を命じたりはできない、言っている。植民者の阻止や入植者の帰国命令はスペイン王が西インド諸島の統治者であることを認めることになるからであるという理由からである。ジェームズ一世としては、スペインとは友好的な関係を築き、スペインをことさら刺激するようなことはしたくなく、ヴァージニア植民も一部の者が勝手に行っているとスニガには言い訳しているが、しかし特許状公布により他国はヴァージニア植民を王の関知しない一部狼藉者の行動だというジェームズ一世の説明に納得するはずがない。スニガはジェームズ一世の植民弁解をうのみにはしなかったであろう。ジェームズ一世はスニガを喜ばせようと一歩譲歩した態度を示しながらも、裏ではスペインに対して強い対抗意識を見せている。この後もスニガはフィリップ三世へヴァージニア植民について報告書を送り、植民を即座に阻止しなければならないとフィリップ三世へ進言し、ヴァージニアへスパイを送り込んでさえいるが、スペインが植民を阻止する具体的な行動にでることはなかった。

1609年2月、ロバート・ジョンソン(Robert Johnson)は、『新しいブリテン』(*Nova Britannia*)というヴァージニア植民を支持し、冒険商人、植民者を鼓舞する本を出版した。それを Cresuelo なる神父が半分に要約し、スニガがそれをフィリップ三世へ送っている。原本は12,000語であるが Cresuelo は、それを半分の6,000語に要約した。その要約はスペイン語には翻訳されなかったようであるが、スニガもフィリップ三世も要約文は読んでいたと思われる。これを読むと英国がヴァージニア植民に対していかなる態度をとっているか、なぜ英国がスペインと対抗してまでも植民に専念しようとしているかが理解でき、スペイン側からすれば英国の本音を知る格好の書となっている。ジョンソンが *Nova Britannia* を出版した1609年はヴァージニア会社にとっては危機の年であった。ヴァージニアでは指導者が交代し、植民の前途が危ぶまれていたのである。ジョンソンはヴァージニア植民を取り巻くかかる事情を十分に理解し、ヴァージニア会社・植民を全面的に支持する。会社はそれをすぐさま出版し、ヴァージニア植民賛同者(冒険商人)と植民者に希望と安堵の念を与えようとする。スニガにとってはジョンソンの書は無視できない重要な書である。スニガが主張するスペインのヴァージニアへの領土主張をジョンソン

は真っ向から否定しているからである。ではジョンソンはいかにしてヴァージニア植民を擁護しているのか。ジョンソンは、最初にアレクザンデル六世の寄贈に触れ、それを「冗談かつばかげた作り話し」(joke and a ridiculous inventio⁽¹³⁾n)として一蹴し、アメリカ大陸へのスペインの領土権主張には歴史的根拠がないと主張し、イギリスのヴァージニア進出には何ら問題はないと指摘した後で、ヴァージニア植民の現状、目的、今後の取るべき道を指摘し、結果としてヴァージニア植民は十分に植民の価値があり、最初は利益がないように見えるが、決して放棄すべきではないとの激励で終わっている。スペインのそもそものヴァージニアへの権利主張を全く問題にせず、逆に過去の歴史からヴァージニアへの英国の権利を主張する。ハクルート同様ジョンソンは、ヴァージニアはヘンリー七世の時に既に発見され、1584年と1587年に植民者がヴァージニアへ送られていることを指摘する。ジョンソンにとってヴァージニアは、「英国の富と国力をはぐくむ場所であり源泉」(a very nursery and fountaine of much wealth and strength to this Kingdo⁽¹⁴⁾m)であり、植民という「高尚かつ容認しうる事業」(high and acceptable work⁽¹⁵⁾e)は、「心を教化し魂をなぐさめるために目の前の真の光の輝きをまだ見たこともない野蛮で盲目的な何百万もの男女の間に神の王国を推進し広める」(advance and spread the kingdome of God, and the knowledge of his truth, among so many millions of men and women, savage and blinde, that never yet saw the true light shine before their eyes, to enlighten their mindes and comfort their soule⁽¹⁶⁾s)ことがその目的である。これは特許状が挙げていたヴァージニア植民の第一の目的であるキリスト教のインディアンへの布教と一致しており、ヴァージニア植民がまずなすべきことは植民地でのキリスト教の推進と布教である。原住民をキリスト教に改宗させることは神の王国推進に至り、「迷える羊」である原住民を救うのは神から英国民に与えられた使命であるとさえ言う。このようにジョンソンはヴァージニア植民のキリスト教的使命を明確にする。何はともあれ最初に考えるべきは異教徒のキリスト教への改宗であり、その改宗を通して英国は神の国建設に貢献する。ジョンソンは次にヴァージニア植民の目的を国王の名誉と王国拡張とする。ヴァージニア植民を単なる個人的な商業的事業にとどめず、英国王と国家のためというより大きな視点からヴァージニア植民を見つめることによって、人々に愛国心を植え付け、更にはスペインにとって代わる中南米のリーダーとしての英国を強く人々に訴えようとする。ジョンソンは次のように言う。

But for my second point propounded, the honour of our King, by enlarging his Kingdomes to proue how this map tend to that: no argument of mine can make it so manifest, as the same is cleere in it selfe; Diuine testiments shew, that King consisteth in the multitude of subiects, and certainly the state of the Iews was farre more glorious, by the conquests of Dauid, and under the ample traigne of Solomon, then euer before or afte⁽¹⁷⁾r :

ジェームズ一世は David 王, Solomon 王にたとえられ、ヴァージニア植民は旧約聖書の David や Solomon の他民族征服に比較され、ジェームズ一世のアメリカ植民には前例があることを指摘する。王の名誉は臣下の増大にあり、そのためには他国の植民も許されるという論理である。予言者 Daniel は、多くの者を正しい道へ導き入れる征服により永遠に光り輝いた。そのようにジェームズ一世もヴァージニア植民によって異教徒を義の道へ導

くことにより歴史に永遠にその名を留めることになる。聖書の人物と彼らの行動を巧みに比較させ、ヴァージニア植民の正当化を訴えるジョンソンの手法は以後の宣伝文書のさきがけとなる。特に説教家達によるヴァージニア植民擁護はすべてこの手法によっており、以後ジェームズ一世のヴァージニア植民者は旧約・新約聖書の様々な人物とその行動にたとえられ、「神の書」からのお墨付きを付与されるのである。この愛国的心情は更に続き、ヴァージニア植民により王の英知、威厳、名誉は世界の果てまで広がる。

And upon good warrant, I speake it heere in priuate, what by these new discoveries into the Westernne partes, and our hopefull settling in chieffest places of the Cast, with our former knowne trades in other partes of the world, I doe not doubt (by the helpe of God) but I may liue to see the daies (if Merchants haue their due encouragement) that the wisdom, Majestie, and Honour of our King, shalbe spread and enlarge to the endes of the world, our Navigations mightely encreased, and his Majesties customes more then treble ⁽¹⁸⁾ d .

スペインを意識した英国国民へ対する国威発揚の意図をも狙ったジョンソンのヴァージニア植民の目的は明確である。ジョンソンは、英国国民のヴァージニア植民への熱意がさめつつあったなかでヴァージニア会社及びジェームズ一世側に立ち、ヴァージニア植民の正当性・有用性を強く国民に訴えるのである。ヴァージニア会社は本来は商業的な株式会社であり、出資者・植民者の目的は見返りとしての「利益」にあったことは確かである。それにもかかわらずジョンソンはさかんに植民の宗教的使命と英国の国威発揚を植民の目的として挙げ、英国国民を激励しようとする。それではジョンソンはヴァージニア植民の利益に関して何も触れていないかというところではなく彼もそれについては触れてはいる。その前にジョンソンはヴァージニアの穏和な気候、豊富な資源を称賛し、植民に不足するものは何もないことを強調し、ヴァージニアを「この世の楽園」(this earthly Paradise) ⁽¹⁹⁾ (B2) とさえ呼んでいる。ヴァージニアの土地の価値は今はないかもしれないが、時間と資金があればいずれは良くなる。

And howsoever those grounds in Virginia are now but little worth indeed, yet time and meanes will make them better, considering how they passe our ground in England, both in regard of the soile and climate, fitter for many precious use ⁽²⁰⁾ s :

ジョンソンが *Nova Britannia* を書いた1609年2月はヴァージニア植民が始まって2年が経過していたが、ヴァージニアでの植民の実績は期待していたほどではなかった。とにかく植民者をヴァージニアへ送るには資金が必要である。しかしヴァージニアでの経過が思わしくない状況のなかで資金投資への見返りがあるかは疑わしかった。ジョンソンはこれらの事情を十分に把握したうえで、最初に植民の実体とはほど遠い宗教的使命を植民の目的に掲げ、その後植民事業の本来の目的である利益活動に触れる。「この世の楽園」であるヴァージニア植民による利益は何なのか。ジョンソンは金銀には触れない。12ポンド10シリングの出資によって出資者は7年後に少なくとも500エーカーの土地を取得できるのである。とにかくただちにヴァージニアへ行き、先発隊を支援することが先決

であり、その結果によってさらに株の配当も可能となる。ヴァージニア植民は「希望に満ちたすばらしい出来事」(so rich a prize of hopefull euent⁽²¹⁾)であり、今そのチャンスを逸するべきではない。ジョンソンはヴァージニア植民の利益については直接的には言及しない。ただ何もしないでいるよりはまず行動せよと訴え、そのためにヴァージニア会社に投資を呼びかけるのである。ジョンソンの主張はヴァージニア植民宣伝文書としては模範的な文書と言える。聖書からの植民の正当化、スペインへの対抗意識からくる国威発揚、更にはヴァージニア植民投資からの確実な収益等、人々の関心事を巧みに取り上げている。ジョンソンは直接にはヴァージニアへは行ったことがないのだが、ヴァージニアの風土や豊かな自然についてはあたかも本人が見てきたかのような描写で、説得力のある内容となっている。

スニガがフィリップ三世へ送ったのは以上の要約で、内容はいわば宣伝文書で、そこには中南米世界のリーダーを自認するスペインが看過できない重要な点が多く含まれている。何よりもスニガがそしてフィリップ三世が恐れたであろうことは、このジョンソンソンの宣伝文書によりスペインが望むように精神的にも物理的にも植民地政策の情勢が不利になりつつあったなかで、ヴァージニア植民が再び脚光を浴び、一般人に新たな植民熱が喚起されることであった。スペインが恐れたのはまさしくこれであった。ジョンソンの宣伝文書がなければヴァージニア植民熱は冷え、一般の人々の関心も薄れ、いずれは消滅の道をたどり、二度と植民者をヴァージニアへは送れなかったであろう。しかしジョンソンは巧みにヴァージニア植民を論じ、スペインと英国の間のヴァージニアをめぐる論争点、ヴァージニア植民の現状、将来の展望を論じ、いかなる点から見てもヴァージニア植民から手を引く理由は見あたらないことを強調する。スペインからすればヴァージニア植民の宗教的使命、植民による社会問題の解消、英国国力の増強、すべてがスペインにとって不利となるものばかりである。ヴァージニア植民が更に展開すればスペインの中南米政策が大きな壊滅的な打撃を受けることは必死である。スニガはヴァージニア植民は現地の風土、インディアンとの関係、食料不足、それに金銀が発見されなかったこと等からいずれは消滅すると考えていたし、消滅を待たないでも軍隊を派遣すれば簡単にヴァージニアを奪回できると考えていた。フィリップ三世やスニガがジョンソンの *Nova Britannia* をどのように見ていたかについては言及がなく、彼らの反応を知るすべはない。しかし、いかに宣伝文書とは言え、ヴァージニア植民への英国の態度を直接目にしたフィリップ三世やスニガは本心穏やかならざる気持ちであったに違いない。しかしこの後もスニガや後任のヴェラスコはヴァージニア植民の現状を高くは評価していないことから判断するとフィリップ三世やスニガはジョンソンの宣伝文書を単なる宣伝文書とみなし、それほど重視はしなかったのかもしれない。いずれにせよフィリップ三世はスニガからの報告を受けながらも決してヴァージニア植民へ実力行動を実践することはしない。1624年ジェームズ一世はスペインに宣戦布告するが、まだそれまでは十分な時間があり、両国は表面的な友好関係を続けることになる。スニガの英国大使は1610年4月(もしくは5月)まで続く。その間、スニガはフィリップ三世へヴァージニア植民の動向を報告している。スニガの後英国大使となったのは Don Alonso de Velasco で、彼は1613年まで大使を務める。次にヴェラスコのフィリップ三世への報告を見てみたい。

2. Velasco の報告

ヴェラスコは1610年4月（又は5月）から1613年の秋頃まで3年間英国大使を勤めた。その間前任者のスニガ同様英国のヴァージニア植民に関して、ロンドンからフィリップ三世へ書簡を送り、フィリップ三世もヴェラスコへ指示を出している。ヴェラスコがロンドンへ大使として赴任する1年前の1609年5月にジェームズ一世はヴァージニア会社に二回目の特許状を發布し、第一回目の特許状の欠点を補うべくヴァージニア統治の全権を王から会社に移した。第一回目の特許状では、ヴァージニアの統治を王立参事会とヴァージニア現地の現地参事会の二つに分けたが、これは非現実的と考えられたためであった。ヴェラスコが大使として赴任したとき、ヴァージニア植民は存亡危機の状態にあった。またヴァージニア植民を取り巻く状況も楽観できないものとなっていた。1609年ヴァージニア会社に向けて出航した船「デラウエアー総督、トマス・ゲーツ船長」がバーミューダ島で遭難し、生存者が1610年5月に新たに船を作り、ヴァージニアへ再度向かった。現地ヴァージニアの状況はひどく、生き残っている植民者を乗せて帰国しようとしたとき6月本国からのデラウエアー卿率いる援軍に出会い、ヴァージニアに戻ったのである。このようなヴァージニア植民の悪条件のなか、ヴァージニア会社は1610年に2つの「宣言書」を出版し、植民事業の名誉回復をはかる。一つは、「ヴァージニアで始められた植民の目的・目標の真実にして誠実な宣言」(*A True and sincere declaration of the purpose and ends of the Plantation begun in Virginia...*)である。ヴァージニア植民に対する様々な批判、中傷、誹謗、風評からヴァージニア植民を擁護するために公式の宣言書で、ヴァージニア植民の目的、植民の手段及び植民評議会の決意と結論を偽りなく述べることによって、ヴァージニア植民への人々の関心を再度高めようというものであった。その宣言書によれば植民の第一の目的は福音布教で、「宗教的な高尚な実現可能な」事業である。

The Principall and Maine Ends ... weare first to preach, & baptize into Christian Religion, and by propagation of that Gospell, to recouer out of the armes of the diuell, a number of poore and miserable soules, wrapt vpp vnto death, in almost inuincible ignoranc⁽²²⁾ e ;

キリスト教を説き、福音の布教によりみじめな魂を悪魔の手から救出するという植民の目的はジェームズ一世の第一勅許状の文言を思わせる。ヴァージニア植民の第二の目的は、スペイン対抗の基地としてヴァージニアに累壁を築くことである。

Secondly, to prouide and build vp for the publike Honour and safety of our gracious King and his Estates...some Small Rampier of Our owne, in this Opportune and generall Summer of peace, by transplanting the rancknesse and multitude of increase in our peopl⁽²³⁾ e ;

ヴァージニアにおける対スペイン用の防御用の砦を築き、急増した人々を送り込むことによって国内の人口増解決をも解消する。最後に「利益」である。

Lastly, the apparance and assurance of Priuate commodity to the particular vndertakers, by recouering and possessing to them-selues a fruitfull land, from whence they may furnish and prouide this Kingdome, with all such... necessities, and defects vnder which we labour, and are

now enforced to buy, and receive at the currencie of other Princes, vnder the burthen of great Customes, and heauy impositions,..⁽²⁴⁾

ここで言及している“Priuate commodity”はヴァージニア会社への投資からの利益ではなく、「肥沃な土地」ヴァージニアの農産物栽培から生ずる利益である。英国内で不足し他国に依存しなければならない農産物のヴァージニアからの供給により、他国からの経済的自立を目指す英国の政策と一致する利益である。ヴァージニア植民の宗教的使命、対スペイン政策の一環としての植民事業及び豊かな土地ヴァージニアからの収益、これらがこの宣言書で述べられている。これまでの植民の経過を述べ、ヴァージニア植民に対して様々なうわさ、中傷が流れているなかでヴァージニア会社は必死にそれらを打ち消し、植民の正当性・妥当性を訴え、植民への人々の関心を引き起こそうとしている。同じ1610年11月にもう一度ヴァージニア会社への誹謗反駁のために宣言書が出版される。「ヴァージニア植民状態に関する真なる宣言、かくも価値ある事業の不評へと至った中傷的な報告書反駁」(*Trve Declaration of the estate of the Colonie in Virginia, With a confutation of such scandalous reports as have tended to the disgrace of so worhy an enterprise*)がそのタイトルである。タイトルにもあるようにヴァージニア植民現状の紹介とヴァージニア植民誹謗への反駁を目的として書かれた宣言書である。宣言書の著者は、ヴァージニア植民を(1)合法性(2)実現可能性(3)利益性、の三点から考察し、ヴァージニア植民はいずれにも合致することを指摘する。植民の第一の目的は宗教[キリスト教]を原住民に植え付けることであり、二番目の目的は国家の名誉と利益である。更に福音を述べ伝えることは確定した真理であるとも言う。(B)福音を異教徒に述べ伝えることは絶対的な真理であるが故に、ヴァージニア植民の合法性はたとえそれが先住民の土地への進出であっても許される行為となる。ここでも植民という海外進出が宗教の名の下に合法化されている。宣言書ではキリスト教布教の大前提のもとに植民の合法化を強調するが、それでは聖書からの植民合法性についてはどうなのか。これについて宣言書はオリゲネスの「神の行動は我々[人間]の訓令である」を引用して、創世記11章をあげる。神は“scattering those clouen people, into as many colonies ouer the face of the earth, as there are diuersities of languages in the eart⁽²⁵⁾ h”と述べ、植民は神によって始められたと言う。神以上にすぐれた始まりはなく、神の英知は疑問の余地がなく、後世に神の足跡は模倣されているとも言う。ヴァージニア植民の先例を聖書に見出し、それによってヴァージニア植民を正当化しようとするのはこれまでの方法と同様である。聖書に記されていることとヴァージニア植民は同様であると言うことによって人々の疑念を取り去り、安心感を与えるのである。宣言書では聖書以外にも過去の歴史から植民の事例を引き出し、ヴァージニア植民が初めてではないことを強調する。宣言書では最初に植民の宗教性を論じ、ヴァージニア植民の本来の目的をキリスト教布教に置く。それではヴァージニア植民の利益はどうなのか。ヴァージニアの土地の豊かさ、穏和な気候、統治形態、植民者の状態及び信心深い植民者の態度から植民が不可能であるはずはなく、必ずや植民は成功すると述べる。ヴァージニアの肥沃な土地に言及することはこの宣言書以前と同様で、ヴァージニア会社出版の公式文書では土地の肥沃さには必ず触れることになっている。ここで注意しなければならないことはヴァージニア会社の構成は会社に利益の還元を期待し、投資をする「冒険商人」(adventurers)と実際にヴァ

ージニア植民へ赴いた人 (planters) の二組から成っていたというこである。宣言書では前者のロンドンに留まり、ヴァージニア会社へ投資し、利益を期待する人々には触れず、ヴァージニア植民者について触れているのである。ヴァージニアは肥沃な土地に恵まれており、現在英国がヨーロッパ諸国に依存している産物がすべてがヴァージニアで調達でき、不足するものは何もない。これほどの条件に恵まれながらもヴァージニア植民は結果が思わしくない。追い打ちをかけるように様々な悪い時がヴァージニアから英国へ伝ってくる。宣言書によればヴァージニア植民の結果がかんばしくないでヴァージニア評議会は植民の継続か中止かを議論し、ヴァージニアにいるトマス・ゲイツ (Thomas Gates) を本国に呼び寄せ、ヴァージニア植民の現状を問いただした。宣言書はゲイツの報告に従い、ヴァージニアには英国の必要とするものがすべて手に入ると言う。木材、カイコのえさとなる桑の末 (これによりイタリア産出の絹と同じ量の絹が短時間において期待できる)、鋳物 (ヨーロッパの鉄に匹敵する良質の鉄となる)、索具の原料の麻大麻や亜麻、チョウザメのいる川、ブドウ、毛皮の材料となるビーバー、狐、リス、各種の果物、穀物 (英国よりの三倍の収穫が見込まれる) 等、あらゆる物が直接ヴァージニアから調達できるのである。英国が他国に依存している産物が直接ヴァージニアから調達することにより英国の経済が自立できるという最大のメリットがある。これは英国の他国からの経済的自立の観点から見れば、単なる利益とか収益とかいう個人的なレベルではなくより大きな国家的なレベルの問題である。作者の意図は個人的な利益をヴァージニア植民から期待するのではなく国家全体の利益に資するような利益を考慮すべきだということである。他国への経済的依存を脱し、自給自足の経済を強調する宣言書はヴァージニア会社への出資者、ヴァージニア植民者に愛国心、を煽ることになる。これら宣言書の内容はしかし、これまでのヴァージニア会社の公式文書と比べた場合、それほどの違いはない。特徴としては英国経済の自立をからめてヴァージニア植民を論じていることである。

ヴェラスコがこれら二つの「宣言書」に触れている記録はなく、フィリップ三世へも宣言書については報告していない。しかし、1610年6月付けのフィリップ三世への最初の報告ではヴァージニアにおける植民の惨状を既に知り、フィリップ三世へ次のように報告している。現地の悲惨な状況に触れたあとでヴェラスコは言う。

Thus it looks as if the zeal of this enterprise was cooling off, and it would on that account be very easy to make an end of it altogether by sending out a few ships to finish what might be left in that place [Virginia], which is so important for pirates⁽²⁶⁾

ヴァージニア植民熱がさめつつあること、植民事業を終わらせることは容易であること、しかもその植民地は海賊の基地であること、をヴェラスコはフィリップ三世へ報告する。宣言書を読めば、英国の植民への熱意は否定できないものとなっているが、それを知ってか知らずか、ヴェラスコはヴァージニア植民に対して否定的な見方をしている。ヴァージニア植民は遅かれ早かれ自滅するというのがヴェラスコが大使の間に持っていた見解であった。同じ1610年9月のフィリップ三世への報告では次のように言う。

I think this plan might be brought to nought with great facility, if Y.M. were pleased to command

that a few ships should be sent to that part of the world, which would drive out the few people that have remained there, and are so threatened by the Indians that they dare not leave the fort they have erecte⁽²⁷⁾d .

二三隻の船があれば楽々とヴァージニア植民は壊滅し、しかも現地の植民者はインディアンによって脅かされ、砦から出ることもできない状態である。ところがヴェラスコの予想に反し、ヴァージニア植民は簡単には消滅しなかった。逆にジェームズ一世は、様々な物資とともに植民者をヴァージニアへ送り込む。ヴェラスコは英国のヴァージニア植民への熱意にやや不安な気持ちにおとし入れられ、ヴァージニアがスペインの西インド諸島に及ぼす影響を報告する。それは、英国がヴァージニアでの植民を確固たるものにすれば、スペインの北米への進出が阻止され、しかもヴァージニアからスペイン領土のフロリダへの侵略も可能となってくるのである。ヴァージニアとフロリダの距離はそう遠くはない。しかもヴァージニアからは追い風で、6日間でフロリダへ到着できる。ヴェラスコはすぐさま戦争を始めるべきだとフィリップ三世へ助言する。英国への宣戦布告はスニガにはなかったことで、一方でヴァージニア植民の崩壊、自滅を予想しながら、英国が本腰をあげて植民に取り組む様子に驚き、宣戦まで考えているヴェラスコにスペインのヴァージニア植民の意義の再認識がうかがわれる。ヴァージニア植民が本格化することがスペインにとっていかなる意味を持つか、ヴェラスコは真剣に考え始めている。しかし、フィリップ三世は決して軍隊を送り、ヴァージニア植民を破壊しようとはしない。1610年の二つの宣言書に見られる英国の植民への意気込みはそれらが公式宣言書であり、ジョンソンの *Nova Britannia* 同様一種の宣伝めいた内容でもあり、ヴェラスコが読んだという記録はないが、ヴァージニア植民についてはあらゆる手を使って情報を集めていたヴェラスコからすれば、彼が宣言書の存在を知らなかったとは考えられない。ヴァージニア植民はもしそれが成功すれば英国にとっては国内の人口問題、生産物（毛織物）の販売、経済的自立を一気に解決へと導く格好の政策であった。しかもそのうえ会社が求めていた南洋航路（太平洋）の発見によるアジア（主に中国）との交易、そして何よりも植民出資者の最大関心事の金・銀が発見されれば、植民出資者への還元は莫大なものになり、さらに資金が植民へ投入され、多くの植民者をヴァージニアへ送りこむことが可能である。ヴァージニア植民が確固たる地位を築き、繁栄の道をたどれば、スペインの中南米における地位に対抗することができ、北米へのスペインの進出を阻止できる。ヴァージニア植民を強硬に推し進める英国の政策の背後にはこのような意図が見え隠れしていた。ところがヴェラスコはヴァージニア植民の目的である太平洋航路及び金銀についてはそれらが発見できなかったことを知っていた。たとえば1613年5月のフィリップ三世への報告のなかで、次のように言っている。

Thus they are here discouraged about this plan, on account of the heavy expenses they have incurred, and the disappointment, that there is no passage from there to the South Sea, as they had hoped, nor mines of gold or silve⁽²⁸⁾r .

あるいは同年7月の報告でも同様のことを言っている。

Thus this plantation has lost much ground, as it was sustained by companies of merchants, who were disappointed at finding no gold, nor silver mines, nor the passage to the South Sea, which they had hoped for ⁽²⁹⁾

ヴェラスコは英国のヴァージニア殖民の意図を見抜き、殖民が失敗に終わるであろうことを予想していたが、それでもヴァージニア殖民がスペインに及ぼす影響には大きな関心を寄せていた。それに英国はヴァージニアに見切りをつけて殖民の基盤をバミューダ島へ移す計画であるともヴェラスコは言っているのである。⁽³⁰⁾ 1612年の特許状でバミューダ島が殖民に付け加えられたが、バミューダは気候も温暖で様々な産物に富み、食料にも事欠かない。そのうえ西インド諸島から帰還するスペインの船を襲撃するのにも立地条件がよいと考えている。ヴェラスコが英国への宣戦布告をフィリップ三世へ進言しているのも十分に理解できる。全体としてヴェラスコのフィリップ三世への報告はヴァージニア殖民の即刻中止主張に終始しているが、ひとつ新事態がある。それはスペイン人三人がヴァージニアで英国側に捕らえられたことである。その一人にモリナ (Don Diego de Molina) がいた。彼がなぜヴァージニアへ行ったかは定かではないが、他の二人共にヴァージニアで捕らえられ、長期にわたって拘留された人物である。1613年5月、英国へ帰る人物に秘密の書簡を託し、それをヴェラスコが受け取ることになる。現地ヴァージニアからの生々しい書簡で、ヴァージニア殖民の現状がスペインの眼から詳細に描かれている。モリナは、英国のヴァージニア殖民をスペインの国益から見て、ヴァージニア殖民がスペインにとって大きな打撃を与えることになると言う。ヴァージニア殖民をヒュドラ (ヘラクレスにより殺害された9つの頭を持ったウミヘビ) にたとえ、殖民の初期の段階のうちに殖民の進展を終わらせるよう訴えている。殖民の意図は、陸海による西インドの破壊であり、しかもヴァージニアがヨーロッパ諸国の海賊の集合地になることができる。ヴァージニア殖民の増強がスペインにとっていかに脅威となるかをモリナは指摘する。ヴァージニアの産物で最も期待されている金銀については、多くあるが英国人はその価値がわからず、銅を高く評価しているという。南海 (太平洋) に関しては、新たな植民地の開拓を考え、太平洋の「主人」(master)になろうとしている。その手始めがバミューダ島であるという。豊かな資源のバミューダ島と異なり、ヴァージニアは気候も厳しく、殖民者も過酷な労働ととぼしい食料のために生き残る人は少ない。インディアンへ逃げる者も出るほど生活条件は厳しい。このような状態だから一隻でも船が来れば、誰も武器を持つ者はいない。殖民者の殖民への絶望感、殖民者の士気の低下から判断してヴァージニア奪回は容易であり、フィリップ三世の決心を待っているとさえモリナは言う。一スペイン人からの現地ヴァージニアの現状報告には、西インド諸島、北米で徐々にその地位を固めつつある英国に対する危機感が現れている。殖民が始まってから6年が経過していたが、スペイン人から見れば、英国の殖民の基盤は弱く、ヴァージニア奪回を強く主張するモリナにスペインの覇権維持の期待がこめられているようである。1613年9月フィリップ三世は上記のモリナの書簡を読んだ旨、ヴェラスコへ返書を書いている。そこでフィリップ三世は、「あの国⁽³¹⁾ (ヴァージニア) の事態について記されているすべてを私は知るところとなっている」と書いている。モリナの現地報告に満足げなフィリップ三世の様子がうかがわれるが、そ

れでも王は軍隊を派遣することはしない。スニガもヴァージニア植民の壊滅を助言していたが王は行動に移らなかったし、ヴェラスコの要請に対してもフィリップ三世は強硬な手段に訴えることはしない。スニガやヴェラスコの言うように、ヴァージニア植民が崩壊寸前の状況を呈しているならば、ヴァージニア攻撃は極めて簡単であったろう。しかしフィリップ三世は実行に移ろうとはしない。これはなぜであろうか。同じ疑問はスペインの無敵艦隊を破ったエリザベス女王がなぜ一気にスペインが征服している中南米を攻撃しなかったかについても言えることである。ジェームズ一世との講話条約への尊重からかそれとも現地からの報告に信憑性がないと思っていたのか推測の域を越えないが、いずれにせよヴァージニア植民は数々の困難な状況に直面しながらも放棄されることなく「イングランド国内の政治的組織が商業的、工業的性格を強めていった」⁽³²⁾ことからスペインの予想に反して以後も続けられ、アメリカ建国の礎を作ることになる。もしスペインがヴァージニアを奪回し、ヴァージニアをスペインの植民地としたら現在の北米はどのようなになっていたであろうか。アメリカ建設はいかなるものになっていたであろうか。

3. Galician Gondomar

ゴンドマールは、二度英国大使を勤めている。一回目はヴェラスコの後を継いだ1613年秋頃から1618年までと二回目は1620年から1622年までである。ゴンドマールは、三人の大使の中ではよく耳にする人物で、ジェームズ一世に大陸のプロテスタント諸国と手を切り、スペインと手を結ぶように説得したり、ジェームズ一世の息子のチャールズとスペイン王女の結婚を申し出たり、またローリの処刑を王に勧めたり、英国人の間では狡猾なスペイン人として映っていたらしく、当時の文献でもゴンドマールへの批判は強く、トマス・ミドルトンの *A Game at Chess* でもジェームズ一世の息子のチャールズとスペイン王女との結婚を画策する狡猾な人物として描かれていることはよく知られている。ゴンドマールの最初の大使期間の1613年から1616年までのフィリップ三世への報告からゴンドマールのヴァージニア植民への態度を見てみたい。⁽³³⁾

ゴンドマールのフィリップ三世への記録に残っている最初の報告は大使として赴任直後の1613年10月である。ゴンドマールはヴァージニアから帰国した人達からヴァージニアについての情報を聞き出し、ジェームズ川に5つの要塞(とりで)があることに触れているが、注目すべきは前任の二人の大使と同様、ヴァージニア植民の絶望的な状況を容赦なく報告していることである。3百人位の入植者がいるが大半が病気でひどい扱いを受けているとか食物にも事欠き、皆が英国に帰りたがっており、もし自由になったら帰国したであろうとも言っている。ヴァージニアには重要な産物はなく、ただ船の建材だけが豊富にあるだけで、巨額な資金を注ぎ込んできた割には結果がかんばしくない。ヴァージニア植民には将来はないことをゴンドマールは指摘する。

Thus weary of spending so much money without any hope of reaping a profit, because the soil produces nothing, they now think of carrying all the people that are there to Bermuda or to Ireland by the coming Spring.⁽³⁴⁾

ヴァージニアを放棄して、入植者をバミューダかアイルランドへ連れていく計画であると

言っているが、これは事実と反している。ゴンドマールがヴァージニア放棄の情報をどこから得たかははっきりしないが、ゴンドマールはスニガやヴェラスコのようにヴァージニアへの攻撃をフィリップ三世へ進言はしない。それほどまでしなくても劣悪な諸条件に入植者は音をあげ、植民地を放棄するであろうというのがゴンドマールの予想であった。同様の事を翌年1614年3月の報告でも触れ、ヴァージニア会社はジェームズ一世にヴァージニアから撤退の許可を申し込んでいる⁽³⁵⁾とも言っている。ゴンドマールのフィリップ三世への報告で特に眼を引くのは、バミューダ島の記述である。ヴェラスコもバミューダ島には言及していたが、ゴンドマールのバミューダ島記述には入植者の数、豊かな自然等があり、ヴァージニアとは違った描写にはやや驚きもする。バミューダ島が英国によって発見されたのは全くの偶然で、ヴァージニア向かう船が難破し、漂流したどりついたのがバミューダ島であった。ここで英気を養い、再度ヴァージニアへ向かい、撤退寸前に入植者を助けたのは有名なエピソードであるが、バミューダ島は風土も自然もヴァージニアとは比較にならないほどよかった。スペイン英国大使が、フィリップ三世はバミューダ植民を破壊し、バミューダ島から英国人を追い出そうとしているとジェームズ一世に報告している⁽³⁶⁾といっているのをゴンドマールは聞いたと言っているが、これはいかなる理由によるのか。西インド諸島へのスペインの権利への英国の侵害と思っていたのか。それとも英国以上にバミューダ島の重要性をスペインが理解したためであるのかははっきりしない。いずれにせよヴァージニアからバミューダ島へ英国は植民の拠点に移そうとしているというゴンドマールの指摘はこれまでにないものである。バミューダ島の描写とは異なりヴァージニアに対してはゴンドマールは酷評する。おなじ1614年10月の報告ではヴァージニアで捕まえられたモリナの言葉を引用して、入植者はフィリップ三世にヴァージニアを攻撃して、ヴァージニアから追い出してもらいたいと思っており、銃を発射することなく入植者は降伏する⁽³⁷⁾と言っている。入植者もヴァージニア植民に音をあげ、自ら撤退する気である。ヴァージニアの評判はよくなく、ヴァージニアへ行く人を見つけるのはむづかしく、死刑囚でもヴァージニアへ行くよりも絞首刑になったほうがよいと思っているほどである⁽³⁷⁾。ゴンドマールは、このようにヴァージニアの絶望的な状況をフィリップ三世へ報告し、ヴァージニア植民の自滅は時間の問題だと考えている。1610年に本国ロンドンではすでに見たように二つの「宣言書」が出版され、そこではヴァージニア植民の将来の希望に満ちた展望が記され、ゴンドマールがフィリップ三世へ送ったヴァージニア報告とは全く逆の姿が描かれていた。ヴァージニア植民の将来に暗雲がたちこめ始めつつあったなかでヴァージニア植民関係者は必死に植民のイメージ改善に奔走していた。ヴァージニアから帰国する船とともに現地から報告や書簡が届いたのであるが、会社は都合の悪い情報はできるだけ公表せず、一般の人達はヴァージニア植民の実体はそれほど詳細には知らされていなかったと思われる。一般人が知るヴァージニアは依然として「楽園」としてのヴァージニアであり、すべてが手に入るばら色の「新世界」であった。このように考えると、スペイン側はイギリス人よりヴァージニアの現状、実体をはるかに正しく正確に把握していたことになる。ゴンドマールのフィリップ三世への報告は他の二人と比べると数は少ない。1624年にヴァージニア会社は解散するが、それまでにも1622年のインディアンによる大虐殺のような事件があり、ヴァージニアはその都度植民の危機に直面するが、残念ながらこれらについてゴンドマールの報告を知ることはできない。

それでも王は軍隊を派遣することはしない。スニガもヴァージニア植民の壊滅を助言していたが王は行動に移らなかったし、ヴェラスコの要請に対してもフィリップ三世は強硬な手段に訴えることはしない。スニガやヴェラスコの言うように、ヴァージニア植民が崩壊寸前の状況を呈しているならば、ヴァージニア攻撃は極めて簡単であったろう。しかしフィリップ三世は実行に移ろうとはしない。これはなぜであろうか。同じ疑問はスペインの無敵艦隊を破ったエリザベス女王がなぜ一気呵成にスペインが征服している中南米を攻撃しなかったかについても言えることである。ジェームズ一世との講話条約への尊重からかそれとも現地からの報告に信憑性がないか推測の域を越えないが、いずれにせよヴァージニア植民は数々の困難な状況に直面しながらも放棄されることなく「イングランド国内の政治的組織が商業的、工業的性格を強めていった」⁽³²⁾ことからスペインの予想に反して以後も続けられ、アメリカ建国の礎を作ることになる。もしスペインがヴァージニアを奪回し、ヴァージニアをスペインの植民地としたら現在の北米はどのようになっていたであろうか。アメリカ建設はいかなるものになっていたであろうか。

3. Galician Gondomar

ゴンドマールは、二度英国大使を勤めている。一回目はヴェラスコの後を継いだ1613年秋頃から1618年までと二回目は1620年から1622年までである。ゴンドマールは、三人の大使の中ではよく耳にする人物で、ジェームズ一世に大陸のプロテスタント諸国と手を切り、スペインと手を結ぶように説得したり、ジェームズ一世の息子のチャールズとスペイン王女の結婚を申し出たり、またローリの処刑を王に勧めたり、英国人の間では狡猾なスペイン人として映っていたらしく、当時の文献でもゴンドマールへの批判は強く、トマス・ミドルトンの *A Game at Chess* でもジェームズ一世の息子のチャールズとスペイン王女との結婚を画策する狡猾な人物として描かれていることはよく知られている。ゴンドマールの最初の大使期間の1613年から1616年までのフィリップ三世への報告からゴンドマールのヴァージニア植民への態度を見てみたい。⁽³³⁾

ゴンドマールのフィリップ三世への記録に残っている最初の報告は大使として赴任直後の1613年10月である。ゴンドマールはヴァージニアから帰国した人達からヴァージニアについての情報を聞き出し、ジェームズ川に5つの要塞(とりで)があることに触れているが、注目すべきは前任の二人の大使と同様、ヴァージニア植民の絶望的な状況を容赦なく報告していることである。3百人位の入植者がいるが大半が病気でひどい扱いを受けているとか食物にも事欠き、皆が英国に帰りたがっており、もし自由になったら帰国したであろうとも言っている。ヴァージニアには重要な産物はなく、ただ船の建材だけが豊富にあるだけで、巨額な資金を注ぎ込んできた割には結果がかんばしくない。ヴァージニア植民には将来はないことをゴンドマールは指摘する。

Thus weary of spending so much money without any hope of reaping a profit, because the soil produces nothing, they now think of carrying all the people that are there to Bermuda or to Ireland by the coming Spring.⁽³⁴⁾

ヴァージニアを放棄して、入植者をバミューダかアイルランドへ連れていく計画であると

言っているが、これは事実に反している。ゴンドマールがヴァージニア放棄の情報をどこから得たかははっきりしないが、ゴンドマールはスニガやヴェラスコのようにヴァージニアへの攻撃をフィリップ三世へ進言はしない。それほどまでしなくても劣悪な諸条件に入植者は音をあげ、植民地を放棄するであろうというのがゴンドマールの予想であった。同様の事を翌年1614年3月の報告でも触れ、ヴァージニア会社はジェームズ一世にヴァージニアから撤退の許可を申し込んでいるとも言っている⁽³⁵⁾。ゴンドマールのフィリップ三世への報告で特に眼を引くのは、バミューダ島の記述である。ヴェラスコもバミューダ島には言及していたが、ゴンドマールのバミューダ島記述には入植者の数、豊かな自然等があり、ヴァージニアとは違った描写にはやや驚きもする。バミューダ島が英国によって発見されたのは全くの偶然で、ヴァージニア向かう船が難破し、漂流したどりついたのがバミューダ島であった。ここで英気を養い、再度ヴァージニアへ向かい、撤退寸前の入植者を助けたのは有名なエピソードであるが、バミューダ島は風土も自然もヴァージニアとは比較にならないほどよかった。スペイン英国大使が、フィリップ三世はバミューダ植民を破壊し、バミューダ島から英国人を追い出そうとしているとジェームズ一世に報告しているといっているのをゴンドマールは聞いたと言っているが、これはいかなる理由によるのか。西インド諸島へのスペインの権利への英国の侵害とと思っていたのか。それとも英国以上にバミューダ島の重要性をスペインが理解したためであるのかははっきりしない。いずれにせよヴァージニアからバミューダ島へ英国は植民の拠点を移そうとしているというゴンドマールの指摘はこれまでにないものである。バミューダ島の描写とは異なりヴァージニアに対してはゴンドマールは酷評する。おなじ1614年10月の報告ではヴァージニアで捕まえられたモリナの言葉を引用して、入植者はフィリップ三世にヴァージニアを攻撃して、ヴァージニアから追い出してもらいたいと思っており、銃を発射することなく入植者は降伏すると言っている⁽³⁶⁾。入植者もヴァージニア植民に音をあげ、自ら撤退する気である。ヴァージニアの評判はよくなく、ヴァージニアへ行く人を見つけるのはむづかしく、死刑囚でもヴァージニアへ行くよりも絞首刑になったほうがよいと思っているほどである⁽³⁷⁾。ゴンドマールは、このようにヴァージニアの絶望的な状況をフィリップ三世へ報告し、ヴァージニア植民の自滅は時間の問題だと考えている。1610年に本国ロンドンではすでに見たように二つの「宣言書」が出版され、そこではヴァージニア植民の将来の希望に満ちた展望が記され、ゴンドマールがフィリップ三世へ送ったヴァージニア報告とは全く逆の姿が描かれていた。ヴァージニア植民の将来に暗雲がたちこめ始めつつあったなかでヴァージニア植民関係者は必死に植民のイメージ改善に奔走していた。ヴァージニアから帰国する船とともに現地から報告や書簡が届いたのであるが、会社は都合の悪い情報はできるだけ公表せず、一般の人達はヴァージニア植民の実体はそれほど詳細には知らされていなかったと思われる。一般人が知るヴァージニアは依然として「楽園」としてのヴァージニアであり、すべてが手に入るばら色の「新世界」であった。このように考えると、スペイン側はイギリス人よりヴァージニアの現状、実体をはるかに正しく正確に把握していたことになる。ゴンドマールのフィリップ三世への報告は他の二人と比べると数は少ない。1624年にヴァージニア会社は解散するが、それまでも1622年のインディアンによる大虐殺のような事件があり、ヴァージニアはその都度植民の危機に直面するが、残念ながらこれらについてゴンドマールの報告を知ることはできない。

これまでヴァージニア植民の時期にイギリスに滞在したスペイン大使のフィリップ三世への報告をもとに、スペインがヴァージニア植民をいかにとらえていたかを見てきた。三人に共通して言えることはヴァージニア植民に対する否定的な見方である。中南米に君臨するスペインからすれば、いきなりイギリスが自国の支配領域で植民を始めたことは両国の友好関係に水を差すものであった。スペインとしては現地からの報告からイギリスはヴァージニア植民をあきらめ、ヴァージニアから撤退するであろうと楽観的に予想していた。しかし、植民はその予想に反し続けられ、それが今のアメリカ国家の基盤となった。ヴァージニア植民は前にも触れたように、特許状に記されている宗教的使命がその第一の目的ではなかった。その証拠に宗教関係者は初期にはほとんどいなかった。ヴァージニア植民は、17世紀初頭のイギリスの様々な問題を植民という形で解決し、イギリスの将来を左右する国家的事業であったと言える。であればこそ国中があれほどまでに植民の宣伝に走ったのである。説教家を使い、ヴァージニア植民擁護の説教をしてもらったのもこのような理由による。スペインはいつになったらヴァージニア植民が終わるかを今か今かと待ち望んでいたであろうが、スペインの思惑通りに事は進まなかった。案外、イギリスがヴァージニアから撤退したらスペインがヴァージニア植民を始めたかもしれないし、北米制圧の拠点としてヴァージニア植民の重要性を一番よく見抜いていたのはスペインであったかもしれない。

注

- (1) Philip L. Barbour ed.: *The Jamestown Voyages Under the First Charter 1606-1609*, 2 vols (Cambridge, 1969)
- (2) Alexander Brown ed.: *The Genesis of the United States*, 2 vols (Boston and New York, 1890)
- (3) Brown, vol.1, pp. 45-6.
- (4) Brown, vol.1, pp. 88-9.
- (5) Brown, vol.1, p.100.
- (6) 『イギリスの航海と植民 二』(岩波書店、1985), p. 185.
- (7) 同掲書、p. 166.
- (8) 同掲書、p. 168.
- (9) 同掲書、p. 172.
- (10) 同掲書、p. 179.
- (11) Brown, pp.120-3.
- (12) Brown, p. 120.
- (13) Brown, p. 261.
- (14) Brown, p. 263.
- (15) Robert Johnson: *Nova Britannia*, English Experience No.111 (Amsterdam, 1975), B.
- (16) Johnson, B.
- (17) Johnson, C2.
- (18) Johnson, C2.
- (19) Johnson, B2.

- (20) Johnson, C.
- (21) Johnson, C.
- (22) *A True and sincere declaration of the purpose and ends of the Plantation begun in Virginia..* (London, 1610), A3.
- (23) Ibid. A4.
- (24) Ibid. A4.
- (25) *True Declaration of the Estate of the Colonie in Virginia* (London, 1610), A3.
- (26) Brown, vol.1. p. 392.
- (27) Brown, vol.1. pp. 418-9.
- (28) Brown, vol.2. p. 634.
- (29) Brown, vol.2. p. 634.
- (30) Brown, vol.2. pp. 638-9.
- (31) Brown, vol.2. p. 658.
- (32) G.M.トレヴェリアン 大野真弓監訳『イギリス史 2』(みすず書房、1996), 111 頁。
- (33) なぜ1613年から1616までかと言えば、Brownの『アメリカの起源』にその間の資料しかないからである。
- (34) Brown, vol 2. p. 661.
- (35) Brown, vol 2. pp. 680-1.
- (36) Brown, vol 2. pp. 739.
- (37) Brown, vol 2. pp. 740.

IV 初期ヴァージニア植民とジェームズ一世

ヴァージニア会社は1606年4月ジェームズ一世の特許状を受け、正式に英国政府の認可を受けた事業としてアメリカ・ヴァージニアの植民に着手する。ジェームズ一世は植民のそもそもの初めから深く植民に関わっており、ジェームズ一世の意向がヴァージニア植民に反映されていると考えるのは当然のことである。ジェームズ一世とヴァージニア植民との関わりには二点考えられる。その一つは、ジェームズ一世のロンドンヴァージニア会社との関係である。ヴァージニア会社はジェームズ一世によって特許状を交付されており、ジェームズ一世が実際にはヴァージニア会社を運営・管理すべき性質の会社であった。当初はロンドンにヴァージニア会社を統括する王立参事会が、ヴァージニア植民地には現地参事会がそれぞれ置かれた。ヴァージニアの統治はロンドンの参事会が選んだ総督と現地の参事会の間で行われ、総督不在でヴァージニアが運営された。しかしながら第二次特許状ではこの非現実的な運営方法を改め、運営・管理は全面的に王から会社に移行され、徐々に植民関係者は独自に「民主的に」ヴァージニア植民の総裁を選び、本国から離脱していく。これが最終的には本国と同様な王政的な政府を望むジェームズ一世の怒りに触れ、1624年特許状を取り消されることになる。それが逆にヴァージニアにおける民主的運営に大きく寄与することとなり、最終的にはアメリカで最初の「共和政府」建設へと至る。ジェームズ一世側と反ジェームズ一世側とのヴァージニア植民運営をめぐる確執はすでに様々な人が扱っているが⁽¹⁾、ジェームズ一世のヴァージニア会社との関わりはジェームズ一世が予想していたようには進展しなかった。ジェームズ一世のヴァージニア植民との第一の関係は英国内にあったが、それ以上に深刻なジェームズ一世のヴァージニア植民との関わりは対外的な関係であり、しかもそれはイギリスの前に大きく立ちはだかる「大国」スペインとの関係であった。いわば国内外でジェームズ一世はヴァージニア植民をめぐる難題に直面していたのである。特にスペインとの関係はジェームズ一世王朝の存続に関わる抜き差しならぬやっかいな問題であった。大国スペインとの和平を望んでいたジェームズ一世にとってスペインの機嫌を損なうことなくいかにスペインとの友好関係を築き、維持しかつヴァージニア植民政策を続行するかはジェームズ一世にとっては至難の業であった。大国スペインの激怒に触れたらスペインは強大な軍事力を背景に一気にヴァージニアを攻撃し、ヴァージニアを奪取するかもしれない。イギリスのスペイン大使からはそのような緊迫した空気が刻々ジェームズ一世に送られてくる。しかしながら、ジェームズ一世は直接ヴァージニア植民に関して命令や指示を出し、積極的に植民を指導・管理する文章を残していない。我々がヴァージニア植民に関するジェームズ一世動向を知るのはスペイン駐在のイギリス大使、フランス駐在のイギリス大使及びスペインの駐英大使を通してである。特にスペイン駐英大使スニガ(Zuniga)はジェームズ一世と会見し、直接ヴァージニア植民に関して率直な意見交換を行っている。そのフィリップ三世への報告はジェームズ一世との生々しい会見報告となっており、ジェームズ一世のヴァージニア植民に関する「肉声」を知るうえで貴重な資料となっている。本研究では主としてこれらの資料からジェームズ一世がヴァージニア植民に関していかなる態度・見解を取っていたのかを明らかにし、初期ヴァージニア植民が直面していた問題点を明確にしたい。

1. コーンウォリス (Sir Charles Cornwallis) とスニガ (Don Pedro de Zuniga)

コーンウォリスは1605年から1609年までイギリスのスペイン大使を勤め、スニガは同じ時期1605年から1610年までイギリス大使をそれぞれ務めている。ジェームズ一世が最初の特許状を交付したのが1606年4月であるので両大使はヴァージニア植民の創世期にそれぞれ相手方の国に滞在し、自国の利害とのからみからヴァージニア植民と関わっていたことになる。コーンウォリスはマドリッドからジェームズ一世へスペインの動向を送っていたはずであるが残念ながらその書簡は多く残っていない。ただジェームズ一世の長男ヘンリーに関して、父ジェームズ一世の許可があればヘンリーはスペインと戦う気があると記しているだけである⁽²⁾。コーンウォリスのもう一つの現存する書簡はマドリッド赴任3年後にイギリスの国务大臣ソールズベリー (Salisbury) にあてた書簡である。ヴァージニア会社がジェームズ一世の特許状を得た2年後であるが、そこでコーンウォリスはスペインの西インド諸島評議会議長レモス (Lemos) 伯爵との会見の様子をソールズベリーに報告している⁽³⁾。それは主としてスペインが自国領土と主張する海域におけるイギリス人の拿捕に関する意見の交換である。自国の領海内の航行を禁ずるスペインと公海の航行自由を主張するイギリスとの見解の違いがコーンウォリスとレモス伯爵の間に見られる。スペインがイギリスのヴァージニア植民に反対した最大の理由はヴァージニアはスペイン領土であり、イギリスはスペイン領土を侵害しているというものであった。コーンウォリスは、イギリス人が西インド諸島航海中にスペイン側に捕らえられ、リスボンとセヴィリア拘留されていることに対し、スペイン側の「赦し」と「自由」を願うが、レモスは「寛大な措置」よりは「無慈悲」に気持ちが傾いている、と答えている。これに対しコーンウォリスは、そのような行動は他国に与える影響が大きく、西インド諸島への航海を禁止するよりもっと中庸な方法により西インド諸島における支配権と他の島々の所有を迫及するほうがよく、それがスペインに計り知れない権力を与えることになるとレモスを説得する。スペインの西インド諸島征服に際しての現地人への残虐な行為、財宝の徹底的搾取を指摘し、原住民の状態を危険な状態に陥れることになるとスペインのこれまでの西インド諸島における行動を批判する。スペインは西インド諸島海域における他国の航行を禁止するという強硬な政策を取ったが、各国に投げかける波紋は大きいとコーンウォリスは反論する。ジェームズ一世はもともと公海における航行の自由主義を主張する立場を取っていたが、コーンウォリスもジェームズ一世同様航行の自由政策を指示する立場を取る。公海の航行禁止は神の命令、自然と国際法に反する。神が作ったものを一国だけが独占するのは神の創造の意図に反するというのがコーンウォリスの主張である。これに対しレモスは、西インド諸島はスペインが最初に発見したからそれは当然スペインに属し、スペインが西インド諸島を自国だけに利用できるのは合法的であり、自然の法則、国際法に照らし合わせても問題はないとの見解を明らかにする。1606年の第一次特許状を得てからヴァージニア会社は入植者をヴァージニアへ送り込むが、ヴァージニアへの航海中にスペインによって船が拿捕されるという事態が生じ、それが互いへの批判・不満を生み出していた。コーンウォリスの書簡は初期のヴァージニア会社が直面していたスペインとの一つの問題点を明きらかにしている。スペインが強硬に西インド諸島海域の航行禁止を主張するのは単なる航行禁止ではなく、やはりイギリスによるヴァージニア植民阻止にそ

の目的があったと考えられる。スペインとしてはヴァージニアはもともと西インド諸島海域はスペイン領土の一部であり、イギリスがヴァージニア植民を企てる権利は本来存在しないという外交姿勢を持っていた。このスペインの主張は歴史的な根拠を欠く歴史の「ねつ造」であるが、スペインはローマ教皇を盾に北米の領土宣言を行う。なぜスペインがかくも強硬にイギリスのヴァージニア植民に異を唱えたか。一つにはヴァージニアが北米制圧の重要な拠点であるとの認識をスペインは示していた。スペインはフロリダに拠点を構えており、さらにはその拠点を北にまで広げたいという意欲を持っていたに違いない。ヴァージニアにはヨーロッパに輸出できる産物は何もなく、植民の初期においてはインディアンとの対立も植民を困難にしていた。スペインはヴァージニア植民には否定的な態度を示し、植民からの入植者の追い出し、その崩壊を予想しているが、かくも強硬な態度の背後には単なる領土権侵害だけがその理由ではなかった。もっと深い反対理由があったと思われる。植民初期におけるスペイン大使コーンウォリスからのジェームズ一世への書簡がなく、スペインのヴァージニア植民初期に対する態度を我々は知ることができないが、コーンウォリスのレモス伯爵との会見はスペインの領土権主張を中心にした両国の北米における覇権争いの一端を見せている点において興味深い会見となっている。

イギリス側からのスペイン政府の情報はこの時期はこの他にはなく、我々がこの間のイギリスとスペインの関係を知るのはいギリス大使スニガを通してである。スペインはイギリスのヴァージニア植民に対していかなる態度を取っていたかをスニガのフィリップ三世への書簡から明らかにしたい。

スニガのフィリップ三世への最初の書簡は1606年3月16日である。1606年と言えばジェームズ一世が最初のヴァージニア会社への特許状を交付した年で、それが4月10日であったから、スニガは約一ヶ月前にすでにジェームズ一世の特許状の情報を入手し、次のようにフィリップ三世に書き送っている。

They also propose to do another thing, which is to send 500 to 600 men, private individuals of this kingdom to people Virginia in the Indies, close to Florida. They sent to that country some small number of men years gone by, and having afterwards sent again, they found a part of them ⁽⁴⁾ alive.

スニガは、イギリスがヴァージニアへ送る入植者の数を把握し、すでに何人かを送っているとも言っている。更には、ヴァージニアからインディアンをロンドンに連れて来、英語を教えたり、ヴァージニア植民の指揮者の名前を挙げたり、入植者としてヴァージニアへ連れて行く者は泥棒とか反逆者であるとの正確な情報を得ている。

They brought 14 or 15 months ago about ten natives, that they might learn English, and they have kept some of them here [London] and others in the country, teaching and training them to say how good that country is for people to go there and inhabit it. The chief leader in this business is the Justiciario [Chief Justice, Sir John Popham], who is a very great Puritan and exceedingly desirous, whatever sedition may be spoken of, to say that he does it in order to drive out from here thieves and traitors to be drowned in the sea. I have not yet spoken to the king about this; I

shall do so whwn I see in what way they will try to satisfy me in the council. ⁽⁵⁾

1606年4月の第一特許状に関して、スニガは以下のように言っている。

...the King [James I] over here has given them permission and his Patents to establish their religion in that Country [Virginia], provided they rob no one, under the penalty, if they do not obey he will take them under his protection. ⁽⁶⁾

ジェームズ一世がヴァージニア会社に宗教の確立のため特許状を与えたとスニガは言っているが、ヴァージニア植民の第一の目的はキリスト教の布教であると特許状に記されていることを考えるとスニガの文言は正しい。スニガからのイギリスのヴァージニア植民着手の報告を受けたフィリップ三世はいかにしてイギリスの植民活動を阻止するかを真剣に考えている。

You [Zuniga] will report to me [Philip III] what the English are doing in the matter of Virginia--and if the plan progressess which they contemplated, of sending men there and ships--and thereupon, it will be taken into consideration here, what steps had best be taken to prevent it. ⁽⁷⁾

フィリップ三世はヴァージニア植民に対しては当初から強硬な態度を崩さず、以後のスニガへの指令でも植民の核心、植民の決定についての確かさ、進行状況、誰がいかなる手段によって援助しているのかを報告するよう指示している。そしてジェームズ一世の植民許可に対してフィリップ三世の「遺憾」の念をジェームズ一世に伝えるよう言っている。⁽⁸⁾
(p.103) フィリップ三世のヴァージニア植民への関心はこのほか高いが、植民の実験期ともいって初期の植民結果はかんばしくない。ヴァージニアから伝えれるニュースは本国にいるヴァージニア会社関係者を小躍りさせるようなものではなく、むしろ先行きを怪しまれる内容の報告が多い。そのような情報をスニガは入手し、フィリップ三世にヴァージニアで手に入る産物とは言えば、船のマスト用の木材、ピッチ、ロジンだけで、鉱物に関しても得られるのは "bronse" (brass?) だけであるという。⁽⁹⁾ フィリップ三世が喜ぶような貧弱な産物である。ところがヴァージニア会社関係者が送る現地からの報告にはヴァージニアは「パラダイス」「エデンの園」「カナン」といったバラ色の報告が続々と届いていたし、ヴァージニア会社も宣伝文書によって投機者、植民者の気持ちを煽るような文書を公表していたから、スペイン側としては内心複雑な気持ちであったに違いない。それらの公表された文書をスニガは当然目にしてから、ヴァージニアの現状を知って内心安堵のため息をつき、ほくそ笑むことになったであろう。ヴァージニア植民の失敗を願うスペインにとってヴァージニアの現状はまさに願ってもない現状であった。さらにヴァージニア植民推進者の一人である最高裁長官ポップムが死去したのでヴァージニア植民事業は終わるだろうとの予想をたてている。スニガはヴァージニア植民に対して植民はいずれは崩壊するであろうとの楽観的な立場を取っているが、その裏でヴァージニア襲撃をも王に進言し、イギリス側に対しては強硬な姿勢をも見せている。

スニガのフィリップ三世への書簡のなかで最も注目に値するのはジェームズ一世との会見報告である。スニガはヴァージニア植民についてジェームズ一世の真意をただそうとジェームズ一世に度々会見を申し込んでいたが、スニガによればジェームズ一世は会見を引き延ばしていた。スニガは1607年8月14日から20日の間にソールズベリーでの会見を申し込んでいる。このときはスニガが病気のため会見は実現しなかった。9月8日ジェームズ一世がウインザーにいたとき、再度スニガは会見を申し込んだが、指定された日時にスニガが行けず、会見は中止された。9月12日ジェームズ一世がハンプトンコートに来ることを知ったスニガ三回目の会見申し込みをする。このときもジェームズ一世は翌日の狩猟を口実に会見を断っている。ブラウンによれば⁽¹⁰⁾、ジェームズ一世は意図的にスニガとの面会をさげ、時間かせぎをしていた。ヴァージニア会社経営陣はその間ヴァージニアへ船を送る準備をしていており、スニガからの植民中止の要請を感じ取っていたからである。最終的にジェームズ一世との会見が実現したのは1607年9月27日であった。この年9月17日ジェームズ一世の娘のメアリーが2歳半で死んでいるのでジェームズ一世の気持ちはすぐれなかったと思われるが、スニガは単刀直入ヴァージニア植民についてジェームズ一世に質問をする。

Then I told him [James I] that Y.M. had ordered me to represent to him how contrary to good friendship and brotherly feeling it was, that his subjects should dare wish to colonize Virginia, when that was a part of the Spanish Indies, and that he must look upon this boldness as very obnoxious.⁽¹¹⁾

スニガの質問の要点は、(1) フィリップ三世はヴァージニア植民が両国の友好に反する行動であること、(2) イギリス人がヴァージニアの植民に取りかかっていること、(3) ヴァージニアはスペイン西インド諸島の一部であること、(4) フィリップ三世はヴァージニア植民の大胆な行動を不愉快なこととして見なさざるをえない、の4点であった。両国の平和条約とスペイン領土への侵害はこれまで取り上げられてきたスペイン側の反論であり、とりたてて目新しい反論ではない。しかしこれらに対するジェームズ一世の返答はイギリスのヴァージニア植民についての王自身の口からの言葉としては看過できない内容の返答となっている。スニガに対するジェームズ一世の返答から考えると、ジェームズ一世は全体的に「逃げ腰」で、ヴァージニア植民活動の責任を他人に転嫁している印象を与える。ジェームズ一世は以下のようにスニガに答えている。

He [James I] answered that he had not particularly known what was going on; that as to the navigation to Virginia he had never understood that Y.M. [Philip III] had any right to it; but that it was a very distant country [from] where Spaniards lived, and that in the Treaties of Peace with him and with France it was not stipulated that his subjects should not go there, except to the Indies, and that as Y.M.'s people had discovered new regions, so it seemed to him, that his own people might do likewise.⁽¹²⁾

スニガの質問に対してジェームズ一世はヴァージニア植民についての事態の推移について

は特に知っていなかった、といきなりヴァージニア植民を他人事のように切り出している。この会見の前年にヴァージニア会社に特許状を与えた一国の王としては余りにも無責任極まる発言である。スニガへの返答の最初からジェームズ一世の大国スペインを意識した及び腰の態度が窺われる。ジェームズ一世は、(1) フィリップ三世はヴァージニアへの権利を有していないこと、(2) 平和条約でも西インド諸島を除いてイギリス人がヴァージニアへ行くべきではないとの規定はないこと、最後に(3) 未知の土地の発見権はいかなる国にもある、とスニガの上記の質問に答えている。スニガは(2)に対してだけ、ヴァージニアも西インド諸島の一部と見なしているのでイギリス人が決して西インド諸島へ行くべきでないことは平和条約の条件である、と反論する。ジェームズ一世の責任転嫁的な態度が知れるのは次のスニガへの返答である。

The King said to me that those who went, did it at their own risk and that if they [the Englishmen] came upon them [the Spaniards] in those parts there would be no complaint should they be punished.⁽¹³⁾

ヴァージニアへ行く人達は自ら危険を犯して行っているのもあって、たとえ彼らがスペイン人よって捕まえられ、罰せられても何も不満はない、というのである。つまり、ヴァージニア入植者は王とは無関係であり、王はヴァージニア植民については全く責任はないという見解である。これはこれまでのヴァージニア会社及び植民の経緯を考えると極めて無責任な発言と受け止められる。ヴァージニア会社・植民関係者がこの王の発言を聞いたらいかなる反応を示したであろうか。ジェームズ一世のこの発言は真意なのかそれともスペインに対するリップサービスなのか。あるいはジェームズ一世はヴァージニア植民事業の限界をいち早く察しし、ヴァージニア植民を放棄しようと考えていたのか。ヴァージニア植民が単なる植民のための植民ではなく、イギリスの将来を見据えた一大国家的プロジェクトであり、イギリスの政治、社会、経済、宗教等様々な問題を抱えた事業であったことを考えれば、ジェームズ一世はおそらくこの事業を破棄することはできなかった。ジェームズ一世の植民及び植民者を突き放すような態度に王のいかなる態度を見てとったらいいか。ジェームズ一世のこのような発言にも関わらず、ヴァージニア会社は続々植民者をヴァージニアへ送り続けている。植民者は王とは無関係であり、彼らは勝手なことをしているのだという発言には王の責任のがれの態度が見られるといってもよい。スニガはイギリス人の処罰は両国の親密な同盟にとってはいいことだとジェームズ一世に同意する一方で、ヴァージニア植民が散々たる状態のなかで行われており、今では植民活動が海賊行為と化し、これは断じて許されるべきではないと強硬な姿勢を示す。これに対してジェームズ一世は以下のように答える。

He [James I] told me [Zuniga] in reply that he had never known Y.M.[Philip III] was interested in this, but since I assured him it was so, and that they might send pirates out from there, he would seek information about it all, and would give orders that satisfaction should be given to me by the Council, and that he was inclined to think as I did, having heard it said that the soil was very sterile and that those having been sadly deceived who had hoped to find there

great riches--that no advantage from it all came to him, and that if his subjects went where they ought not to go, and were punished for it, neither he nor they could complain.⁽¹⁴⁾

ここでもジェームズ一世は、フィリップ三世はヴァージニア植民に関心があるとは知らなかった、と信じられないようなことを言っている。この時期のスペイン大使コーンウォリスからのスペインからの情報はなく、コーンウォリスがヴァージニア植民についていかなる情報をスペインからジェームズ一世に送っていたかは知ることができないが、1604年にスペインと平和条約を結んでいることを考えれば、スペインが西インド諸島海域でのヴァージニア植民に無関心であったはずはなく、こういったスペインの動向はジェームズ一世の耳にも達していたであろう。しかしながら、ジェームズ一世は、他人事のようにフィリップ三世がヴァージニア植民に関心があるとは知らなかったと言っている。このあたりにもジェームズ一世のスペイン政府に対しての逃げ腰、及び腰の感が感じられないこともない。ジェームズ一世はスニガとの会見の中でスペイン側がヴァージニア植民について何を言うか内心気が気でなかったであろう。大国スペインだけとはにかく敵に回したくない。できれば友好関係を維持し、何とか大陸諸国の中で存在感を示したい。スペインの機嫌を損ねることなく、イギリスの直面する諸問題からの脱却を計りたいというのがジェームズ一世の真意であったろう。ジェームズ一世にとってスペインは国内外の問題を考えた場合最もごわい相手であった。ジェームズ一世のスニガとの会見はどちらと言えば威勢のいい若者が年寄りを詰問している印象を与え、そこからジェームズ一世はぬらりくらりと逃げようとしている感が強い。スペイン政府が後ろ盾しているのでスニガのジェームズ一世への問いつめも容赦がない。スニガのヴァージニア植民についての不満の一つはヴァージニア現地で期待していたほどの成果が上がらず、その結果入植者は暴徒化し、西インド諸島海域での海賊行為に走り、スペイン側も多大な被害を被っていることなのである。イギリス人が行くべくとこでないところに行き、処罰されても不満は言えないとスニガは主張する。横暴化する植民者に関してスニガは最善の改善策は植民事業を中止することだと単刀直入に言う。

I said in reply that the difficulties were such as must be considered and the best remedy was to prevent and cut it short from here, since it was publicly known, that two vessels had sailed from a port of this kindom for the Indies, and that two others were being laden here to go.⁽¹⁵⁾

ヴァージニアへ向かう船がすべて海賊化するとは限らないが、続々とイギリスを出航する船の情報を得たスニガはイギリス人は西インド諸島海域で海賊行為に従事するためにイギリスを出航しているとジェームズ一世に訴えている。これに対するジェームズ一世の返答はスニガに歩調を合わせるように、「彼らは手のつけられない連中で事態を是正したい」(The King told me that they were terrible people and that he desired to correct the matter.)と返答している⁽¹⁶⁾。スニガの主張を全面的に受け入れ、少しの反論もしないジェームズ一世に王のスペインへの気兼ねのような印象を受ける。スニガはこのあとイギリス人はスペイン領土では丁重な扱いを受けると言うが、ジェームズ一世はスニガに対してスニガの言うことは確かであると答えている。ジェームズ一世は何とかして相手の機嫌を損ねることはし

ないという態度があったようである。相手のいいなりになり、スニガにいい印象を与え、フィリップ三世からおしかりを受けまいとする「いい子」ぶった姿勢が見られる。ジェームズ一世がスニガに対して強硬な態度を見せればスニガも態度を硬化させ、フィリップ三世への報告も険悪な報告となることは間違いない。スペインとの友好関係は1624年3月イギリスがスペインに宣戦布告をすることで終わるが、平和条約締結直後はスペインに対するジェームズ一世のへりくだった態度が著しく目立つのである。会見の中頃でもスニガは、ヴァージニア植民に関しては改善策が必要で事態が悪化する前に手段を講ずる必要があると再度ジェームズ一世に揺さぶりをかける。会談の終わりでスニガはヴァージニア植民についての評議会の説明には時間がかかりそうであるが、その間にも入植者がヴァージニアへ送られ、防備が強化されており、早いうちにヴァージニアにいるわずかな入植者を根絶すべきだとの進言をフィリップ三世にしている。

I shall be careful to find out about what is going on, and I shall report to Y.M.; but I should consider it very desirable that an end should be now made of the few who are there, for that would be digging up the Root, so that it could put out no more. ⁽¹⁷⁾

スニガのジェームズ一世とののは終始スニガ主導で行われている。スニガのヴァージニア植民に対する見解は、要するに植民そのものがスペイン領土の侵害であるから即刻中止すべきであるというものである。中止しなければスペイン政府は植民地破壊という過激な行動に訴えるというのがジェームズ一世に対しての最終通告である。会見から明らかなことは「大国」と「小国」の違いである。ジェームズ一世の相手の言いなりになる様は一国の王として又絶対王権を信奉する王としてはその面影は少しも感じられない。これはジェームズ一世のスニガの面子をたてる巧妙な作戦であったのか。いずれにせよジェームズ一世のヴァージニア植民への態度がスニガとの会見から窺い知れるという点においてこの両者の会見は興味深いものとなっている。

スニガとの会見で見せたジェームズ一世の対応は本音ではなかった。会見から1週間後スニガはフィリップ三世に書簡を送っている。そのなかで国务大臣ソールズベリーがジェームズ一世とヴァージニア植民について討議した後、ジェームズ一世は「イギリス人が行ってはならない所に行くとするれば、彼らを罰せられるに任せばよい」とスニガへの返答と同じことを述べ、更にソールズベリーは、植民問題を注意深く調べるとイギリスはヴァージニアへ行くことはできないようだと思っていると報告している。しかしながらこのようなスペインに譲歩した態度を示す一方で、ソールズベリーはまた以下のようにも言う。

He [Salisbury] says, he does not wish to do what he has been asked to do, in preventing their going and commanding those who are out there to return, and the reason of this is, because that would be acknowledging that Your Majesty is Lord of all the Indies. ⁽¹⁸⁾

入植者の阻止、ヴァージニアからの帰国命令というスニガからの要請は行いたくないのはフィリップ三世を西インド諸島の統治者と認めたくないからだと強気な発言をもしている。ジェームズ一世はスニガの前では相手を気にしてかソールズベリーほどの強気な発言

はしなかったが、フィリップ三世を西インド諸島の統治者として認めたくないという見解は、スペインの西インド諸島での領土権の否定に至り、これまでのジェームズ一世の態度とは全く異なる態度で、ジェームズ一世王朝のスペインに対する複雑な立場を表している。

スニガのジェームズ一世との会見一ヶ月後、フィリップ三世はスニガに書簡を送り、「ヴァージニア問題におけるジェームズ一世との処理の結果に非常にうれしく思っている」⁽¹⁹⁾

とスニガのジェームズ一世への強硬な申し出に満足した様子を見せている。スニガは1610年4月（又は5月）まで駐英大使を勤めるが、その間イギリスはヴァージニア会社へ入植者を送り込む。それを聞くスニガは相変わらずフィリップ三世に対して何らかの手段を講じるべきだと再三フィリップ三世に要請する。スニガの主張はイギリスはヴァージニア植民を即刻中止すべきであり、中止をしない場合はヴァージニア攻撃もありうるというものであった。スペイン政府がヴァージニア襲撃を決意するのは翌1608年の夏以降で戦争委員会がフィリップ三世の認可を受け、ヴァージニア植民破壊のために船を見つけようとしていた。しかしながらスペイン側にも考慮しなければならない対外的な重要な問題があった。それはヴァージニアへ軍隊を派遣すると本国の防衛がおろそかになり、特にオランダとの険悪な関係上それは決してできないことだった。イギリスにとってスペインとオランダとの関係はヴァージニア植民延命の最大のメリットであったのである。スペインのヨーロッパ大陸における対外関係を知ってか知らずか、スニガ以後もいつこくフィリップ三世にヴァージニア植民に関しては決して妥協することのない厳しい態度を示すよう迫っている。フィリップ三世はスニガの強硬策にゴーサインは出さず、以後もイギリス側の植民の動向一植民者の数、兵力、海路一を報告するよう指示しているだけである。

スニガのヴァージニア植民に対する強政策と並行してジェームズ一世の長男ヘンリーとフィリップ三世の娘マリアとの結婚が画策されていた。フィリップ三世は娘の結婚を機にジェームズ一世をフランスやオランダから手を切らせ、スペインと手を組ませたかったが事はうまく進まなかった。フィリップ三世がヴァージニア植民襲撃の最終的な許可を与えなかったのは案外娘の結婚を利用してヴァージニアからのイギリスの撤退を目論んでいたのかもしれない。フィリップ三世は「臆病で、怠惰で、無能で、業務の方針を寵臣のレルマ公爵に任せた。」(timid, indolent, and incapable and abandoned the direction of affairs to his favorite, the Duke of Lerma.)⁽²⁰⁾とブラウンは記しているが、もともと政治には不向きな人物で、行動的な人ではなかったようである。だからこそ度々のスニガの強政策の訴えにも耳を貸そうとしなかったのである。スニガのジェームズ一世との会見から我々はヴァージニア植民が投げかけていた問題点を知ることができた。ジェームズ一世の弱気な煮え切らない態度に当時イギリスがいかにスペインを無視できないか、またスニガの強気なジェームズ一世への問いから、ヴァージニアが直面していた問題の数々が浮き彫りされる。スニガの強硬な態度と何とか会見を切り抜け、ヴァージニア植民を続行したいと願うジェームズ一世とのかけひきから17世紀初頭の植民地活動の一端が垣間見られる。

2. デイグビー (Digby) とヴェラスコ (Velasco)

デイグビーは、1611年4月から1616年1月までスペイン大使を勤め、大使を止めた後、ジェームズ一世の息子チャールズ (Charles) とスペイン王女マリア (Maria) との結婚をまとめるためスペインへ行き、その後1622年に再度チャールズとマリアの結婚を

進めるため大使としてスペインに行き、結婚話が破局に終わった後、1624年帰国している。ディグビーがスペイン大使となった1611年はジェームズ一世がヴァージニア会社に第一次特許状を与えてから5年が過ぎ、第二次特許状を与えてから2年が過ぎ、イギリスからのヴァージニア植民が本格化し、ヴァージニア会社も様々な困難に直面していた頃であった。コーンウォリスが大使を勤めていた時期がヴァージニア植民の創世期・実験期であるとすればディグビーの大使の時期は植民の発展期と言える時期である。ディグビーは大使としてスペインにいる間、スペイン政府のヴァージニア植民への動向をジェームズ一世にマドリッドから書簡で知らせ、スペイン政府がヴァージニア植民に対して不快の意を表明していることを明らかにしている。ディグビーは、フィリップ三世がヴァージニア植民を許可せず、スペイン軍がヴァージニア植民撤去を始めるであろうと何度かジェームズ一世に警戒心を喚起させている。フィリップ三世がイギリスのヴァージニア植民活動に不満を表している理由は二つあった。第一の理由は、スペイン生まれのローマ教皇アレクサンデル六世による西インド諸島全域のスペインへの寄進である。これについては、ハクルートが『西方植民論』で歴史的な根拠のない主張であると厳しく批判しているが、スペインは第一に教皇の寄進をもとにヴァージニアはスペイン領土であるとの見解を主張していた。これに対してディグビーは1613年の書簡で、スペインの国务大臣がヴァージニアとバーミューダ島はスペインの征服による、と言ったのに対し、「私は、ヴァージニアやバーミューダ島がカスティーユ征服の一部であるということには決して譲歩することはできず、イギリス人が最初の所有者であった。」(I could no way yield unto him that eyther Virginia or ye Bermudas were... parts of the Conquest of Castile, but that the⁽²¹⁾[y] [the English] themselves [were] the first Possidents.) と反論し、ヴァージニアとバーミューダ島はイギリス人が先有権をもっていると主張している。第二の理由は、1604年8月のスペインとイギリスとの間の平和条約締結である。この条約により、イギリスは西インド諸島を制圧しているスペイン領土への進出を断念せざるをえない状況に追いやられていた。これに対してはジェームズ一世は公海における自由航行を主張し、スペイン側と対立していた。スペイン大使ディグビーは、スペイン国内におけるヴァージニア植民への反対の空気をジェームズ一世に報告しているが、それはスペインの強硬な態度である。17世紀初頭においてはスペインは「大国」である。強力な軍事力を背景に中南米を制圧し、北米においてはフロリダまでその拠点を拡大しつつあった。それに反し、イギリスはヨーロッパの島国「小国」である。大国スペインを怒らせたら自国がどうなるかわからない。ジェームズ一世が1604年スペインと平和条約を結んだ背景には大国スペインとの友好関係を維持しながらあわよくば大陸への進出の足場を築きたいとの思惑があったはずである。ジェームズ一世は争いごとを好まず、自らは「平和の王」(the King of Peace)、the Peacemakerと呼ばれていたが、とにかく他国特に大国スペインとの衝突だけは避けたいとの気持ちは特に強かった。1618年ローリーを処刑したのはスペインに機嫌をとるためであったし、1622年、三十年戦争のさなか、娘のエリザベスと夫のパラティン伯がドイツで孤立したのに彼らに援軍を送らなかったのもとはと言えばカトリック教国スペインの激怒に触れないためであった。北米からのスペイン産タバコのイギリス輸入に当初は反対しなかったのもジェームズ一世のスペインへの配慮のためであったが、マドリッドからのディグビーの報告にジェームズ一世は内心戦戦恐恐としていたにちがいない。ディグビーはスペイン

のヴァージニア植民への動きをジェームズ一世に報告しているが、1612年8月の最初の書簡で、「ヴァージニアのイギリス植民に反対の目的で出航した3,4隻のガレオン⁽²²⁾船」に言及し、翌月9月の書簡ではフィリップ三世はイギリスのヴァージニア植民は許可しない、と次のように言っている。

It is here held for certayne that this King [Philip III] will not permit Our plantation at Virginia, and the Bermudas, in so much that it is here ⁽²³⁾publicly and avowedly spoken in the Court, that they will shortly attempt the removing of them.

スペイン領土であるヴァージニアのみならずバーミューダ島の植民化に反対するフィリップ三世及び両植民地からのイギリス人の撤去を画策するスペイン政府の動向である。ディグビーは Carlton なる人物にあてた書簡でもヴァージニア植民撤去のためにポルトガルに集結しているスペイン軍やセヴィリアからのスペイン人がヴァージニアのイギリス人を打倒したとの報告についても触れ、いかにスペイン政府がヴァージニア植民に反対しているかを述べている。スペインが今にもヴァージニア襲撃を企てているかのごとく緊迫した情報が流布されている一方で、スペイン駐英大使スニガの外交文書では、ヴァージニア植民は恐るるに足らず、植民はいずれは自滅する、とスニガの自信にあふれたフィリップ三世への報告をもディグビーはジェームズ一世に伝えている。スニガの外交文書についてディグビーは次のように述べている。

I got a view of his [Don Pedro de Cuneja] dispatch. The chiefe matters were...That there was no cause to apprehend so much danger in Virginia as they did Spaine, there being only as he [Zuniga] certaynly learned, five hundred men, who had of late suffered great extremitie and miserie, and that the first undertakers were growne so weary of supplying the charge, that they were faine to make a generall kynde of begging...by the way of a Lottery for the furnishing out of those shippes and men which were sent;⁽²⁴⁾

ヴァージニアにおける入植者の数、入植者の現地における過酷な試練、入植者をヴァージニアへ送る資金調達のための「宝くじ」の実施、スニガはヴァージニア植民についての的確な情報を入手し、それをフィリップ三世に報告している。スニガがいかなる経路からヴァージニア植民の実体について情報を得ていたか。現地からの最大の情報源はスペイン人のモリナ(Molina)なる人物である。彼はジェズイットで、宗教的目的からヴァージニアへ行ったと思われるが、彼の主なる任務は植民の実状を本国に伝えることにあった。二番目の情報源はをヴァージニアからスペインに連れて来たイギリス人入植者である。三番目はジェームズ一世宮廷に出入りするイギリス人のスパイである。スニガが巧みな情報網からいち早く重要な情報をキャッチしていたように、ディグビーもマドリッドでスパイを用い、スペイン側の動向をとらえている。ディグビーからのジェームズ一世への報告はスペイン軍がヴァージニア植民を解体させるために出航の準備をしているとの報告に終始している。1613年2月の書簡でディグビーはヴァージニアからイギリス人を追い払うためにリスボンに集結したスペイン艦隊に触れ、ヴァージニア植民がスペインにもたらす迷惑か

らフィリップ三世はヴァージニア植民を決して認可するとはないと述べた後で、スペイン軍がヴァージニアへ行くとするれば、それはキューバのハバナからであり、「二三人のふさわしい人物をスペイン海軍に送り込み、彼らがスペイン側の動向を伝える」と言っている。

Yf they [the Spanish] attempt anything against Verginia it will be the West Indian galleons from the Havana, in the island of Cuba, with the forces of those parts. I do meane presently to send downe a copule of fitt persons, whom I have provided to enter themselves into this King's service in his Navie, who I hope wilbe able to attaine in some part, to the knowledge of their intents, and to advertise me from time to time, of such things as they shalbe able to learne. ⁽²⁵⁾

この時期のディグビィのジェームズ一世への報告は終始一貫スペイン軍のヴァージニア襲撃であり、ジェームズ一世に対して危機感を煽る報告となっている。ディグビィと同時期、1610年から1616年までフランス大使を勤めた Sir Thomas Edmonds からのジェームズ一世への報告もディグビィと同様の内容の報告で、スペイン軍がヴァージニアへ行き、ヴァージニアからのイギリス人の排除を計画している、と再三警告を発していることを考えるとスペインのヴァージニア植民への強硬な態度はこの時期ヨーロッパでは周知の事実であったようである。例えば1613年4月、Edmonds はジェームズ一世へ以下の書簡を送っている。

I have againe understood that parte of the forces which are prepared in Spayne are certainly intended to remove our plantation in Virginia. ⁽²⁶⁾

この時期まではディグビィ、エドモンズ両大使はスペイン軍のヴァージニア襲撃が近いとの予想では一致しているが、5月になるとディグビィはジェームズ一世に対して、スペイン政府はヴァージニア植民の現状を正しく把握するまでは行動を起こさず、ヴァージニア植民の自滅を期待していると述べ、スペイン軍の早期のヴァージニア襲撃の可能性はないかもしれないと述べている。スペイン内にはヴァージニアの様子をしばらく見てから行動を起こす立場を取る一派とスニガのように一刻も早く軍隊を派遣し、ヴァージニアからの入植者の一掃を主張する急進派がいた。ヴァージニア現地のインデアンとの対立、病気、飢餓による入植者の死という厳しい入植状況を逐次入手していたスニガからすればヴァージニア攻撃の絶好の機会であった。しかしながらスペインはついに実際の行動を起こすことはせず、ヴァージニア植民の崩壊を傍観するにとどまる。それはなぜか。スペインが、ヴァージニア植民はいずれ自滅すると考えていた理由はその資金である。王や国家からの資金の調達によってではなく「宝くじ」によって植民事業が維持されており、いずれは資金も底をつくとの見通しによるものであった。しかしながらバーミューダ島はヴァージニア以上に繁栄し、産物がバーミューダから持ち込まれ、高く売れている。その様をスニガは見えており、即刻処罰を加える必要があると王に忠告する。ディグビィは同様の内容を他にも送っており、スペインが植民の実体を見極めるまで行動を控えているとの報告をしている。このようにスニガはイギリスのヴァージニア及びバーミューダ島における植民活動

について詳細かつ正確な情報を入手し、それをフィリップ三世に送っているのである。スニガが英国のヴァージニア植民に関する情報を得ていたのと同様スペイン大使ディグビィもマドリッドにおけるスペイン政府の動向をいち早く入手し、ジェームズ一世に送っている。スペイン側の対応は静観と行動の二つである。植民事業が自滅するのを待つ静観派とスニガを筆頭とする即座の襲撃によるヴァージニアからのイギリス人撤去である。ディグビィのスペインからの報告はもっぱら後者の急進派によるヴァージニア襲撃であり、彼はジェームズ一世以外の他のイギリス人への書簡でも同様の内容を送っている。1613年5月、枢密員となる Lake なる人物にスペイン政府のヴァージニア植民への対応を知らせ、スペインはヴァージニア植民について数回協議をもち、彼らの結論はヴァージニア植民は即刻撤去されねばならないが、植民の現状を把握するまで襲撃の実行を中止するのがふさわしい、ヴァージニア植民が自滅するのを期待しているからだ、というものであった。

...itt [the Plantation in Virginia] must bee remooved but they thinke itt fitt to suspende the execution of itt 'till they receave perfect information in what state itt nowe is, for that they are in hope that itt will fall of itself. ⁽²⁷⁾

スニガは、1610年まで駐英スペイン大使を勤めるが、1613年新大使ゴンドマールがスペインを発った直後ジェームズ一世に対して新大使がイギリスに向かったこと、ヴァージニア植民はスペインにとって恐るるに足らないが最善の結論が得られるようにヴァージニア植民についての実状を得ること、ジェームズ一世とイギリス国民が植民についていかなる意図をもっているのか、あわせてバーミューダ島についても情報を送るようフィリップ三世はゴンドマールに指示している様子をディグビィはジェームズ一世に報告している。

...though yt was conceived by ye King of Spayne that the plantation and fortifications of the Englishe in Virginia neede not (in the case yt now standeth) give muche cause of feare, yet to the ende, that heere may bee taken ye fittest resolutions, hee [Philip III] commaundethe him [Gondomar] to procure a true and certaine information of the present estate thereof. And what the intent of your Majestie and Englishe is in this pointe. And whether businesses of that nature growe not much colder since the deathe of the late Prince. And likewise, that hee informe himselfe very particularly concerning the Bermudos, and give speedy advertisement. ⁽²⁸⁾

スペインにとってヴァージニア植民は両国の友好関係をないがしろにする容認しがたい暴挙であった。スペインはヴァージニア植民はいずれは自滅すると楽観的な態度を示している一方で、ヴァージニアから遠くないバーミューダ島でイギリスが着々と植民に従事する様子を聞き、内心ではバーミューダ島を基地にして北米の本格的な植民を始めるのではないかとの疑心があった。バーミューダ島からイギリスを追い出せばイギリスの植民熱は冷えると思ったのか、スペインはバーミューダ島に並々ならぬ興味・関心を示す。温暖な気候、動物、植物がイギリス人をバーミューダ島に引き留めていた大きな理由であるが、それにもましてスペインが恐れたのはバーミューダ島を拠点にしたイギリスの北米植民の本

格化であった。スペイン側のヴァージニア及びバーミューダ島への関心をディグビイはジェームズ一世へ詳細に報告している。

ゴンドマールが駐英大使となってもスペイン側のヴァージニア植民への態度は変わらない。ディグビイは、スペインがヴァージニアからのイギリス人の排除を試み、また植民事業は自滅する、と報告を受けているとジェームズ一世へ書簡を送っている。そしてバーミューダ島植民の打倒についても会議をもっていたことも伝えている。

...I know that they [the Spanish] would have attempted the removing of the English from virginia, but that they are certeynly informed; the Business will fall of itself. And withinb these two daies I know both the Councell of Warr and of State, have satt about the over throwing of our new plantation in the Bermudas;⁽²⁹⁾

ヴァージニアで捕らえられたスペイン人モリナがヴァージニアからスペイン本国及び駐英大使へ密かにヴァージニア植民の実状を伝える書簡を送っていることはすでに言及したが、ゴンドマールがモリナからの書簡を受け取ったことをディグビイは知っていた。ゴンドマールがモリナから書簡を受け取り、そこには植民者の窮状が書かれており、スペイン評議会はヴァージニア植民は自滅するからそれについては語ることは止めた、と言っている。

The Spanish Ambassador in England hath received Letters from Molina the Spaniard that is there, of the misery and distress in which they live; So that it is determined by this Councell, not to speake any more in that Busines, being a thing (they suppose) which will die of itself;⁽³⁰⁾

評議会が語るに値しないほどヴァージニア植民は絶望的な状況にあるとの認識をスペイン政府は示している。スペイン政府は、ヴァージニアにおける植民の現状から植民自体の絶望的な将来を予想し、政府が懸念するほどの脅威をヴァージニア植民はスペインには及ぼすことはないとの楽観的な姿勢を見せ、高見の見物をしている。ヴァージニア植民の将来の展望は開けない程の現地の惨状がスペイン政府には届いていたのである。スペインのヴァージニア植民への否定的な見方はヴェラスコの後任の駐英スペイン大使ゴンドマールのフィリップ三世への書簡によって裏付けされている。ゴンドマールはヴァージニア植民の現状をフィリップ三世に植民者の数、病人の続出、食物の不足、イギリスへ帰国を望む植民者について以下のように記している。

there are about three hundred men there more or less; and the majority sick and badly treated, because they have nothing to eat but bread of maize, with fish; nor do they drink anything but water--all of which is contrary to the nature of the English--on which account they all wish to return and would have done so if they had been at liberty.⁽³¹⁾

ヴァージニアからの産物は造船のための豊富な木材にとどまり、入植者が期待する金・銀は産出されない。植民資金についても触れ、ロンドン商人と宝くじによって資金は調達さ

れているが、植民からの利益には希望が持てず、ヴァージニア会社は入植者のバーミューダ島かアイルランドへの集団移動を考えていると言う。

But weary of spending so much money without any hope of reaping a profit, because the soil produces nothing, they now think of carrying all the people that are there to Bermuda or to Ireland by the coming Spring.⁽³²⁾

入植者のバーミューダ島やアイルランドへの移動はゴンドマールを欺くため、植民はあきらめられるとの印象を与えるためであったとブラウンは言っている⁽³³⁾が、不毛な土壌から利益の上がる産物は何も見つけられず、入植者が期待していたほど成果はあがらなかつたというのはそれほどの外れな指摘ではない。イギリスもスペインも互いに情報収集にあたり、互いの動向を詳細に調べ、それぞれ本国に送っている。どちらと言えどスペイン側の情報網がイギリスの情報網より進んでいた印象を与えるが、裏を返せばスペインがイギリスのヴァージニア植民について並々ならぬ関心を寄せていたかの現れでもある。面子丸つぶれのような行動をイギリスはヴァージニアで行っていると大国スペインは苦々しく思っていたに違いない。ディグビーがマドリッドからスペインの動きをジェームズ一世に逐次伝えているが、そもそものイギリスによるヴァージニア植民へのスペインの最も大きな反対の理由の一つはヴァージニアを含めた一帯がスペイン領土であるにもかかわらず、イギリスがいわば領土侵犯を犯しているとの強硬な主張であった。これについてはすでに言及したが、ディグビーは「スペイン領土ヴァージニア」についても反論し、ヴァージニアが Castile の征服や教皇による寄進により歴史的にはスペインの領土であるとのスペインの主張には正当性を欠くものであるとの認識を示している。

I told him [the Spanish Secretary of State], that first I conceaved hee had byne misinformed, that the Spaniards had divers yeares used to these parts now spoken of; which had byne of late discovered & the Spaniards were never there untill the last Summer, when an Englishman lead them thither...Secondlie, I could no way yeeld unto him that eyther Virginia or ye Bermudos were...parts of the conquest of Castile...⁽³⁴⁾

教皇の寄進によるこの主張に対しては次のように言う。

And that for the Pope's donation it was grown to be so lightly esteemed, that it was almost left to be alleadged by them [the Spaniards].⁽³⁵⁾

アレクサンデル六世によるヴァージニアのスペインへの寄進は、スペイン人によって主張されるままにされているほど軽々しく見なされ、他国からは問題にされていないことを示唆している。ディグビーは教皇の寄進を全く論外であるとみなし、それはスペイン側の一方的な宣言であるとの態度を示している。

ディグビーのジェームズ一世への書簡はこれで終わっている。ジェームズ一世への最後の報告がスペインのヴァージニアへの領土権否定で終わっているのは両国のそもそもの衝

突の発端がヴァージニアの帰属権にあったことを考えると当然過ぎる反論であった。ディグビーの教皇寄進否定はこれまでのイギリスの反論の常套であり、格別新しい反論ではないが、ジェームズ一世に対して再度教皇寄進の否定によるヴァージニア植民のイギリスの正当化を訴えているのである。

ディグビーがスペインのヴァージニア領土権への反論を試みた頃に、スペインの領土所有の範囲を明確にし、航行の自由を訴える文書がイギリス政府内で書かれている。国の公式文書であるゆえ結論は明白であるが、いかにして政府がスペインのヴァージニア領土権を否定し、航行の自由を主張しているかは興味のあるところである。この文書での以下のように述べられ、ヴァージニアはイギリスに帰属するとの立場を明確にしている。

So that besides all those huge coasts & mighty inlandes lying southward of the Tropique of Cancer, which hitherto are quite free from any Spanish government; all those large & spacious countries on the East parts of America from 32 to 72. degrees of northerly latitude, have not nor never had any one Spanish Colonie planted in them; but are both by right of first discovery performed by Sebastian Cabota at the cost of King Henry the 7th & also of later actual possession taken in the behalfe & under the sovereign authority of her Majesty, by the several deputies of Sir Walter Raleigh, & by the two English colonies thither deducted (wherof the later is yet ther remaining) as likewise by Sir Humphry Gilbert, Sir Martin Frobisher, Mr John Davis, & others, most justly & inseparably belonging to the King of England. ⁽³⁶⁾

北回帰線南下の地域はスペイン政府の干渉を受けない一帯であり、北緯32度から72度にスペインの植民地が建設されたことはなく、イギリス人によって最初に発見されたからイギリスに所属する、というのである。1606年の第一次特許状によってヴァージニア植民の範囲は北緯34度から45度に限定されていたのも以上の理由による。

次にこの公式文書は、イギリスが西インド諸島へ航行できるか否かの問題を扱い、既に言及したように航行の自由を主張している。反論はアレクサンデル六世による寄進の否定から始まるが、その一つに航海、交易権を挙げている。

All princes & estates had & have by the laws of nations the right of navigation in the sea, & the right of traffique, which the Pope by the fulnes of his authority cannot take from them; & the words of the said Bull are express that the Pope did not intende to take from any Christian Prince such right as he had obtained. ⁽³⁷⁾

国際法により航行、交易権があり、教皇といえどもこれらの権利を奪うことは出来ない。更にアレクサンデル六世の教書後フィリップ三世の祖先がイギリス王と協議し、両国は互いの王国・領土で自由に交易が出来ると同意しているから西インド諸島でもイギリス人は自由に交易ができると言う。航行・交易権は自然法、国際法によりすべての国に共通であるので教皇は他国に禁じるのは合法的ではない。

Seeing therefore, that the Sea & trade are common by the lawe of nature and of nations, it was

not lawfull for the Pope, nor, is it lawfull for the Spaniard to prohibite other nations from the communicatio & participatio of this lawe.⁽³⁸⁾

国際法によって守られているものを禁止することがあれば、すべての人は自らを守ることができ、また暴力には暴力によって抵抗できる。スペインのヴァージニア植民への反対意見に対してこの公式文書では過去の歴史的経緯及び法的観点から反論し、ヴァージニア植民の合法性を主張している。

この時期スニガのあとを継いだイギリス大使はヴェラスコである。彼は1610年4月(又は5月)から1613年までイギリス大使を勤め、その間スニガ同様ロンドンからフィリップ三世へヴァージニア植民についての情報を送っている。ヴェラスコの3年の赴任の間のフィリップ三世への書簡の内容は前任者のスニガと大きな違いはない。ヴァージニア現地の植民者の状況、イギリスからの入植者の出航、ヴァージニアからの入植者の追いつき、これらが繰り返してフィリップ三世へ報告される。赴任直後のフィリップ三世への書簡でヴェラスコは、ヴァージニアでのインディアンとの対立、貧弱な食糧不足から人肉や家畜を食べざるをえなくなった状況から、人々の植民の熱意も冷えていると言っている。

Thus it looks as if the zeal for this enterprise was cooling off, and it would on that account be very easy to make an end of it altogether by sending out a few ships to finish what might be left in that place, which is so important for pirates...⁽³⁹⁾

入植者の熱意も冷えつつある今こそヴァージニア襲撃の絶好の機会であると言うのである。ヴェラスコはヴァージニアにおけるインディアンとの対立と食料不足及び期待した金銀が産出されないからヴァージニア植民はたやすく壊滅すると楽観的な態度を示す。しかしその一方でヴェラスコはイギリスから出航する植民船には懸念を表明している。1610年12月31日の書簡で次のように言っている。

They go with orders to fortify themselves once more and to build ships, on account of the great facilities offered in those countries, where they find an abundance of good oak-timber and pitch. Thus being so near to the 'Habana' [Havana], if they succeed with this, if they sail from there, they can reach it in 6 days, having fair weather; and this would be a very serious inconvenience for Y.M.'s fleets in case Y.M. determine to go to war.⁽⁴⁰⁾

ヴェラスコはヴァージニア植民の崩壊を予想しながら、他方続々と入植者がイギリスを離れる様子を見、植民の目的は他にもあるとの不安を示す。それはイギリスがヴァージニアを拠点としてスペイン植民地のフロリダにまで南下し、更にはそこから西インド諸島を始め、スペインの植民地を攻撃するかもしれないという不安である。イギリスがヴァージニアをスペイン植民地襲撃の拠点とするかもしれないという心配はこれまで示されたことがなかった。しかし、ヴァージニアには造船に必要な木材が豊富にあり、いくらでも船は造れる。とすればイギリスは一気に南下し、スペイン植民地の攻撃を計画する恐れがある。だから、ヴァージニア植民が困難をきたしている間にヴァージニアを攻撃し、イギリス人

をヴァージニアから撤退させるのが得策であるとヴェラスコはフィリップ三世に進言するのである。スペイン側からしてヴァージニア植民の真の目的は依然として謎のままであった。ヴェラスコは赴任直後からヴァージニア植民は崩壊するとの予想をたてている一方で、その予想を裏切る形でヴァージニア会社が多くの植民者をヴァージニアへ送り込む状況を目にし、植民の真相に関しては頭を悩ませていたのである。フィリップ三世からも植民の理由を探せとの命令を受けており、ヴェラスコは植民の実体把握に奔走していた。赴任1年後のフィリップ三世への書簡のなかでヴェラスコはイギリス人の海軍将官 William Monson からヴァージニアについての詳細な情報を得ている。そのなかでモンソンはヴァージニアには金鉱は発見されず、防備も弱いためにインディアンによって滅ぼされると述べ、植民を維持することはできないと言っている。モンソンの情報のなかで重要なのは植民の目的についてである。彼は植民の目的について次のように言う。

Their principal reason for colonizing these parts is to give an outlet to so many idle and wretched people as they have in England, and thus to prevent the dangers that may be feared from them.
(41)

イギリスの人口急増に伴い、無職者や乞食をヴァージニアへ送る計画は確かにヴァージニア植民の理由のひとつであったが、スペイン側はそれについては知っていなかった。ヴェラスコは、イギリスの社会的な問題解決の一方法として植民の理由の一つを知るに至るが、これはスニガやヴェラスコの予想外のことであった。モンソンはもうひとつ重要な点を暴露している。それはヴァージニアから「南海」（太平洋）へは行けないということである。イギリスはアジアとくに中国との通商に期待を抱いており、太平洋への通路の開拓にあたってきたが、アメリカ大陸を横断しての太平洋への到達は不可能であることが判明していた。ヴェラスコはモンソンからヴァージニアについての現状を知り、また植民の目的に関しても従来の情報とは異なる情報を得ており、ヴェラスコとしてはヴァージニア植民についての認識を新たにしたに違いない。ヴェラスコはロンドン離任前の最後のフィリップ三世への書簡で、ヴァージニア植民について彼が知り得た情報を以下のように集約して王に送っている。

From there [Bermudas] it was to sail from [sic] Virginia, but now for more than nine months no news of it have been received, and according to the last reports it is believed that the people must have perished, partly from disease, to which the country is subject and partly from starvation, with which they were threatened, as the Indians kept them so closely besieged, that they could not come out from the fort to search for provisions. Thus this plantation has lost much ground, as it was sustained by companies of merchants, who were disappointed at finding no gold, nor silver mines, nor the passage to the South sea, which they had hoped for. They now fix their eyes upon the colony in Bermuda, partly because of its fertility and being unoccupied (by savages) so that they will meet with no opposition. When as it seems to them that in the course of time there must be a rupture with Y.M., they will be able from this island, which lies right in the way of ships returning from the Indies, to take many prizes, especially as there is but one safe

harbor in the island, if they have time to fortify that, as they mean to do with great earnestness.

(42)

植民地における病気、飢餓、インディアンとの対立、金銀、太平洋航路の未発見、による植民熱の低下、ヴァージニアからバーミューダ島植民への政策転換、バーミューダ島からのスペイン船略奪の可能性、これらはヴァージニア会社が植民を始めた頃からスペインが入手していた情報であったが、ヴェラスコはヴァージニア植民が抱えていた問題点を的確にフィリップ三世へ報告している。ヴェラスコは1613年まで駐英大使を務めるが、3年間の大使勤務中イギリス国内外にスパイ網を張り巡らし、イギリスの動きを察していた。ヴェラスコ、そしてヴェラスコ以上にフィリップ三世はヴァージニア植民の動向に並々ならぬ関心を寄せ、ジェームズ一世を牽制していた。実際イギリスにはスペインがヴァージニアを襲撃するとの情報が流れ、一時緊迫した関係が続いた。スペインとしてはヴァージニア植民は植民地内外の悪化しつつあった諸条件のためにいずれは自滅すると楽観的な見解を取っていた。ヴァージニアは一時放棄される一歩手前まで追いやられたが、放棄されることなく植民が続行され、以後北米の拠点としての確固たる地位を築く。これはスペインにとっては大きな誤算であった。

ヴェラスコの後任のゴンドマールは1613年から1618年、2年間の病気治療のための帰国を経て再度1620年から1622年まで駐英大使を務める。スペイン大使としては最も悪名高い人物であり、ジェームズ一世を意のままに操ったと言われているが、彼も赴任直後からヴァージニア植民についての情報をフィリップ三世に送っている。

注

- (1) Wesley F. Cravan: *Dissolution of the Virginia Company* (Gloucester, Mass. 1964) を参照。
- (2) Alexander Brown: *The Genesis of the United States* (Boston and New York, 1890) 2nd vol., p.1025.
- (3) Sir Ralph Winwood: *Memorials of affairs of state in the reigns of Q. Elizabeth and K. James I* ed. by E. Sawyer (London, 1972), pp. 386-8.
- (4) Brown, pp. 45-6.
- (5) Brown, p. 46.
- (6) Brown, p. 88.
- (7) Brown, p. 91.
- (8) Brown, p. 103.
- (9) Brown, p. 110.
- (10) Brown, p. 118.
- (11) Brown, p. 120.
- (12) Brown, p. 120.
- (13) Brown, p. 120.
- (14) Brown, p. 121.
- (15) Brown, p. 121.

- (16) Brown, p. 121.
- (17) Brown, p. 122.
- (18) Brown, pp. 123-4.
- (19) Brown, p. 125.
- (20) Brown, p. 967.
- (21) Brown, p. 668.
- (22) Brown, p. 577.
- (23) Brown, p. 579.
- (24) Brown, p. 594.
- (25) Brown, p. 607.
- (26) Brown, p. 623.
- (27) Brown, p. 635.
- (28) Brown, p. 636.
- (29) Brown, p. 656.
- (30) Brown, p. 657.
- (31) Brown, p. 660.
- (32) Brown, p. 661.
- (33) Brown, p. 661 note 2.
- (34) Brown, p. 635.
- (35) Brown, p. 669.
- (36) Brown, p. 672.
- (37) Brown, p. 673.
- (38) Brown, p. 674.
- (39) Brown, p. 392.
- (40) Brown, p. 443.
- (41) Brown, p. 456.
- (42) Brown, pp. 638-9.

V ヴァージニア会社擁護の説教方法—聖書の適応—について

1 ジョン・ダンのヴァージニア会社擁護説教

1622年11月13日、ダン(John Donne)はロンドン・ヴァージニア会社(Virginia Company)の要請を受け、説教を行った。ヴァージニア会社は本来アメリカ・ヴァージニアの植民を目的として作られた会社であるが、ジェームズ一世(James I)に特許状を与えられて以来、1624年に解散するまで当時の著名な説教家に会社を擁護する説教をしてもらっている。1622年11月13日、ダンは会社の要請を受け入れ、それまでの慣行に従い会社を擁護する説教を行った。ダンの数多くの説教の中でも特に良く知られているこの説教はいわゆる "promotional literature" の一環を成すものであるが、我々はこの説教からダンの説教方法、当時会社が抱え込んでいた諸問題、及び一ナショナリストとしてのダンの一面を知ることになる。ダンは聖書を援用しながら使徒的使命を植民者に課す一方で、会社の商業的活動をもまた論じ、英国の植民地政策を擁護するが、特にダンの説教方法である聖書の「適応」について本章で論じていきたい。

ダンが説教するにあたり取り上げた説教の一節はイエスが弟子達への約束と命令を記した以下の「使徒行伝」1章8節である。

「あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレムばかりでなく、ユダヤとサマリアの全土で、また、地の果てに至るまで、わたしの証人となる。」⁽¹⁾

(But yee shall receive power, after that the Holy Ghost is come upon you, and yee shall be witnesses unto me both in Jerusalem, and in all Judea, and in Samaria, and unto the uttermost part of the earth.)

ダンは、この一節をヴァージニア植民に適応し、ヴァージニア会社関係者及び一般の植民に関心を寄せている人達の不安や懸念を払拭しようとする。

ヴァージニア会社という商業的性格の強い株式会社に投資家や植民者が何を期待していたかを察することはそれ程困難ではない。彼らは何よりも望み期待していたのは言うまでもなく「利益」であった。ヴァージニア会社はその植民地政策により「利益」を第一の目的としていたことは会社設立当初から明確であり、投資家たちも自らの投資の還元を期待していたのであり、植民者も「地上の楽園」ヴァージニアでの物質的成功を夢見ていた。ところがダンが行った説教は「利益」という会社の第一の目的を二次的に考え、会社にとっては「利益」ではなく、「福音伝道」がその主なる目的であることを強調する。そのためダンがとった方法は使徒行伝の一節のヴァージニア会社への適応である。この適応によれば植民者は「(使徒達と) 同じ舞台の役者」⁽²⁾ となり、使徒達にとってこの世の果てが福音伝道の間であつたと同様、植民者にとってもこの世の果て、ヴァージニアが彼らの舞台となる。そして「使徒達の行い」を演じ、「暗やみの中に座っている異邦人に光となり、海を越えてキリストの名を運ぶ」⁽³⁾ ことが彼らの第一の任務となる。ダンが説教を行った年の3月にヴァージニアでインディアンによる植民者大虐殺事件⁽⁴⁾があり、英国内では反インディアン感情が高まりつつあったが、ダンは無暗に反インディアン感情を煽ることはしない。逆に、ダンは「使徒」としての使命をヴァージニア植民者に課し、彼らに「使徒達の行いを演ぜよ」と述べ、植民者の行動の規範を使徒達に求めるのである。

このようにダンには使徒行伝 1 章 8 節を巧みにヴァージニア植民者会社に適応し、植民者の使徒的使命を明確にするが、更に、その前の 7 節をも同様に適応し、会社の宗教的使命を強調する。1 章 7 節でイエスの昇天の際に弟子達が「主よ、イスラエルのために国を復興なさるのはこの時なのですか」と聞くが、それに答えてイエスは「時期や場所は父が御自分の権威によつて定めておられるのであって、あなたがたの知る限りではない」と述べる。その後には冒頭の一節が続く。ここではイスラエルの復興という世俗的な王国の建設をイエスに要求する弟子はヴァージニアでの経済的な繁栄、物質的な利益を期する植民者となってくることは言うまでもない。現世的な王国をせがむ弟子達とそれに答えるイエスとの関係をダンには次のように述べる。

...something the Apostles had required, which might not bee had; not that; And it is an inclusive word; something Christ was pleasd to affoord to the Apostles, which they thought not of; not that, not that which you beat upon, But, but yet, something else, something better then that, you shall have. ⁽⁵⁾ (Vol. IV. p.266)

"something the Apostles had required" とはイスラエル王国の復興をさすが、イエスはそれを使徒達に約束しなかった。ヴァージニア植民者にとっては、使徒たちと同様に「福音伝道」こそ第一に考えるべきことであって、物質的な繁栄は考えるべきことではない。イエスの弟子達にとってこの世の王国ではなく、神の国建設がその最終目標であったと同様、ヴァージニア会社植民者も現世的王国、物質的繁栄をヴァージニアで求めるべきではない。異境における神の国の建設及び異教徒のキリスト教への改宗こそをその第一の任務としなければならない。ダンには次のように言う。

let not the riches and commodities of this World, be in your contemplation in your adventures, Or, because they aske more, Wilt thou now restore that? not yet; If I will give you riches, and commodities of this world, yet if I doe it not at first, if I doe it not yet, be not you discouraged; you shall not have that that is not Gods first intention; and though that be in Gods intention, to give it you hereafter, you shall not have it yet; (Vol.IV. p. 266)

ここでダンには「現世の富とか利益を投機に際しては考えるな」と言う。なぜかといえば現世の富とか、利益は神の最初の意図にはないからである。ダンからすれば植民者は使徒的な使命と任務とをたづさえてヴァージニアへ行くのである。ダンには会社の宗教的性格を意図的に浮かび上がらせ、投資家や植民者が切望していた物質的利益には触れないようにしている。そして、利益や世俗的王国に未だ関心を抱いている人には早く心を入れ替えるように勧める。更には、「即座の利益」、「急に裕福になる方法」、「ヴァージニアからの多量のすべての望ましい産物」を自己本位に考える人は言わば自己充足者であり、誰をも必要としない人である。そのような人は現世的な王にも等しい人であり、正しい道にはない。ではどのような人がよいか言えば、ラッパ、ナイフ、手斧と同じ程ヴァージニア原住民の間で素晴らしい製品となる教理問答を現地に持っていくことの出来る人、又、ヴァージニアからの船が英国に帰る際に何人のインディアンがキリスト教徒に改宗したかを船がどん

な木材、薬種、染料を持ち帰ったかと同じ程考えている人なのである⁽⁶⁾。つまり物質的な利益だけでなく異教徒の改宗をも同時に考えている人は正しい人なのである。そして自由な生活や富は聖書で除外されている地上の王国の特徴であり、キリストの弟子達はそのような王国を求めるべきではなかった。だからヴァージニア植民者も自由や豊かさに代表される「地上の王国」をヴァージニアに求めるべきではないと結論づける⁽⁷⁾。

このようにダンは聖書をヴァージニア植民に適応しながら投機目的の聴衆に対して植民の使徒的使命を明確にし、「使徒」としての使命をヴァージニアに果たすことを聴衆に訴える。株資家や植民者の目的は使徒同様福音の伝道と異教徒の改宗であるべきで、利益がその目的となつてはいけない。なぜならそれは聖書に先例が見られないからである。しかしながら、ヴァージニア会に対して「利益」を捨て、「福音」にのみ専念せよと説くことは商業的性格の強い会社の実状を考えると余りにも理想的すぎる。しかし、人々の最大の関心事である「利益」抜きの説教では会社がダンに説教の依頼をした意味がない。一見したところダンの説教は非常に宗教的色彩の濃い伝道説教に見えるが、よく見てみるとそこでダンが極めて巧妙に「利益」の問題を扱い、しかもそれを聴衆に確約しているのがわかる。ヴァージニア会社から依頼された当時の著名な説教家が直面したのはいかんにして会社の商業的性格を宗教的性格にまで高めるかであった。ダンがそれを聖書の適応によって巧みにヴァージニア植民の本来の目的を変えようとした。

使徒行伝の1章7節で弟子達がイスラエル王国の復興をイエスに願ったのに対し、イエスは神の国がいつ実現されるのかを神に問うことは出来ないと言う。それは神のみが知るところであつて、我々の知るところではないからである。それに触れてタンは次のように言う。

Whatsoever therefore Christ intended to his Apostles heere, hee would not give it presently, *non adhuc*, hee would not binde himselfe to a certaine time, Non est vestrum nosse tempora, It belongs not to us to know Gods times. (Vol. IV. p.270)

ここで *non adhuc* という言葉がダンの論理展開上極めて重要な語句となることに注目したい。なぜなら神はすぐにはイスラエル王国の復興を約束はしないが、それは「まだなのである」からである。これは裏を返せばいずれは神はイスラエル王国の復興を実現してくれることを意味する。ただ神の約束が実現されるまでは時間がかかるだけなのである。神の約束がいつか時間に要するかを示すためにダンが聖書から様々な例を引いてくる。そして、たとえ失敗、困難、障害等様々な悪条件が重なって会社が危機に接しても神は幾度も援助の手を差し伸べてくれる。丁度、ノアの大洪水後にも依然として、神は人類に暖かい目を注いでくれたように、即座にヴァージニア植民から何も利益がないとか同僚が帰国しないとかインディアンによる大虐殺があつたからと言っても決して失望することはない、動物は大きければ大きいほど長く母の胎内にいるものだ、と性急な結果を望む人たちに辛抱強い忍耐をダンが説く。神がゆっくりと時間をかけてイスラエル王国を地上に築き上げたようにヴァージニア会社も (いつかはわからないが) いずれは報われる時がくる。今はただキリストの教えを広めることに専念せよ、そうすれば結果はいずれ自ずと明らかになる。ダンはこのように聴衆に熱弁をふるう。

しかしながらヴァージニア会社の株主となった聴衆の関心が「現在」の即座の利益の還元にあることには変わらない。確かにヴァージニア植民を取り巻く現状は厳しい状況にあるが、ヴァージニア植民は現に多くのことに役立っており、植民計画を断念する必要はない。死刑囚、軽犯罪者にとってヴァージニアは再生の場を提供しており、又、植民計画により水夫が職を得、雇用の機会が増加し、国内の失業問題解消に貢献している。更には販売可能な産物が英国に送られてき、今や英国はカトリック教側の羨望の的となっているほどである。国内外の様々な社会的、経済的、宗教的諸問題をヴァージニア植民は解決してくれ、しかも宗教上の大敵カトリック教側をも一步リードした形で植民は進んでいる。ダンは説教家というより一人の愛国者の立場に立ち、ヴァージニア植民を全面的に支持する。これは又、ダンのジェームズ一世への忠誠、支持の表明でもある。このようにダンは決して「利益」を否定はしない。それはやがては手に入るのだから何も心配する必要はない。それでは今すぐに手に入るものはないのであろうか。聴衆が一番聞きたいのはまさにそれであろう。ダンによれば使徒達はこの世の王国を手に入れることは出来なかったが、確実に手に入れたものがあった。

All that you would have by this Plantation, you shall not have; GOD bindes not himselfe to measures; All that you shall have, you have not yet; GOD bindes not himselfe to times, but something you shall have; nay, you have already, some great things; and of those that in the Text is, The Holy Ghost shall come upon you. (Vol. IV. p.273)

確実に手に入るものとは何かというと聖霊がやってきて、良心が改められ、「力」を得ることである。この「力」は必ずや手に入る。なぜかと言えばイエスは弟子達に向かって、聖霊が下るとき彼らは「力」を受けると「使徒行伝」で言っているからである。ではどうすれば聖霊はやってくるのか。「福音」を広めたいという衝動を自らのなかに見出しさえすればよいのである。

whether the example and precedent of other good men, or a probable imagination of future profit or a willingnes to concurre to the vexation of the Enemie, what collaterall respect soever drew thee in, if now thou art in, thou art in, thy principall respect be the glory of God, that occasion, whatsoever it was, was vehiculum Spiritus Sancti, that was the Petard, that broke open thy Iron gate, that was the Chariot, by which he entred into thee,... (Vol. IV. p. 273)

神の栄光を主なる関心事とすれば聖霊は人を選ばず、誰にでもやってくる。聖霊などという霊的な存在に対して果たしてそれが各人にやってくるのかは利益目的の聴衆にはなほだ疑わしいところであるが、ダンは聖書を援用し、まず神の栄光を考えれば聖霊はやってくると断言し、聴衆を安心させる。そして「聖霊」と「利益」との関係について次のように述べる。

...and now hee is fallen upon thee, if thou do not Depose (lay aside all consideration of profit for ever, never to looke for returne) No not Sepose, (leave opout the consideration of profit for a

time) (for that and Religion may well consist together) but thou doe but Post-pose the consideration of temporall gaine, and study first the advancement of the Gospell of Christ Iesus, the Holy Ghost is fallen upon you, for by that, you receive power, sayes the Text. (Vol.IV. pp.273-4)

ダンが決して「利益」を禁じているのかと言うとそうではない。ヴァージニア会社の目的は「利益」ではなく「福音伝道」だとダンと言うが、ダンは巧妙に「利益」と「宗教」を両立させて認めているのである。ダンのこのようなロジックは上の商業活動と宗教活動が矛盾することなく両立しうると言明するときにも見られる。そこではっきりと「利益」をあきらめることなくただ「福音伝道」を先に考えれば自ずとあとから聖霊はやってくると言っている。とにかく誰にでも可能なことであるが、「福音伝道」を最初に考えさえすればよいのであり、そうすることによって聖霊という神の援助が訪れ、「力」が手に入るのである。現世王国、利益は直ちには手に入らないが、福音を広めることによって「力」だけは確実に手に入る。この「力」こそが現世王国、物質的繁栄よりもはるかに価値のあるものとなってくる。そして聖霊によってヴァージニア会社の第一の目的は利益や世俗的な栄光ではなく、神の栄光へと魂を向けさせることだと良心は言うことができるのである。このように聖霊によって良心が改められ、「力」を得るが、一体それは何をする「力」なのか。それはキリストの証人となる「力」なのである⁽⁹⁾。ダンが「使徒行伝」を引用しつつ聴衆に最も強く訴えたかったのは実はこの「キリストの証人」となることに他ならない。なぜなら使徒の使命は「福音伝道」であり、キリストの証人となることであるからである。ヴァージニアへ行く者にとって聖霊にまさる援護はない。この聖霊によりいかに生命の危険、困難、障害があろうとも植民者は神の僕となり、神の教えを広めるとに専念するのである。ダンによれば「不名誉 (Infamy)」は、法が人間に与える最高の罪であり、それは死後も残る。そして証人能力喪失は不名誉の最も深い傷の一つであり、最悪の証人能力喪失はいかなる人の証人であると信じられもせず、認められることも出来ないことである。又、口先だけのキリスト教徒も証人能力喪失者であり⁽¹⁰⁾、この論理に従えば聴衆は否応無しにキリストの証人とならざるをえず、「福音伝道」を実践しなくてはならなくなってくる。ダンにとっては現世における究極目的はキリストの「証人」となることであり、キリストの証人となって初めて物質的な繁栄も生じてくる。

我々はこれまでダンの説教を通してダンがいかにして聴衆の最大の関心事である「利益」の問題を扱っているかを見、更に、ダンは「福音伝道」を強調する一方で、又、「利益」という問題を巧みに処理していることも見た。ダンが説教を行った 1622 年はインディアン襲撃事件、会社の財政危機、会社内部での対立抗争等様々な悪条件が重なり、会社そのものが重大な危機に接していた年であり、会社は人々の関心をいかにヴァージニア植民へ向けるかの難局に直面していた。とりわけ、ヴァージニア会社への出資者を獲得するか否かは会社にとって文字通り死活問題であり、会社は宝くじで運営資金を集め、植民者を募っていた。ヴァージニアでの経済的繁栄、成功は人々にとって植民に加わるべきか否かの重大な問題であつたが、ダンのこの問題の扱いから我々はダンが「利益」や物質的繁栄を完全に否定しているのではないことを知った。むしろ巧みな論理でダンはそれを聴衆に保証しているのである。とにかくキリストの証人になり、「福音伝道」に専念すれば「利益」

は自ずから生じてくるのである。ダンは、ヴァージニア会社が直面した様々な問題、困難を聖書の一節を植民事業に適応し、聖書によってそれらの問題点を解決しようとしたのである。聖書に記述されていることと同じ事を行うのがヴァージニア植民者のである。

2 ダン以前のヴァージニア植民擁護の説教

ダンがヴァージニア植民擁護の説教を行ったのは1622年11月であったが、ダン以前にもダンと同じ手法を用いてヴァージニア植民擁護の説教を行った説教家達がいた。彼らの説教を扱うことにより、いかに聖書の適応が当時一般化していたかが理解できる。以下ダン以前のヴァージニア植民擁護の説教の手法とテーマに検討を加えたい。ダンが彼らの説教の手法を踏襲したのか否かは定かでないが、ダンの説教のテーマと同じ手法がこれらの説教に見出されることは注目に値する。ダン以前の説教でも手法としてはヴァージニア植民への聖書の適応による植民擁護である。以下各説教における聖書の適応を考察したい。

1609年に集中したいずれの説教のなかでもヴァージニア会社のキリスト教的使命がまず第一に強調されている。それらの説教の共通のテーマは新大陸における英国プロテスタンティズムの普及、反スペイン、植民地化の合法性、この世の楽園としての豊饒なヴァージニアであるが、William Crashaw、William Symonds、Robert Gray、George Benson、Daniel Price、Alexander Whitaker、Patrick Copland等ヴァージニア植民を擁護する説教家達はすべてが会社のヴァージニア植民における宗教的使命をその第一の目的としてあげ、聖書を援護してヴァージニア植民を支持し、人々に植民活動に加わるよう説得している。

William Crashaw

William. Crashaw はカトリック教詩人 Richard Crashaw の父で、ピューリタンである。そのピューリタンが1609年2月21日ジェームズ一世下のヴァージニア植民を擁護する説教を行った。Crashaw が説教に挙げた聖書の一節は「ルカ伝」からの「しかし、わたし（イエス）はあなた（ペテロ）のために、信仰がなくならないように祈った。だから、あなたは立ち直ったら、兄弟たちを力づけてやりなさい。」(But I have praied for thee, that thy faith faile not: therefore when thou art conuerted strengthen thy brethren.)である。Crashaw は説教でこの一節を取り上げ、ヴァージニア植民を最も雄弁に、最も強硬に擁護・推進した。彼の説教はヴァージニア会社の植民事業を擁護した点においては1622年のJohn Donneの説教に匹敵するものであるが、最初にヴァージニア植民の宗教的使命を明確に述べる。

... the principal ends of thereof [i.e. the Virginia plantation] being the plantation of a Church of English Christians there, and consequently the conversion of the heathen from the diuel to God:
(C3)⁽¹¹⁾

更には次のようにも言う。

If the planting of an English Colonie, in a good and fruitfull soile, and of an English Church in a heathen country, if the conversion of the Heathen, if the propogating of the Gospell, and

inlarging of the Kingdome of Jesus Christ, be not inducements strong enough to bring them into this businesse, it is pitie they be in at all. (G2)

Crashaw は、英国植民地の建設、 界教徒の改宗、福音の普及、イエス・キリストの王国の拡大がヴァージニア植民参加への誘因とならなければヴァージニア植民へ参加することは遺憾なことだと言い、ヴァージニア植民の宗教的性格を強く訴えている。それでは Crashaw の聖書の適応はどうか。彼は上記「ルカ伝」の一節を二つに分け、前半は "Christ's mercy" を後半は "Peter's duty" を表していると解釈する。つまり前半はキリストの僕の魂へのキリストの愛の宣言であり、後半はキリストの愛を味わった人の義務、即ち人が「立ち直った」とときには、人は他人の「立ち直り」に励まなければならないと言っているのである。Crashaw の解釈はキリストの前面的な受け入れである。「ルカ伝」の一節の前半ではキリストの慈悲を論じているが、我々はキリストから (1) purgative (2) restorative (3) preservative、の三つの "physicke" を受ける。最後の "preservative physicke" により、我々は恩寵と神の寵愛のなかにいられる。そしてそれはキリストの力強いとりなしから受ける "sweet and comfortable Preservatives" を語っている。ルカの一節は以下の事を言っていると Crashaw は解釈する。ペテロが "great professor" で "protester" であることは認めるが、敵サタンがいかに強力であるかペテロは知らない。ペテロを贖ったキリストはペテロへの愛を止めない。キリストのとりなしにより、ペテロを支え、養い、キリストの選民の「快適なお手本」とする。Crashaw の「ルカ伝」解釈のまとめは以下の通りである。

Thou therefore in remembrance of what I haue done for thee, when thou feelest the sweetness of this my mercy to thy selfe, teach others by thy examples, and endeavour seriously the conversion and confirmation of thy brethren. (A2 r)

つまりキリストがペテロに対して行ったことを他人にも行えというのである。神の恩寵のない状態から恩寵に満ちた状態への改宗はキリスト教徒にとっては最大の「事件」である。この「改宗」を Crashaw はヴァージニア植民者に求める。Crashaw は、最初キリストの慈悲、次にペテロの義務を説くことによって、聴衆にヴァージニアで同じ事を行うよう訴える。キリストはペテロに祈ったようにキリスト教に改宗するすべての人にもキリストは祈ってくれる。そしてキリストは祈ることにより絶えず我々の側にいるのである。

...then doubtlesse it cannot but minister strong consolation to a distressed soule and terrified conscience to remember that they have a Saviour more mighty in his mercy, then the divill can be in his malice, and more willing to save then the divill can be to destroy. (A3)

キリストとサタンとの対立はピューリタンの大きな特徴であるが、Crashaw はサタンを排し、キリストへの全面的な依存を力説することを忘れない。救世主の愛情と摂理はいつも「あわれな人」を救助にくる。以上のような解釈はヴァージニア植民者にとっては揺るぎのない自信と勇気を与えることになる。なぜならヴァージニア植民者は神の言葉を伝えに行くのであり、心の改宗を終えており、しかもキリストが絶えず味方として背後にいるか

らである。キリストを味方にすればヴァージニア植民が失敗することはない。

And to make application: It may yeeld us much satisfaction who are ingaged in this present action [the Virginia Plantation], to consider that though satan seeke to make us desist, and because he cannot, therefore will hurt us, by all his power...yet we haue Christ Iesus on our side, whose kingdome we are to inlarge: whose love to his children is such, that even then when satan sifts them most narrowly, he with his praises is most neere them for their assistance: And therefore we doubt not, but that seeing satan is now so busie to sift us by all discouragements, and by slanders, false reports, backwardnesse of some, basenesse of others, by raising obiections and deuising doubts, endeavours to dant us, and so to betray the businesse that God himselfe hath put into our hands: (A4)

この引用文での "application" に注意したい。Crashaw は「ルカ伝」をヴァージニア植民に適応しているのである。「ルカ伝」においてペテロへのキリストの祈りがあったように、ヴァージニア植民においてもサタンがいかに植民を妨害しようともキリストの祈りがある。しかし真の適応は「ルカ伝」のヴァージニア植民への適応である。だから「ルカ伝」のキリストとペテロの関係及び祈りの対応がヴァージニア植民に見出されなければならない。それを示唆する文章は以下の文章である。

...I hold every man bound to assist, either with his *Countenance, Power, and Authority* (as doe our gracious Soueraigne and noble Prince) ... (D)

これを見るとキリスト→ペテロがジェームズ一世→ヴァージニア植民者となることがわかる。「援助」「力」「権威」はキリスト教徒が「立ち直った」結果として身に付くものであるが、それらは又、ジェームズ一世がヴァージニア植民者に与えることのできるものである。このように考えると「ルカ伝」でのキリストとペテロの関係が対型としてジェームズ一世とヴァージニア植民者に見出されていることが理解できる。Crashaw はこのように「ルカ伝」をヴァージニア植民に適応するが、彼はこれ以上にも聖書の他の箇所にもヴァージニア植民と似た事態を探そうとする。例えば、ヴァージニア植民を躊躇させていたことの一つに植民事業が合法的か否かの問題があった。これに対して Crashaw は、キリスト教徒は異教徒には何も不正は働かないと言って、「創世記」23 章のアブラハムの妻サラの死に際しての異境の地における埋葬を取り上げ、アブラハムの異境の土地における紳士然とした行動を引き合いに出す。あるいはヴァージニア植民は原住民のインディアンから言わせれば彼らの土地への侵入であるが、ヴァージニア入植は彼らの土地を奪うためではなく、彼らに霊的なものを与えるためであると言って、「コリントの信徒への手紙一」9 章 11 節を援用する。また、ヴァージニアへの航海に際しての海の波や雨については「エレミア」や「詩編」を引用し、海も風もサタンの手にあるのではなく、すべて主の意のままであるから、何ら恐れることはないと言う。ヴァージニア植民者が最も懸念した植民者の数の少なさについては、多くの偉業はすべて少ない数から始まったと言い、エジプトにおけるイスラエル人の数の少なさを「申命記」や「出エジプト記」から引用する。あるいはダビデの

王国は400人から始まったと言って、「サミュエル記」を引用する。Crashaw は、ヴァージニア植民を聖書から援護した後で次のように「旧約」イスラエル人をヴァージニア植民者に適応する。

Now how fitly this storie resembles the present businesse [the Virginia Plantation] we have in hand, I leave it to others to make application of the particulars. I onely say thus much:

The Israelites had a *commandement* from God to dwell in *Cannan*, we have *leave* to dwell in *Virginia*: they were *commanded* to *kill* the heathen, we are *forbidden* to *kill* them, but are *commanded* to *conuert* them: they were *mighty* people, our are *ordinaries*: they *arned*, ours *naked*: they had *walled* towns, ours haue scarce *houels* to couer them: that land flowed with *milke* and *honie*, our abounds with as *good* or *better*: they sent men to search *that*, so we do search *this*:... (F3)

ここでCrashawは「旧約」のイスラエル人をヴァージニア植民者に適応し、両者に対応関係を見出している。これはタイポロジー的に言えば、「旧約」のイスラエル人がジェームズ一世時代のヴァージニア植民者の予型となっている。このようにCrashawは最初「ルカ伝」をヴァージニア植民に適応したが、更にヴァージニア植民が直面した様々な問題を解決する方法として他の聖書をも利用していることが理解できる。しかしCrashawのヴァージニア植民者励行の根幹を成すのは「旧約」のイスラエル人の歴史であって、その歴史を反復しているのがヴァージニア植民者であるという認識であった。

William Symonds

Symondsは1609年4月25日White Chapelで多くの名士、冒険者、植民者の前に説教を行った。それは現に入植しまた入植予定の人達のためにそしてキリスト教の目的促進のために出版された説教である。Symondsが説教のために選んだ聖書からの一節は以下の「創世記」12章1-3節である。

主はアブラムに言われた。「あなたは生まれ故郷父の家を離れてわたしの示す地に行きなさい。わたしはあなたを大いなる国民にしあなたを祝福し、あなたの名をたかめる。祝福の源となるように。あなたを祝福する人をわたしは祝福し、あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべてあなたによって祝福に入る。」(For the Lord had said unto Abram, Get thee out of thy Countrey, and from thy kindred, and from thy fathers house, unto the land that I will shew thee. And I will make of thee a great nation, and will blesse thee, and make thy name great, and thou shalt be a blessing. I will blesse them also that blesse thee, and curse them that curse thee, and in thee shall all the families of the earth be blessed.)

Symondsはこの一節をヴァージニア植民者に適応する。神に召されて故国を離れたAbrahamと同様、ヴァージニア植民者はイギリスを離れ、ヴァージニアへ向かう。主がAbrahamに「大いなる国民」「祝福」「大いなる名前」を約束したように、ヴァージニア植民者も「大いなる国民」「祝福」「大いなる名前」を神から約束される。イギリス人はキリストを聞いたことのない民族に福音を携えていくように神が召される。

Neither can there be any doubt, but that the Lord that called *Abraham* into another country, doeth also by the same hand, call you [the planters] to goe and carry the Gospell to a Nation that never heard of Christ ⁽¹²⁾ (p.9)

そして神に召されることは地を満たすことでもある。ヴァージニア植民者もヴァージニアをキリスト教信者で満たし、神の御業を知らしめ、神の知識を広めることがその使命となる。すでに原住民が住むヴァージニアの植民化は言うなれば神からの召命であり、かつまた、聖書以外の過去の歴史を見ても何ら問題はない。

Is onely now the ancient planting of Colonies, so highly praised among the Romans, and all other nations, so vile and odious among us, that what is, and hath bene vertue in all others, must be sinne in us? (p. 15)

そして主の命令に従い *Abraham* はパレスチナを目指したが、ヴァージニアは「カナン之地」にも匹敵する豊饒の地である。

The land [Virginia], by the constant report of all that haue seene it, is a good land, with the fruitfulness whereof, and pleasure of the Climate, the plentie of Fish and Fowle, England, our mistresse, cannot compare, no not when she is in her greatest pride. It is said of Canaan, that *Isaack sowed in that land, and found in the same yeere, an hundredfold, by estimation.* [Genesis: 26:12] and the next addeth, *And so the Lord blessed him.* (p. 24)

ヴァージニアはカナンであり、カナンが主の祝福を受けたようにヴァージニアも主の祝福を受けることになる。ヴァージニア植民者は *Abraham* と同じことをしているわけで、この事業が決して失敗することはない。*Symonds* は次のように言う。

Now what the Lord promised to *Abraham*, was also promised to al those that are of the same faith and obedience with him. Then this blessing, of being a blessing, belongeth vn[to] those which at Gods commandement doe *Get them out of their Country.* (p. 34)

ヴァージニア植民者の原型は *Abraham* である。主の *Abraham* への約束は *Abraham* と同じ信仰、服従を持つ人々にも約束される、と言う。そしてたとえヴァージニア植民に敵が現れても、主は彼らを呪うのである。*Abraham* の信仰と服従があれば神が敵に呪いをもたらしてくれる。だからいかなる点から見ても *Abraham* の出国は必ずや成功し、また、*Abraham* も出ていかざるをえない。なぜなら *Abraham* には主の保証があるからである。

... *Abraham* must get him out of his Country: that he may begin that, which God, by him and his seed, will accomplish in due time: namely that all nations may embrace the gospel of Christ vnto their saluation. (p. 47)

このように Symonds は「創世記」をヴァージニア植民に適応し、Abraham が神から行うよう命令されたと同じ事をヴァージニア植民者は行っているのだと言う。Abraham が神に従い、その子孫が神の定めた土地に定住したように、ヴァージニア植民者もいわば神からの召命によってヴァージニアへ行くのである。Abraham が受けたと同じ神からの祝福をヴァージニア植民者は受けることになる。1609 年はヴァージニア会社にとって極めて危機的な年であった。ヴァージニア植民が順調に行かず、ヴァージニアからも吉報が届かない中で、一般の人々のヴァージニア植民への興味・関心は薄らぎつつあった。ヴァージニア会社は人々の眼を再度ヴァージニア植民に向けるため説教家にヴァージニア植民を「宣伝」するような説教を依頼した。その最初が Symonds であったが、Symonds は会社の意向を十分に汲み、会社側を歓喜させる説教を行うことになった。それは聖書の一部のヴァージニア植民への適応である。予型論的に言えば、予型としての「旧約」の対型がヴァージニア植民ということになる。とにかく聖書をヴァージニア植民に適応することにより、ヴァージニア植民の神聖性及び正当性を主張するのである。ヴァージニア植民の先例を聖書の中に見出すことにより、人々にヴァージニア植民に対する勇気と希望を与えたのである。ヴァージニア植民は神からのお墨付きをもらったことになる。Abraham →ヴァージニア植民者、カナン→ヴァージニア、という対応がここでなされ、「旧約」の予型がヴァージニア植民の予表となっている。

Robert Gray

Symonds の説教から 3 日後 1609 年 4 月 28 日、ケンブリッジ大学の学者でもあった Robert Gray が *A Good Speed to Virginia* ⁽¹³⁾ と題する説教を行った。彼が選んだ聖書はイスラエル人のカナンの地侵入及びそこでの定住までの事情を記した「ヨシュア記」の 17 章 14 節-18 節である。その全文は以下の通りである。

「ヨセフの子らがヨシュアに、「あなたはなぜ、ただ一つのくじによる嗣業の土地、一つの割り当てしかくださらないのですか。わたしの民は、主に祝福されて、これほど数多くなりました」というとヨシュアは答えた。「あなたの民の数が多くて、エフライム山地が手狭なら、森林地帯に入って行き、ペリリ人やレファイム人の地域を開拓するがよい。ヨセフの子らが、「山地だけでは足りません。しかし平地に住むカナン人は、ベト・シェアンとその周辺村落の住民にもイズレイル平野の住民も皆、鉄の戦車を持っています」というと、ヨシュアはヨセフの家、すなわちエフライムとマナセに答えた。「確かにあなたは数も多く、力も強い民となった。あなたの割り当ては、ただ一つのくじに限られてはならない。山地は森林だが、開拓してことごとく自分のものにするがよい。カナン人は鉄の戦車を持っていて、強いかもしれないが、きっと追い出すことができよう。」(Then the Children of Ioseph spake vnto Ioshua, saying, why hast thou giuen me but one lot, and one portion to inherite, seeing I am a great people? Ioshua then answered, if thou beest much people, get thee vp to the wood, and cut trees for thy selfe in the land of the Perizzites, & of the Giants, if mount Ephraim be too narrow for thee. Then the children of Ioseph said, the Montaine will not be inough for vs, and all the Canaanites that dwell in the low countrey, haue Charets of Iron as well as they in Bethshean, and in the townes of the same, as they in the valley of Israel. And Ioshua vnto the house of Ioseph, to Ephraim, and Manasses, saying, Thou art a great people, and

hast great power, and shalt not haue one lot. Therefore the Mountain shal be thine, for it is a wood, and thou shalt cut it downe, and the endes of it shall be thine, & thou shalt cast out the Canaanites though they haue Iron Charets, and though they be strong.)

これはヨシュアによる他国の土地占領の許可である。Gray によればヴァージニアは野獣と理性をわきまえない生き物、獣のような野蛮人により奪われている。だから一刻も早くその土地を文明人の手に奪い返さねばならない。なぜなら彼らを教化することが植民の目的の一つであるからである。人間イギリス人の非人間インディアンへの有無を言わせぬ隷属強要が Gray の説教の根底をなしている。「ヨシュア記」の一節は人口増加による他国の征服であるが、Gray はこれをヴァージニア植民下のイギリスに適応する。「ヨシュア記」と同じ状況がイギリスにあったというわけである。17 世紀に入りイギリスの人口は急増し、その対策のひとつとしてあげられたのがヴァージニアへのイギリス人の移動である。特に浮浪者や犯罪者はその対象であったが、イギリスの急増した人口をいかに減らすかは政府を悩ました大きな社会問題であった。そして Gray はヨセフとヨシュアをヴァージニア植民に適応する。

...but so asmuch as euery example approued in the scripture, is a precept, and thought good to handle this conference betweene the tribe of Ioseph a family in the Israel of God, and Ioshua a faithful and godly Prince ouer the whole commonwealth of Gods Israel: which to my seeming, is much like that plot which we haue now in hnad for Vitginia; [Robert Gray: *A Good Speed to Virginia* ed. Wesley F. Craven (New York, 1937), p. B2 r]

ここではっきりと Gray はヨセフとヨシュアの関係をヴァージニア植民に適応している。では Gray はどのように「ヨシュア記」を適応しているか。

...for here the people of Ephraim and of the halfe tribe of Manasses, are a great people, and so are we. and by reason of the multitude of their people, the land is too narrow for them: and so stands out case, whereupon they repaire to Ioshua to haue his warrant and direction to inlarge their borders, and so haue many of our Noble men of honorable minds, worthy knights, rich marchants, and diuerse other of the best disposition, solicited Ioshua, and mightie Monarch, that most religious and renowned King Iames, that by his Malesties leave, they might undertake the plantation of Virginia. Lastly, as Ioshua not onely giues leave, but also a blessing to the children of Ioseph in their enterprises, so hath our gracious Souraigne granted his free Charter to our people, for the undertaking of their intended enterprise and aduenture, so that from this example, there is both sufficient warrant for our King to graunt his charter for the plantation of Virginia, and sufficient warrant also for our people to undertake the same. (B2 r-B3)

この引用文は、Gray の聖書のヴァージニア植民への適応を最も明らかに示している。その適応を「ヨシュア記」を予型、ヴァージニア植民を対型とすると以下ようになる。予型：①偉大な民であるヨセフの子供のエフライムとマナセ ② 人口増加によるエフライムとマナセの土地の狭さ③エフラムとマナセが領土拡大のためにヨシュアに保証と支持を仰

ぎに行った④ヨシュアがエフライムとマナセに許可と祝福を与えた⑤ヨセフの子供が征服するペリリ人、レファイム人、カナン人の土地。これらに対する対型：①イギリス国民②イギリスの人口増加による国土の狭さ③ヴァージニア植民者が領土拡張のためにジェームズ一世に植民を行う許可を求めた④ジェームズ一世がヴァージニア植民の許可書を与えた⑤ヴァージニア植民が入植するインディアン⁽¹⁴⁾の土地。以上の対応関係から明らかなように、Gray は、「ヨシュア記」をヴァージニア植民に適応し、エフライムとマナセ→イギリス国民、彼らの土地拡大→イギリスの領土拡大、ヨシュア→ジェームズ一世、ペリリ人等の土地→インディアン⁽¹⁴⁾の土地、との対応に問題の解決を探している。「ヨシュア記」の記述はジェームズ一世下のヴァージニア植民を取り巻く事情と酷似していた。そのために Gray は「ヨシュア記」の一節をヴァージニア植民に適応し、ヴァージニア植民者に彼らの植民政策の正当性を力説するのである。すでに神の書である聖書にも類似した事例があるから、ヴァージニア植民に何ら問題はないという主張である。Gray の適応は典型的なタイポロジーの利用で、「旧約」の対型を「新約」にではなく、ジェームズ一世の時代に求めており、これはダンが利用した手法と同じである。ヨセフの子供たちが行った領土拡張はヨシュアからの祝福を受けたいわば神からの認可行動である。それと同様ヴァージニア植民も「神」たるジェームズ一世から認可を受けている。それゆえ Gray にとってヴァージニア植民を実行に移さない理由は見当たらない。ヴァージニア植民への抵抗は「神、王、教会、国家」への抵抗となるとさえ言う。

Let none therefore find delates, or faine excuses to withhold them from this impolyment for Virginia, seeing euery opposition against it is an opposition against God, the King, the Church, and the Commonwealth. (D2)

ヴァージニア植民はいかなる点から見ても誰もが参加せざるをえない植民である。その最大の根拠は聖書である。Gray は「ヨシュア記」のヴァージニア植民への適応によってヴァージニア植民の正当性を強く訴えている。

Daniel Price

1609年5月28日ジェームズ一世の息子ヘンリー王子の司祭である Price はヴァージニア植民の批判者を強く非難し、ヴァージニア植民を称賛する説教 *Savls Prohibition Stayd. or The Appregension and Examination of Savle. And the Inditement of all that persecute Christ, with a reproofe of those that traduce the Honourable Plantation of Virginia* ⁽¹⁴⁾ を行った。彼が選んだ聖書の一節は「使徒行伝」9章4節の「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」(Saul, Saul, why persecutest thou me?)である。キリストの迫害者サウロの突然の回心を記したこの一節はキリスト教を広めるにあたり大きな影響を与えた一節であるが、Price はこれについての説教を通してヴァージニア植民を支援する。我々がこの一節から考えるのはキリストとサウル⁽¹⁴⁾の関係がヴァージニア植民にいかに対応されるかである。キリストを迫害してきたサウロが突然キリスト教徒に改宗するこの一節はヴァージニア植民といかなる関係にあるのか。Price は最初「サウル、サウル、なぜわたしを迫害するのか」を詳細に解釈するが、サウロの回心について以下のように言う。

...it was the heaviest fall, and yet the happiest fall that ever any had; it was his fall and his rising, his funeral and his resurrection, his burial and his birth, his killing and quickening. (B3)

サウロがダマスカスに行く途中で落馬して、それがサウロの回心に至ったのである。サウロの落馬は文字通り落下であったが、そのおかげでキリスト教に改宗したことを考えればその落馬は「最も幸福な落馬」であった。サウロの落馬はパラドキシカルな意味を持っている落馬である。彼は落馬によって再生したのであり、いわば死から生き返ったのである。キリストは迫害するサウロに対しては何も激しい感情を示しはしない。キリストのやさしい、穏和な神々しいサウロへの問いかきにキリストが怒りからほど遠いかを示している。キリストは迫害にあってもなお迫害者に慈悲を表している。サウロの迫害に対するキリストの愛の表明がこの一節の大きな特徴となっている。キリストの愛は迫害者を回心へと導くのである。サウロは名を変えてパウロとなり、熱意から穏健に変わった。このように Price は、「使徒行伝」を解釈する。サウロはキリスト迫害者からキリストの福音を広める人となった。「使徒行伝」をヴァージニア植民批判者に適応すると、彼らは植民を批判できなくなってくる。キリストの迫害者サウロがキリスト教に改宗したように、ヴァージニア植民批判者も植民賛同者にならざるをえない。ヴァージニア植民をめぐる事態がサウロのキリストへの迫害と接点を持つに至る。それを Price は聴衆に訴えるのである。「使徒行伝」はサウロがキリストの不思議さに心を奪われ、キリスト教の最も行動的な使徒となる様子を記述しているが、それをヴァージニア植民に適応し、ヴァージニア植民批判者を賛同者に変えさえ、植民そのものを支持するのである。これまで我々が見てきたタイポロジーではキリスト→ヴァージニア植民者、サウロ→植民批判者、となる。Price はヴァージニア植民に反対する人は迫害者であると言って、次のように言う。

If there be any that haue opposed any action intended to the glory of God, and sauing of soules and haue stayed the happy proceeding in any such motion; let him know, that he is a persecuter, and an aduersary of Christ. (F1r-F2)

ヴァージニア植民は神の栄光をインディアンに広め、魂の救済を目的とする宗教的使命を帯びた植民であるから、それを阻止する者はキリストを迫害したサウロと同じである。しかしサウロがキリスト迫害者からキリスト教徒の回心したように、ヴァージニア植民批判者も植民賛同者に回心することが期待できる。植民に加わる人は言葉では言い表せない祝福を受ける、なぜならば多くを義へと変える人は永久に星のように輝くからである、と「ダニエル書」をも援用し、植民者に対して神の御加護があることを力説する。全体として Price はそれほど多くのページを説教で割いてはいない。しかし、これまでの説教と同様カナンとしてのヴァージニア、土地の豊饒を称賛することを忘れはしない。これまでの説教が行った聖書のヴァージニア植民への適応は Price においてはそれほど目立ちはない。その意味においては幾分説得力を欠くが、Price は「使徒行伝」の劇的なサウロの回心を説教のテーマとすることにより、ヴァージニア植民を批判する者がサウロのごとき人物になることを訴え、植民の擁護を熱っぽく説いている。

Alexander Whitaker

Whitaker は Crashaw と同じくピューリタンである。厳密に言えば Whitaker の *Good Newes from Virginia* ⁽¹⁵⁾ は説教ではない。インディアンへの使徒してヴァージニアへ行った説教家 Whitaker がカトリック教徒や舞台俳優によるヴァージニア植民への批判・中傷から植民を擁護すべく書いたのが *Good Newes from Virginia* で、彼はそれをロンドンのヴァージニア会社の理事会と会社関係者に 1613 年に送った。説教家の書いたヴァージニア植民擁護文書であり、実際の聴衆の前での説教とは異なるが、これまでの説教とその手法・内容は同様あるので、それを検討したい。

Whitaker は、*Good Newes from Virginia* の中でインディアンへの好意的な見方を示し、神への信仰を欠く貪欲な入植者を批判するが、彼が選んだ説教は「伝道の書」11 章 1 節の「あなたのパンを水の上に投げよ。多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」(Cast thy bread upon the waters: for after many daies thou shalt finde it.) である。「伝道の書」は全体としては懐疑厭世的な調子で語られるが、11 章 1 節では著者は慈善の奨励を勧めている。Whitaker は本説教で彼がヴァージニアで目撃した金銭的に貪欲な入植者を批判するが、Whitaker によればロンドンの「冒険商人たちは、暴利、強要、虐待に自らを売り渡した哀れな貪欲な人達」で、ヴァージニアへ送られた人は「人殺し、泥棒、姦夫、仕事のない者」⁽¹⁶⁾ (P.11) で、これはヴァージニア植民参加者がいかに宗教に無縁な人達から構成されていたかを示し、彼らの植民参加の目的は即座の「利益」であったことを明白に物語っている。11 章 1 節の Whitaker の解釈の要約は以下の通りである：たとえ相手があなたの善行に報いることができなくとも、助けを必要としているすべての人に物惜しみせず施しをせよ。敵を非難するな。敵の悪業を寛容な心で克服せよ。あなたの善行から即座には多くの報いを期待はできないが、神はあなたの慈善を見ており、神の定めた時に現世においてもあなたに報いることを確信せよ。来世においては神は祝福された不死の栄光ある冠をあなたのために取っておいてある⁽¹⁷⁾。これはヴァージニアにおけるインディアンを念頭においての解釈であり、ピューリタン Whitaker の神の国建設の並々ならぬ異教徒への熱意の表れである。植民者の徒労とも思われる行為にもいずれは神からの確かな報いがあると訴える Whitaker の説教はすでに見たダンの説教を思い起こさせる。現世的な物質的な報いを期待してはいけない、ただ辛抱強く信仰によって神に仕えるしかないと Whitaker は言う。Whitaker はヴァージニア植民が崩壊の危機にあっても神は決して見放しはしなかった。現にバミューダ島に漂流した人達がヴァージニア植民援助のために再度ヴァージニアへ駆けつけてくれた。これが神の摂理以外のなんであろうか、と Whitaker は激しい口調でヴァージニア植民の背後で人々を援助してくれる神を力説する。ヴァージニア植民は神の導きによって行われていると Whitaker は言う。

...the finger of God hath been the onely true worker heere; that God first shewed vs the place, God first called vs hither, and here God by his speciall prouidence hath maintained vs. Wherefore, by him let vs be encouraged to lay our helping hands to this good work (yea Gods work) with all the strength of our abilitie. (p.23)

Whitaker のヴァージニアにおける使命は神の国建設で、そのためには真の神を知らないインディアンを悪魔から引きはなさねばならない。インディアンは言われているように白人への憎悪に包まれている無知蒙昧な人達ではなく、彼らは偉大な良き神がいることを知っているが理性が盲目のためその神を知らず、悪魔に仕えているのだと言う。インディアンについて Whitaker は次のように言う。

let vs not think that these men [Indians] are so simple as some haue supposed them: for they are of bodie lustie, strong, and very nimble: they are a very vnderstanding generation, quicke of apprehension, suddaine in their dispatches, subtile in their dealings, exquisite in their inuentions, and industrious in their labour. (p.25)

白人に匹敵するほどの能力を持つインディアンをキリスト教徒に改宗させ、ヴァージニアに神の国を建設することが Whitaker のヴァージニアにおける最大の任務となる。

Awake you true hearted English men, you seruants of Iesus Christ, remember that the Plantation is Gods, whose Kingdome you now plant, & good of your Countrey, whose wealth you seeke, so farre preuaile with you, that you respect not a present returne of gaine for this yeare or two: but that you would more liberally supplie for a little space, this your Christian worke, which you so charitably began. (p.33)

ここに Whitaker の *Good Newes from Virginia* の要約が簡潔に述べられていると言ってもよい。神の国の建設、早急な利益の還元を求めないこと、物惜しみのない供給、これらは、又、「伝道の手紙」11章1節に書かれていることでもある。Whitaker は幾度も慈善の必要性を強調し、それにはいつかは必ず報いられる日が来ることを確約する。Whitaker は、神はアブラハムにはカナン土地、ソロモンには智慧と富、キリストには永遠の生命を約束した。"great matters" を約束した神が "lesser matters" を約束しないことがあるか Whitaker はのべ、ヴァージニア植民の成功は疑いべくもないことを強く訴える。

Whitaker は「伝道の手紙」11章1節を明確にヴァージニア植民に適用はしない。しかし、その一節の解釈を通してヴァージニア植民を考慮しており、これは聖書の適用と言ってもよい。「水の上にパンを投げよ。多くの日の後、あなたはそれを得るからである。」「伝道の手紙」の著者が彼の弟子達に言ったこの言葉では、タイポロジー的には弟子達はヴァージニア入植者で、パンは入植活動に対応する。「伝道の手紙」が原型としてヴァージニア植民がその対型となっている。後半の文章は、入植者の無償の行為はいずれは神からの報いによって祝福されることを意味している。Whitaker は既に述べたようにピューリタンの説教家であり、彼はヴァージニアにおける神の国建設への強い熱意を注いでいる。その熱意の点においては同じピューリタンの Crashaw に少しも遜色ない。興味のある点はヴァージニア植民を擁護したのはアングリカンの説教家だけではなかったということである。更に興味深いのはアングリカンの説教家もピューリタンの説教家も述べている事に大差はないということである。ヴァージニアにおける宗教的使命の履行を植民の最大の目的として掲げ、植民の商業的性格を最小限にし、ひたすらインディアン改宗に専念する、これがすべて

の説教家の共通テーマであった。その意味で Whitaker は格別新しいことを述べているわけではない。ただ、アングリカンの説教家と異なるところは何か言えば、それは伝道精神に燃えた激しい熱情ということになる。Whitaker の *Good Newes from Virginia* は説教ではない。しかし、ヴァージニアから故国ロンドンに書き送ったこの「便り」は説教と同じ手法、テーマが見られ、その意味ではヴァージニア植民擁護の説教同様貴重な資料となっている。

Patrick Copland

Whitaker の *Good Newes from Virginia* から 9 年後、1622 年 4 月 18 日、Copland はヴァージニア会社関係者の前で彼らを喜ばせる説教を行った。それは、*Virginia's God be Thanked, or A Sermon of Thanksgiving for the Happie Successe of the affayres in Virginia this last yeare*^(1,8) という説教であった。この説教で Copland が選んだ聖書の一節は以下の「詩編」107 章 23-32 節である。

「彼らは、海に船を出し、大海を渡って商う者となった。彼らは深い淵で主の御業を驚くべき御業を見た。主は仰せによって嵐を起し、波を高くされたので、彼らは天に上り、深淵に降り、苦難に魂は溶け、酔った人のようによろめき、揺らぎ、どのような知恵も呑み込まれてしまった。苦難の中から主に助けを求めて叫ぶと主は彼らを苦しみから導き出された。主は嵐に働きかけて沈黙させられたので波はおさまった。彼らは波が静まったので喜び祝い、望みの港に導かれて行った。主に感謝せよ。主は慈しみ深く、人の子らに驚くべき御業を成し遂げられる。民の集会で主をあがめよ。長老の集いで主を賛美せよ。」
(They that goe downe to the Sea in Ships, and occupie in the great waters; They see the workes of the Lord, and his wonders in the deepe: Foe hee commandeth, and raiseth the stormie winde, and it listeth up the waues thereof. They mount up to the heaven, and descend to the deepe; so that their soule melteth for trouble: They are tossed too and fro, and stagger like a drunken man, and all their cunning is gone. Then they cry unto the Lord an their trouble; and hee bringeth them out of their distresse. He turneth the storme to a calme, so that the waues thereof are still. When they are quieted they are glad; and he bringeth them to the haven where they would be. Let them therefore confesse before the Lord, his loving kindnesse; and his wonderfull workes before the sonnes of men. And let them exalt him in the Congregation of the people, & prayse him in the Assembly of the Elders.)

この一節は、通商航海時の体験を述べたもので、通商のために外国へ行く者が海上で遭遇した危険から主によって救われたことへの主への賛美である。これがヴァージニア植民に適應するといかなる意味を持つかは容易に理解できよう。海は大西洋、通商航海者がヴァージニア植民者とそれぞれ対応し、ヴァージニア航海者がヴァージニアへの途上でいかなる嵐に遭おうとも神が必ずや救助してくれる。ヴァージニア航海者にとっては神の援助がある故、ヴァージニアまでの航海が失敗に終わることはない。ヴァージニア植民者への神の加護である。これほどヴァージニア植民関係者の懸念を払いのけてくれるものはない。

「詩編」の一節から Copland の説教の内容を推し量ることは困難ではない。Copland は、「詩編」の一節は、「危険」「救出」「義務」を表していると考える。そしてそれぞれをヴァージニア植民に具体的に適應していく。「危険」に関しては 1609 年の Sir Thomas Gates

率いる9隻の船からなるヴァージニアへの遠征隊の悪魔の島と言われたバミューダ島への漂着がある。あるいは西インド諸島での残忍な敵との遭遇、航海途中での死、ヴァージニアでのインディアンによる殺戮等幾多の危険があった。しかし今は事態は好転し、ヴァージニア植民に関しては何ら危険はない。航海途上での敵や海賊からの襲撃もなく海上における漂流の危険もない。航海それ自体もいまでは格段の早さで終わることができる。現に最近では9隻の船が無事帰国したし、800人の入植者も無事ヴァージニアへ到達している。上陸後にも以前は戦争、飢餓、住居不足等の危険があったが、今はインディアンとの間に友好関係があり、ヴァージニアでの危険は一扫され、入植者は彼らの仕事に励んでいる。このように Copland は以前のヴァージニア植民と違った状況のなかでいかに植民事業が安全に行われているかを指摘する。それでは「救出」はどうか。一つは上記の Sir Thomas Gates 率いる遠征隊のバミューダ島漂流からの脱出である。Gates はバミューダ杉で船を作り、翌1619年5月にチェサピーク湾に入り、入植者の救助にあたっている。国外での「救助」があれば国内の「危険」からの「救出」もある。ヴァージニア植民関係者は多額の資金を植民に投資したが、その還元が期待できないという危険があった。ヴァージニアが不毛の土地であるというのは正しくない。現地からの報告でもヴァージニアは "the most opulent parts of Christendome" (C) と言及されている。商品価値のある産物がヴァージニアから送られてきている。豊饒の地ヴァージニアから期待できないものはない。

Haue you not now great hopes of abundance of Corne, Wine, Oyle, Lemmons, Oranges, Pomegranats, and all maner of fruites pleasant to the eye, and wholesome for the belly? And of plentie of Silke, Silke Grasse, Cotton-wool, Flax, Hempé &c. for the backe? Are you not already possessed with rich Mines of Copper and Yron, and are not your hopes great of farre richer Minerals? (C-C2)

食料から絹織物、鉱物に至るまで、あらゆるものが手に入るヴァージニアの現状が記述されているが、そのようなヴァージニアを聞き、誰がヴァージニアを不毛の地と批判し、植民に手を貸さない者があるろうか、と Copland は聴衆に植民への参加を呼びかける。

「詩編」の解釈の「義務」についてはどうか。Copland は、義務とは神への感謝であると言う。神は偉大で、神に祈れば神はいかなることをもしてくれる。その神に対して感謝の気持ちを忘れるな、Copland は言う。イスラエル人が紅海を渡るや神への祈りや称賛を終えてしまったように、イギリスもヴァージニア植民の繁栄を見守ってくれた神に対して忘恩の気持ちを抱いてはならない。我々は神への義務、感謝を忘れてはならないことを Copland は強調する。神への感謝とは、と Copland は言葉を続ける。

For thanksgiuing is, as it were, the homage or rent-charge, which wee are to returne to God for all his mercies, especially for our right to our inheritance in heaven. (D2)

神への感謝は賃貸料のようなもので神の慈悲に対して我々が返さなければならないものである。だからもしそれを神に返さなかったどうなるか。我々は土地を追い出され、他人が我々に取って代わる。同じように我々が神への感謝を忘れると天国への相続権を失うことに

なる。神が我々に対して何をしてくれたかを熟慮し、我々は神へ感謝をしなければならない。この Copland の言葉はヴァージニア植民の現状について重要なことを我々に示している。ヴァージニアは豊饒の地としてあらゆる物資をイギリスに供給していると Copland は書いたが、彼が言いたいのは入植者が余りにも物質的になったことへの戒めなのである。入植者の物欲性が目に余る故の言葉であろう。つまりヴァージニア関係者は「利益」にのみ先走ってしまっているのである。Copland は次のように言う。

Surely, surely, the sinnes of our land are crying sinnes; and is it any wonder if they doe awake the Iustice of God, and turne the mercies of Heauen into roddes of Indignation? Or was it for the sinne of your owne society at home; because you haue eyther too much affected your gaine? or too too seldome called vpon the name of God in prayer for giuing his blessing to your plantation? or too faintly depended vpon God by faith and patience for the issue? or too much neglected God in thankfulness for the successe? (D3)

ヴァージニア植民が成功しつつあるのはすべて神のお陰である。しかし、入植者が考えていることはというと専ら利益であり、神への崇拜の怠り、怠惰な暮らし、陰謀計画、植民統治への反発、異教徒の間での放縦な生活の罪ゆえに神の死のムチが下るのは必至である。それでも神は人々の罪を大目に見てくれる。それは "the wonderful workes of the Lord" (D3) である。だから人は神に対して感謝を表すのみならず、神を高めなければならない。それは具体的には神の教会に繁栄を望むことであり、又、多くの神の人を獲得することである。つまり Copland はヴァージニアにおけるキリスト教の普及とインディアンへのキリスト教改宗を植民の最大の目的としているのである。この主張はこれまでの説教家達が何度も繰り返し語っていたことであり、とりわけ新しいことではない。Copland は他にもヴァージニア植民の目的の一つにイギリス内の急増した人口の解決策としての植民政策をあげているが、彼が最も強調したかったのは「詩編」を題材にして神への感謝の気持ちを今一度再確認し、神に対する恩を再度思い起こすことによってヴァージニア植民を更に強固な確固たるものにしていこうという決意と熱意を聴衆に求めているのである。Copland がこの説教を行った翌月 5 月 28 日ヴァージニア入植者はインディアンの襲撃を受け、植民は壊滅的な影響を受けることになるが、Copland はそれを植民者の神への忘恩に帰したかは知る由もない。いずれにせよヴァージニア植民は以後幾多の困難を乗り越えていかねばならなかったのである。

VI ジョン・ダンのタイポロジー

ダンのヴァージニア植民擁護の説教から我々はダンが聖書の一部をヴァージニア植民に「適応」し、植民の商業的性格を宗教的次元にまで高めていることを知った。聖書の一部のヴァージニア植民への適応という手法はダン同様ヴァージニア植民を擁護したすべての説教家達によって取り入れられた手法である。説教家はそれぞれ異なる聖書の一部をヴァージニア植民に適応し、植民の合法化、宗教性を聴衆に訴える。この聖書の適応は我々にすぐ「タイポロジー」(typology)という聖書解釈を思い出させる。これは「旧約」と「新

約」の相関性、一貫性を認めつつ、「旧約」は「新約」の「予表」であると考え。「旧約」の記述は、神によってあらかじめ定められたことであり、それが「新約」においてより完全に成就される「型」として解釈する。つまり、「新約」の人物、事件等はすべて「旧約」に見られるという考えに立つ聖書解釈である。パウロは、ローマ人の手紙5章14節においてアダムを「来るべき者（キリスト）の予型」と解釈している。ヘブル書で言われているように、「a shadow of good things to come」(Heb:10:1)としての"type"（予型）が旧約にあり、その"antitype"（対型）が新約にあると考える。たとえば David 王がキリストの「予表」となり、Isaac の生贄や くじらの腹の中の Jonah やライオンの洞穴の中の Daniel がキリストの生、死、復活の予表となる。タイポロジーは本来は旧約の人物、出来事と新約の関連性を見出し、旧約に記されていることが新約で成就されていると考える。ブルトマンの言葉を借りれば、タイポロジーとは「旧約聖書が報告している人物、出来事、あるいは制度の中に、イエス・キリストの到来によって開始された救済の時を持つそれらに対応する人物、出来事あるいは制度の「予めの写し」「前もっての叙述」を見出す解釈である⁽¹⁹⁾。」つまり旧約聖書のすべては、新約聖書の「予表」もしくは前兆なのである。旧約のイスラエルは、世界を千年王国へと導くべく運命づけられた国家や国民の予表となるのである。このような予表論的聖書解釈がいかに実践されてきたかについては様々な研究があるが、特に16-17世紀にはこの聖書解釈がしばしば使用されていた。ダンはタイポロジー的聖書解釈に熟知していたことは彼の多くの説教、散文、宗教詩が雄弁に物語っている。以下にダンのタイポロジー聖書解釈を見、ダンがいかにタイポロジーを扱っているかを検討し、次にダンがタイポロジーを聖書以外に適応しているかを見ていきたい。私の本論における意図はダンがタイポロジー的聖書解釈をヴァージニア説教に「適応」したということである。

ダンは大膨大な説教集の随所で「旧約」と「新約」を縦横無尽に扱い、所々でタイポロジーに触れて、説教を行っている。「旧約」の一節を論じながら「新約」を援用し、また逆に「新約」を論じながら「旧約」をも論じている。ダンが聖書解釈についてある説教で次のように言っている。

The literall sense is always to be preserved; but the literall sense is not always to be discerned: for the literall sense is not always that, which the very Letter and Grammer of the place presents, as where it is literally said, *That Christ is a Vine*, and literally, *That his flesh is bread*, and literally, *That the new Ierusalem is thus situated, thus built, thus furnished*: But the literall sense of every place, is the principall intention of the Holy Ghost, in that place: And his principall intention in many places, is to expresse things by allegories, by figures; so that in many places of Scripture, a figurative sense is the literall sense, and more in this book [Revelation] then in any other. (Vol.VI. p.62)

ここでダンが聖書の字義通りの解釈を認めつつもアレゴリーや象徴による解釈をも容認し、「聖書の多くの箇所においては比喩的意味が字義通りの意味である。」とさえ言っている。これはアウグスティヌスが「旧約聖書におさめられているすべて、あるいはほとんどの行動は、文字通りにだけでなく、比喩的にも受取らなければならない⁽²⁰⁾。」(『キリス

ト教の教え』から影響を受けた言葉であろう。ダンはある説教でアウグスティヌスの "Figura nihil probat" を引用し、それを "A figure, an Allegory proves nothing" (Vol.III. p.144) と英訳している。"figura" の訳語は "figure" である。とすれば「比喩的」という言葉は文字通り「比喩的」の意味ではなく、「予型論」をも含む解釈である⁽²¹⁾。とすれば上記のダンの「比喩的意味」(figurative sense)の "figurative"にも「予型論的」の意味に解釈することが出来る。ダンが使用している "figure" はアウグスティヌスが使っている "figura" の訳語であろう。言いたいことはダンは上記引用の聖書解釈に関して、タイポロジー的な聖書解釈を自ら認めているのではないかということなのである。また、ダンは 1624 年自らの危篤状態の中で書いた『危篤時における祈り』(Devotions upon Emergent Occasions)でも聖書解釈について次のように言っている。

My God, my God, Thou art a direct God, may I not say, a literall God, a God that wouldest be understood literally, and according to the plaine sense of all that thou saiest? But thou art...thou art a figurative, a metaphoricall God too: A God in whose words there is such a height of figures, such voyages, such peregrinations to fetch remote and precious metaphors, such extentions, such spreadings, such Curtaines of Allegories, such third Heavens of Hyperbples, so harmonious eloquitions, so retired and reserved expressions, so commanding perswasions, so perswading commandements, such sinewes even in thy milke, and such things in thy words, as all prophane Authors, seeme of the seed of the Serpent, that creepes⁽²²⁾ :

ここでもダンは "literall God" と "figurative, metaphoricall God" の両方を認め、上記の説教と同様、2種類の聖書解釈について論じている。「字義通りの神」と「比喩的な神」である。上記の "a height of figures" であるが、この figures はコンテキストからは「象徴」であろうが、これまでみたダンの "figure" の使い方を考えると、この語にも「予型」の意味があろう。つまり、ダンは「予型的聖書解釈論」をも十分意識しているのである。ダンは、聖職に就任する前の 1615 年『神学論集』を書いたが、そこでアウグスティヌスの言葉を借りて、"...it [Bible] hath this common with other books, that the words signifie things; but hath this particular, that all the things signifie other things."⁽²³⁾ と言っている。「言葉が物を意味し、物は他の物を意味する」とは、比喩的な聖書解釈を言っているが、これに予型的解釈をも含めることは可能であろう。

ダンはこのように聖書解釈について、字義通りの解釈以外にも比喩的な解釈をも認めている。アウグスティヌスの影響が大きいようであるが、その比喩的解釈にダンは予型論的聖書解釈をも含めている。ではダンはいかにしてタイポロジーを説教集で扱っているかを次に詳細に見てみたい。

ダンのタイポロジーに対する基本的態度は詩篇 38 章 4 節の「わたしの不義はわたしの頭を越え、重荷のように重くて負うことができません。」についての以下の言葉に明確に述べられている。

First then, all these things [They (David's iniquities) are gone over my head and they are a heavy burden, too heavy for me.] are literally spoken of David; By application, of us; and by

figure, of Christ. Historically, David; morally, we; Typically, Christ is the subject of this text.
(Vol.II. p.97)

上記の一節は「文字通り」には David について、「適応」によってすべての人間について、「予型」によってキリストについて語られている、とダンと言う。最後に「予表的にはキリストが本文の主題である」とダン述べるが、ここでダンはっきりとタイポロジカルな聖書解釈に触れ、「旧約」詩篇の「予型」としての David は「新約」のキリストの「対型」と対応していることを示している。旧約の David はキリストの「予表」として説明されているわけである。更に、ダンは言葉を続けて David の言葉は彼のみにあてはまる言葉ではなく、我々すべてに言えることを預言的に述べているという。

Though this will be a good rule, for the most part, in all *Davids* confessions and lamentations, that though that be always literally true of himself, for the *sinne* , or for the punishment, which he says, *personally David* did suffer, that which he complains of in the *Psalms* , in a great measure, yet *David* speaks *prophetically* , as well as *personally* , and to us, who exceed him in his sins, the exaltation of those miseries, which we finde so often in this book, are especially intended; That which *David* relates to have been his own case, he forsees will be ours too, in a higher degree.
(Vol.II. p.99)

ダンは「詩篇」の David から Christ へ、そしてすべての人々へと David の一節をタイポロジカルに適応する。ここで重要なことは「予型」としての David と「対型」としての Christ の他にダンはさらに人々一般にも「詩篇」を適応しているということである。これについては後述するが、本来は旧約と新約との関係というタイポロジーが一般的に利用され、もともとのタイポロジーが異なる形で利用されているのである。ピューリタンは特にタイポロジーを社会的・政治的に利用し、自らの革命の正当化を主張したが、ダンはここで David の一節を同時代の人々にも適応していることに注目したい。

ダンは同じ詩篇 38 章 3 節の「あなたの怒りによって、わたしの肉には全きところなく、わたしの罪によってわたしの骨には健やかかなところはあります。」についての説教のなかでも上記と同様のことを言っている。

Which words [There is no soundnesse in my flesh, because of thine anger, neither is there any rest in my bones, because of my sinne.] we shall first consider, as they are our present object, as they are historically, and literally to be understood of *David* ; And secondly, in their *retrospect* , as they look back upon the first *Adam* , and so concern *Mankind collectively* , and so *you* and *I* , and all have our portion in these calamities; And thirdly, we shall consider them in their *prospect* , in their future relation to the *second Adam* , in *Christ Jesus* , in whom also all mankind was collected, and the calamities of all men had their Ocean and their confluence, and the cause of them, the anger of God was more declared, and and the cause of that anger, that is sin, did more abound, for the sins of all the world were *his* , by imputation; (Vol.II. p.75)

ダンはこちらで詩編の一節の歴史的・文字通りの解釈、David と Adam、人類との関係、更には David の「対型」としての the second Adam = Christ にまで論を展開している。この一節を個人的な問題を扱っていると解釈する人もいれば普遍的な問題と見る人もいればまた予言的にキリストに言及していると考える人もいる。ダンはこのように聖書の解釈にあたって、予型としての「旧約」と対型としての「新約」のタイポロジー的解釈を説教のいたるところで行い、ダンがいかにタイポロジーを熟知していたかが理解できる。ダンは聖書の予表論的解釈についてアウグスティヌスを引用して次のように言っている。

It is true that S. Augustine says, *Figura nihil probat*, A figure, an Allegory proves nothing, yet, says he, *addit lucem, & ornat*, It makes that which is true in it selfe, more evident and more acceptable. (Vol.III. p.144)

予型やアレゴリーは何も証明しないが、それ自体真なることがより明白になり、受け入れられるようになる、と言い、ダンは決して象徴的聖書解釈を否定はしない。むしろその解釈により、聖書の記述がより理解できるようになるのである。ダンのタイポロジー的聖書解釈の例を同じく詩編の David に関する一節から引いておこう。詩編 38 章 2 節の「あなたの矢はわたしを射抜き、御手はわたしを押しえつけています。」についての説教で、ダンは詩編の他の「矢」に関する章についても言及し、この「矢」が病気や良心の苦痛やあるいは David 自身の激しい悲しみを表すと言われるが、これらの解釈に異を唱え、次のように言う。

But these *Psalmes* were made, not onely to vent *David's* present holy passion, but to serve the Church of God, to the worlds end. And therefore, change the person, and wee shall finde a whole quiver of arrows. Extend this *Man*, to all *Mankind*; carry *David's* History up to *Adams* History, and consider us in that state, which wee inherit from *him*, and we shall see *arrows* fly about our ears. (Vol.II. p.55)

ダンは、David を Adam や全人類にまで拡大し、David 自身に関わる「矢」とは見なしていない。Adam の子孫である我々にまで問題を広げ、適応しているのである。David の「矢」は Adam の「矢」でもあり、その子孫の全人類の「矢」でもある。ここでは「旧約」の「予型」に対する「新約」の「対型」とはなっていないが、「旧約」の「予型」をダンの時代のすべての人々に適応している点において、ヴァージニア説教の手法を思い起こさせるものである。タイポロジーはすでに述べたが、本来は「旧約」の人物、事件、制度に対応するものを「新約」の中に見出す聖書解釈である。「旧約」のイスラエル人の歴史を「予型」とし、それが「対型」として「新約」のなかに見出されるとする。言葉を代えて言えば、「旧約」が「新約」において完成されることを意味する。「旧約」におけるキリストの「対型」としての David が「新約」ではキリストとなり、「旧約」の「予型」が「新約」で完成されることになる。「新約」で述べられていることはすべて「旧約」ですでに述べられているのである。「旧約」と「新約」との歴史的な関係がタイポロジーでは重要となる。ダンは純粋に「旧約」と「新約」の関連性をタイポロジカルに論ずる場合と更にダン

の時代に「旧約」、「新約」を拡大して、適応する。この手法はダンに限らず 17 世紀では極めて自然に使用された手法であるが、ヴァージニア説教の手法を解く重要な鍵となる。

ダンはまた Solomon をタイポロジカルに Christ と結び付けている。

First then, behold your selves in that first glasse, *Behold King Solomon; Solomon the sonne of David, but not the Son of Bathsheba, but of a better mother, the most blessed Virgin Mary.* For, *Solomon*, in nthis text, is not a *proper Name*, but an *Appellative*; a *significative word*: *Solomon is pacificus, the Peacemaker, and our peace is made in, and by Christ Jesus: and he is that Solomon, whom we are called upon to see here.* (Vol.VI. p. 286)

Solomon は、ヘブライ語で平和を意味する。世界の平和はキリストによってもたらされたから、キリストは Solomon である。「予型」としての Solomon が「対型」としてのキリストに見出される。ダンは、このようにキリストを「旧約」の人物の Solomon の「予型」として見るが、この他にもダンは「予型」として、様々な人物を挙げる。例えば「予型」としての Jehovah である。

Now that which *Iehovah* was to *David*, *Jesus* is to us. Man in generall hath relation to God, as he is *Iehovah*, Being; We have relation to Christ, as he is *Jesus*, our Salvation; Salvation is our Being, *Jesus* is our *Iehovah*. (Vol.V. p.326)

Jehovah と David の関係をダンはキリストと我々の関係としてみる。人間が神との関係は神が存在 (Being) としての Jehovah であるからである。我々がキリストと関係するのはキリストが我々の救済、Jesus であるからである。救済は我々の存在だから、存在という点において、Jesus は我々の Jehovah となるという三段論法である。あるいは、ダンは、救世主メシア待望について述べられたイザヤ書で言及されている救世主の名「助言者、驚くべき指導者、平和の君」をキリストは生まれつき持っていたと言う。

All those names which he [the Anointed] had in *Isaiah, The Counsellor, The Wonderful, The Prince of Peace, and the name of Iehovah*,...Christ had by nature;(Vol.V. p. 327)

「旧約」の「予型」がキリストの「対型」に対応され、メシア待望がキリストにおいて成就されていることをダンは示唆する。次の一節では、ダンは Jacob をキリストの「予型」と見なしている。Jacob はヨルダン川を渡ったこと、及び祖国から追放されたこと、これらはいずれもキリストがヨルダン川を超えたこととヘロデ王からの難を逃れるエジプトへの追放の「予型」となっている。Jacob はキリストの "figure" (type) となる。

Jacob had concluded it out of the contemplation of his former, and present state; first he had been bansihed from his Countrey, *I came over Jordan*; Herein he was a figure of Christ; he received a blessing from his father, and presently he must go into banishment; Christ received presents and adoration from the Magi of the east, and presently he submits himself to a

banishment in *Egypt*, for the danger that *Herod* intended. (Vol.I. pp. 278-9)

ダン は、また、Isaac とキリストをタイポロジー的に見ている。ダン は、Isaac が掘った井戸を「命の水の井戸」と解釈し、Abraham が最初 Adam にこの「水」を注ぎ、Adam の子孫たる人類はこの「水」を Adam の罪のために汚されているが我々は引き継いでいる。その汚された「命の水の井戸」を再び掘り起こしたのは、キリストであり、キリストが救済の手段を人類に再度与えてくれるのである。

perchance in every one of our soules, there is this Well of the water of life [Isaac digged], and power to open it;...In all us, as wee are naturall men, there is this Well of water of Life, Abraham digged it at first, The Father of the faithfull our heavenly Abraham, infused it into us all at first in Adam, from whom, as wee have the Image of God, though defaced, so we have this Well of water though stopped up;...but Isaac diggs them againe, Isaac who is *Filius latitiae*, the Son of Jpy, our Isaac, our Jesus, he opens them againe, to all that receive him according to his Ordinance in his Church, he hath given this power, of keeping open in themselves, this Well of Life, these meanes of Salvation: (Vol.VII. pp.337-8)

ペリシテ人がふさいでしまった井戸を掘り返した Isaac は、いわば人々に命の糧である水を与えたことになる。Isaac を「予型」として見れば「新約」の「対型」はキリストとなる。キリストも Isaac 同様、罪に汚れた人間の「命の水」を自らの死によって再びよみがえさせたからである。Isaac の井戸はキリストの贖いとなる。ここで、「旧約」の「予型」Isaac が「新約」のキリストに「対型」を見出すことになる。

ダン は、Moses とキリストのタイポロジーについては以下のように述べる。

Moses who in his Exodus had prefigured this issue of our Lord, and in passing Israel out of Egypt through the red Sea, had foretold in that actual prophesie, Christ passing of mankind through the sea of his blood, and Elias, whose Exodus and issue out of this world was a figure of Christs ascention, had no doubt a great satisfaction in talking with our blessed Lord ...of the full consummation of all this in his death, which was to bee accomplished at Ierusalem. (Vol.X. pp.244-5)

Moses は以下の点でキリストの「予型」となる。Moses は、イスラエル人を引き連れてエジプトから紅海を経て彼らを救出した。キリストは十字架上の「血の赤い海」を経て人類を永遠の生命に導いた。両者とも「赤い海」を経ることにより人々を救出した。その意味において Moses はキリストの「予型」となる。更に、Elijah がこの世から脱出したことはキリスト昇天の「予表」(figure)となっている。ダン は Moses だけでなく Elijah をもキリストの「予型」としていることがわかる。

ダン は以上見てきたように「旧約」の様々な人物を「予型」としてその「対型」を「新約」のキリストに見出している。これは本来のタイポロジーである。説教集を読むとキリストの予型は「旧約」の至る所にあるとダンが言っているのを我々は知る。例えば次の一

understood to be the *Determinations, and Resolutions, Canons, and Decrees of generall Councils*: (Vol.VI. p.253)

Solomon が命じた神殿の刻まれた石、高価な石は正しい適合では宗教会議の決意、決心、法規、法令として理解される。この「正しい適合」とは「適応」に近い意味を持っている。Solomon の命じた神殿は教会となり、その教会の基礎は宗教会議の様々な決議事項となっている。「予型」としての Solomon の神殿と「対型」としての「教会」の関係がタイポロジー的に扱われている。

「紅海」と「キリストの血」についての予表論的解釈についてもダン論は論じている。これについては既に一部言及したが、ダン論は次のように Moses の紅海脱出とキリストの「紅い血の海」を対応させている。

...hee [Christ], who had formerly passed his *Israel* thorough the *Red Sea*, as though that had not been *love* large enough, was now himself overflowed with a *Red Sea* of his owne bloud, for his *Israel* again. (Vol.II. p.140)

Moses はイスラエル人をエジプトから紅海を渡り、彼らを「約束の地」へと導いた。キリストも迫害を免れるために紅海を渡り、エジプトに難を逃れた。その「紅海」はキリストの十字架上の「血の海」となってくる。このタイポロジーはダン論にあって特異なものではなく、一般的なタイポロジーであったが、ダン論は Moses の「紅海」とキリストの「血の海」を関係づけ、キリストの「血の海」の「予型」を Moses の「紅海」脱出に見ている。

イスラエル人を救った「雲の柱」と「教会」についてはどうか。Moses は主に対して、エジプトから「約束の地」への道を示してくれるようお願いする。それについてダン論は次のように言う。

They did see that Pillar in which God was, and that presence, that Pillar shewed the way. To us, the Church is that Pillar; in that, God shewes us our way. (Vol.IX. p.362)

イスラエル人にとっての神の導き手である「柱」が「新約」では「教会」となっている。神がダン論に示す道は教会である。それが「柱」である。教会の基本的な事柄に関しては教会は固定しているが、重要でない、任意の事柄について教会は移動可能な柱である、とダン論は言う。「旧約」では主は時には炎となり、時には雲となり、イスラエル人を「約束の地」へと導いたが、「新約」ではその「対型」が「教会」という真理の柱となっている。

「樂園」と教会の関係についてはダン論は次のように言う。

We have in the Scriptures two speciall Types of the Church, *Paradise* and the *Arke*. But, in that Type, the *Arke*, we are principally instructed, what the Church in generall shall doe, and in that in *Paradise*, what particular men in the Church should do. (Vol.VII. p.423)

ここでダン論ははっきりと教会の「予型」に "Types" という語を使い、ダン論がタイポロジー

一に熟知していたことを示しているが、教会の「予型」として「樂園」と「ノアの箱船」が挙げられている。これも中世以来の伝統的な「予型」であるが、ダンは、教会は「箱船」の「予表」[*The Church itself, (figured by the Arke)*] (Vol.VII.p.424)であると明言する。また、「教会の予型、箱船のなかで教会を考えよ」(Vol.VI. p.155)とも言っている。

「ノアの洪水」と「洗礼」についてはどうか。ダンは Saint Basil と David を援用し、「洪水」と「洗礼」のタイポロジーに触れる。

...the greatest water of all, the *flood* it selfe, Saint Basil understands, and applies to *Baptisme*, as the Apostle [Peter] himselfe does, *Baptisme*, was a figure, of the *flood*,...David calls *Baptisme* the *flood*, because it destroyes all that was sinfull in us; (Vol.V.p.110)

ノアの洪水では主に従順なノア等は水を経ることにより救われ、罪は洗い流された。それと同じように教会の洗礼という水を経て人は罪を清められる。ペテロが言うように、洗礼は洪水の予表である。ダンはこのあとで次のように言う。

There was a *Brasen Sea in the Temple*; and there is a *golden Sea in the Church* of Christ, which is *Baptisterium*, the *font*, the *Sea*, into which God flings all their sinnes, who rightly, and effectually receive that Sacrament. (Vol.V. p.110)

ここでダンは Solomon が命じた水を入れる円形の鉢、「青銅の海」とキリスト教会の「黄金の海」、洗礼盤について触れている。上記ではノアの箱船は洗礼の予表となっており、「予型」と「対型」の関係が優劣の関係なく示されていたが、ここでは Solomon の神殿の「青銅の海」と教会の「黄金の海」との対比から、ダンがはっきりと後者が前者より優れていることを示唆している。神殿の水も教会の水も同じ水であるが、前者の水は人の罪とは関係のない水である。それに反し、後者、教会の水は人々の罪を洗い流してくれる。一方が「青銅」で、他方が「黄金」であることから、ダンが後者の洗礼の水を神殿の水より価値があると認めていることは明らかである。洗礼についてダンは「割礼」にも洗礼の「予型」を見ている。「旧約」の割礼は「神とアブラハムとの間の契約の印」である。しかし、キリスト教徒は外的儀式でしかない割礼ではなくキリストの割礼、すなわち洗礼によって救われる。「旧約」の割礼は「心の割礼」を予表するとダンは言う。

...the principall dignity of this Circumcision, was, that it was *Signum figurativum*, it prefigured, it directed to that Circumcision of the heart; (Vol.VI.p.193)

「心の割礼」が洗礼を指していることは言うまでもない。ダンは「旧約」の割礼とキリストの割礼を比較して、次のように言う。

The Jewish Circumcision were an absurd and unreasonable thing, if it did not intimate and figure the Circumcision of the heart; (Vol.VI. p.193)

ダンは、「旧約」の割礼が心の割礼を予表しなければそれはばかげた不合理なものであると言うが、ここでもダン是对型としての「新約」が予型の「旧約」より優れていると言っている。ダンは概して「新約」が「旧約」を完成させているとの考えを持っているようである。福音と律法を比較した箇所ではダンが、福音は律法と同様のよい基盤があり、「新約」は「旧約」と同様基盤はしっかりしている。しかし福音が神の声、神の忠実な声である。「旧約」も「新約」も神の声であることには変わりはないが、律法には「決定」と「終結」があるのに福音にはそれがないので、「新約」が「旧約」よりより忠実に守ることができると言っている。

...the Gospell is *fidelior*, the more faithfull, and the more sure, because that word, the Law, hath had a determination, an expiration, but the Gospell shall never have that. (Vol.I. p.286)

律法は断定的で上からの一方的な命令、指示であり、神への絶対的な服従を強いる。それに対し、福音は律法ほど厳しく強制はしない。むしろ他者の人間的な弱みを暖かく包んであげる愛に満ちあふれている。ダンが言いたいのは、福音がより人間的なメッセージを我々に伝えているということであろう。そこが律法と福音の違いであり、そこに両者の優劣があるとダンは見ている。

エジプトにおけるイスラエル人の幽閉とキリスト教徒の殉教のタイポロジーについてはどうか。以下の引用から前者が後者の「予型」となっていることがわかる。

As after, in the *Christian Church*, he made the *bloud of the Martyrs*, the seed of the Church, so in *Egypt*, he propogated, and multiplied his Children, in the midst of their cruell oppressions, and slaughters, as though their *bloud* had been *seed* to encrease by; under the weight of their depressions, he gave them growth, and stature, and strength, as though their *wounds* had been *playsters*, and their *vexations cordials*; (Vol.V. pp. 187-8)

初期キリスト教会では迫害を受けた殉教者の血がその後のキリスト教会の礎となった。殉教者の血は教会の種子である。同様に、エジプトでのイスラエル人はエジプト人から迫害を受けたが主は依然として彼らを見捨てることなく、彼らの数を増やしていった。彼らが流した血は彼らが増えていく種子であった。キリスト教会の殉教者の流した血もエジプトでイスラエル人が流した血もいずれも無駄な血でなく、その後のキリスト教会、イスラエル人を更に強固なものにする糧であった。その意味で「旧約」のエジプトのイスラエル人は初期キリスト教会の殉教者の予型、予表となるのである。

次は Solomon の冠とキリストの冠である。ダンはジェームズ一世が亡くなった後、雅歌 3 章 11 節を大罪にして説教を行った。それは「いでよ、シオンのおとめたちよ。ソロモン王を仰ぎ見よ。その冠を見よ。王の婚礼の日に、喜びの日に母君がいただく冠を。」である。ダンは Solomon の冠をキリストの冠の予型として、次のように言う。

And then lastly, the *person upon whom they* [daughters of Sion] are directed, is *Solomon* crowned, That is, Christ invested with the royall dignity of being *Head of the Church*; And in this

especially, is this applicable to the occasion of our present meeting [James I's burial]...That this *Crown of Solomon* in the text, will appear to be Christ's crown of *Thornes*, his *Humiliation*, his *Passion*; (Vol.VI,pp.280-1)

この一節は花嫁の行列を描いたもので、Solomon は王としての Solomon でなく、花婿を指していると解釈されるが、ダンが文字通り Solomon 王に言及していると考えているようである。これまで、キリストの予型としての Solomon については既に触れたが、ここではさらに Solomon の冠がキリストの冠と対応している。更には Solomon →キリスト→ジェームズ一世という本来のタイポロジーがジェームズ一世にまで拡大され、ジェームズ一世は Solomon,キリストと並列されていることがわかる。ジェームズ一世の葬儀に際してダンが王を Solomon、キリストに適應しているのである。

これまでダンのタイポロジー的聖書解釈を「旧約」と「新約」の人物、出来事、制度の対応のなかに見てきた。ダンは「対型」とか「予表」の語を表すときに "type" や "figure" を使用している。この語はタイポロジーで使用される用語で、ダンがいかにタイポロジーに関心を抱いていたかを示している。確かに「旧約」と「新約」という二つの聖書を考えた場合、両者の統一性、関連性は大きな問題であった。タイポロジーはこの問題の一つの解決であった。ダンのヴァージニア説教での聖書「適應」方法はタイポロジーにその発端があるのではないかと仮説のもとに我々は論を進めてきた。次に検討すべきはこのタイポロジーがいかに 17 世紀に用いられているかということである。

VI ジョン・ダンの「火薬陰謀事件記念説教」におけるタイポロジーと「適應」

タイポロジーは基本的には「旧約」と「新約」との関連性のなかに両書の統合を見ようとする。厳密に言えば歴史の繰り返しである。「旧約」で起こったことが「新約」で再度繰り返されるのである。ところが 16 世紀後半から 17 世紀を通じ、このタイポロジーが本来のタイポロジーから方向を変え、社会的・政治的に利用されることになる。歴史に名を残すような大人物、大事件にこのタイポロジーが適應されることになる。エリザベス女王、ジェームズ一世、チャールズ一世、二世、ピューリタン革命、そして新大陸アメリカへ赴いたピューリタン達、これらすべてにタイポロジーが宗教人やダン、マーヴェル、ミルトン、ドライデン等の文人達によって利用されることになる⁽²⁴⁾。エリザベス女王が Judith, Deborah, Joshua に、ジェームズ一世が Solomon に、その息子ヘンリーは Josiah に、チャールズ一世はキリストに、クロムウェルは Moses, Gideon, David に、チャールズ二世は David に、それぞれ適應され、「旧約」の予型に対する対型が「新約」ではなく、当時代の人物に見出されているのがこの時代のタイポロジーの用法の特徴である。また、困難に直面したイギリスはイスラエルに対応され、また、革命時代のピューリタンはエジプトのファラオの圧政から逃れるイスラエル人となり、アメリカへ渡ったピューリタンは新しいカナンへ向かう新しいイスラエル人となる。このようなタイポロジーを Miner は "politicized typology"⁽²⁵⁾ と呼ぶが、ダン自身もイギリスを「旧約」のイスラエルの対型とし、また、ジェームズ一世を Solomon の対型としている。いわば聖書をジェームズ一世時代のイギリスに適應したのである。このダンの説教に検討を加えることにより、ダンが本来のタイ

ポロジー以外にも当時普通であった「政治化されたタイポロジー」の扱いを見ることになる。以下この説教でダンがいかに聖書を彼の時代のジェームズ一世や事件に適応しているかを見てみたい。

ダンは、カトリック教徒過激派のジェズイットが1605年11月5日に起こした国会議事堂破壊未遂事件記念の説教を1622年11月5日に行っている。この説教は、「哀歌」4章20章についての説教で、火薬陰謀事件を非難すると同時に、又、ジェームズ一世王朝をも擁護し、ダンの説教としては長い部類に属する。説教は、エレミアのエルサレム陥落と捕囚について書かれた「哀歌」についてであるが、ダンはエルサレム陥落と捕囚をジェームズ一世の時代に適応し、ジェームズ一世王及び王国擁護に終始している。ダンが説教に選んだ聖書の一節は、「哀歌」4章20節の「主の油注がれた者、わたしたちの命の息吹/そのひとが、彼らの罠に捕らえられた。」(The breath of our nostrils, the anointed of the Lord, was taken in their pits.)である。この一節についての説教のポイントは「主の油注がれた者、わたしたちの命の息吹」とは誰か、「彼ら」は誰か、「罠に捕らえられた」とはどのような意味か、である。ダンは、「哀歌」が書かれた歴史的背景からこれらを説明し、次にそれらをジェームズ一世の時代に適応する。「主の油注がれた者」が誰を指すのかについては諸説があるが、ダンはそれをエジプト軍との戦いで非業の死をとげ、賢王と言われたユダ王国の王 Josiah (在位 640-609BC) と解釈する。歴代誌下 35 章 25 節に「エレミアはヨシヤを悼んで哀歌を作った」とあるからである。他方「主の油注がれた者」をダンはバビロン捕囚の際のユダ王国の最後の王でバビロンで獄死した Zedekiah (在位 : 597-596) とも解釈している。「哀歌」4章17節で「今なお、わたしたちの目は援軍を求めていたずらに疲れ/救ってはくれない他国をなお見張って待つ。」とあり、これは Zedekiah がエジプトからの援軍を待っていることへの言及であるからで、ダンは特定はしないが「主の油注がれた者」を Zedekiah と解釈するのが妥当であろう。ではなぜダンは「主の油注がれた者」を Josiah と解釈したのか。それはジェームズ一世が1622年8月に出した「説教者への指令」(Directions for Preachers)で王が説教のテーマを国教会の39箇条と Edward 六世時に出版された説教書(the Book of Homilies)で扱われるテーマに制限したことと関係がある。その最初の説教書で著者の Thomas Cranmer が Edward 六世を "a new Josias" と呼んでいるのである。ダンは、ジェームズ一世の「説教者への指令」を読んでおり、それに従って火薬陰謀事件記念説教を行っているので、「新しい Josias」としての Edward 六世を知っていた。「哀歌」の「主の油注がれた者」を Josiah 王とダンが解釈した背景には以上のような理由があった。それに Josiah とすれば、彼はエジプト軍との戦いで死ぬが、「主の目にかなう正しいことを行い、父祖ダビデの道をそのまま歩み、右にも左にもそれなかった」(列王記下 : 22 章 2 説) し、「彼 (Josiah) のように全くモーゼの律法に従って、心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして主に立ち返った王は、彼の前にはなかった。彼の後にも、彼のような王が立つことはなかった。」(列王記下 : 23 章 25 節) と称賛されている。「主の油注がれた者」を Josiah と解釈したほうがダンにとっては都合がよかった。それに「主の油注がれた者」を Zedekiah と解釈するとジェームズ一世との比較の際に不都合なことが生ずる。それは、Zedekiah が「主の目に悪とされることをことごとく行った」と列王記(下 24 章 19 節) やエレミア書 (52 章 2 節) で記されているからである。ダンが「主の油注がれた者」を Josiah と解釈するのは以上の理由による。しかし、ダンは Zedekiah 説を捨てる

ことはしない。Josiah が「善王」で Zedekiah が「悪王」でも王に変わりはなく、二人の王は「主の油注がれた者」、「命の息吹」即ち人々の命である、だから人々は「畏に捕らえられた」人を嘆かれなければならない、と言う。では、「彼ら」とはだれか。「主の油注がれた者」が Josiah であれば、「彼ら」は Josiah が戦ったエジプト王パロ・ネコ軍勢を指す。「畏に捕らえられた」とは、Josiah がネコに殺されたことを意味する。(列王記下：23 章 29 節)「主の油注がれた者」、「命の息吹」が Zedekiah であれば「彼ら」はネブカドネザル軍勢を差し、「畏に捕らえられた」は Zedekiah 王のバビロン捕囚をさす。では、「主の油注がれた者」が「命の息吹」であるとはどのような意味か。「哀歌」の "the breath of our nostrils" は創世記 2 章 7 節の神がアダムに「命の息をその鼻に吹き入れられた」から来ているが、人間は神の「息」(この語 *Ruach* はまた「靈気」とも訳される。)により生きており、神の命が吹き込まれている。ダンは、この *Ruach* を文字通りに解釈して「*Ruach*, 靈気は我々が呼吸する息である、我々が生きる命である。王はその息であり、命であり、それ故息と命は王に属する。」(Vol.IV.p.251)と言う。これは神の息がすべての命の根元であるように、人々の生活は王なくしては存在しえないことを表す。神が王となり、人々の王への無条件の服従がここから生まれてくる。「命の息吹」としての王は地上における神の代理人となり、我々に神の祝福を伝える。「哀歌」4 章 20 節のダンの文字通りの解釈は以上であるが、ダンはまだそれだけでは終わらない。この説教がカトリック教徒の火薬陰謀事件記念説教であることを考慮すれば、当然「哀歌」の一節は火薬陰謀事件と関わってくる。「哀歌」は、説教が行われた 1622 年のイギリス及びジェームズ一世に「適応」される。この「適応」によれば「主の油注がれた者」、「わたしたちの命の息吹」がジェームズ一世を指すことになる。「わたしたち」はイギリス国民である。そして「かれらの畏に捕らえられた」とはジェームズ一世がカトリック教徒の火薬陰謀事件に巻き込まれたことを意味する。ダンは次のように「哀歌」の一節をジェームズ一世の時代に適応する。

...and all they [Lamentations, and Mournings, and Woe] are written *within*, and *without*, says the Text [Ezek.2.10] there; *within*, as they concern the *Jews*, *without*, as they are applicable to us; And they concern the *Jews*, *Historically*...and they concern them *prophetically*, for farther attempts *Jeremy* did certainly *foresee*. They are applicable to us both ways too; *Historically*, because we have seen, what they *would have done*, And *Prophetically*, because we see what they *would do*. (Vol.IV. p.238)

ここでダンが "applicable" という語を使用していることに注目したい。ダン「哀歌」をダンの時代及び火薬爆発陰謀事件に適応するのである。しかし、ジェームズ一世の予型として「哀歌」を考えた場合、困難が生じてくる。それは Josiah, Zedekiah とも「畏に捕らえられて」死んでいることである。ジェームズ一世は「畏」に捕らえられても助かったが、「旧約」では「主に油注がれた者」は死んでいる。これはどのように説明されるか。ダン「畏に捕らえられた」という歴史の一場面よりはそれをイスラエルの復興という歴史の長いスパンのなかで見ているようである。確かに歴史的には、ユダ王国は「畏に捕らえられて」悲惨な状態に陥る。しかし、多くの危機を乗り越え、国は神の加護の下で繁栄を見ることがになる。予言的には「哀歌」でエレミアは、エルサレム陥落は嘆いているが、他方

でタイポロジー的にはキリスト亡き後のイスラエルへ降りかかるより大きな崩壊と荒廃をも嘆いているとダンはある。これはエルサレム陥落が予型となってキリストの死がその対型となっている。人々の嘆きの原因は王国の崩壊である。しかし王国は神を基にして作られたものであるから、王国が崩壊することは神の崩壊にも等しい。ダンのユダ王国の擁護がジェームズ一世王国の擁護に至ることは自明である。Josiah 王を論じる一方で、ダンは、巧みにジェームズ一世王国を背後に読みとらせている。更にダンはタイポロジー的な解釈を導入する。確かに王は敵の罠に落ちたが(**he was fallen**)、落ちた状態を続けるのではない。歴史的にはバビロン捕囚後イスラエル人はペルシア王キュロスによる釈放布告によって再び祖国へ帰還、祖国再建に励んだ。それ故、「落ちる」ことは「救出」を意味する。「落ちる」ことによって「救われる」のである。これはキリストの死と復活を予表する。ダンは Josiah の「罠に落ちた」ことをキリストの死と復活に対応させている。だから「嘆き」は「祝福」となる。このようにダンはタイポロジー的聖書解釈を取り入れ、エルサレム陥落を嘆きとせず、逆に「祝福」の契機とする。「罠に捕らえられた」結果としてのエルサレム陥落はジェームズ一世に適応すれば火薬陰謀事件である。王の殺害を狙ったこの事件はもし成功したら、イギリスは国家の頭を失うことになった。それはイギリス陥落にも等しい。しかし、バビロン捕囚後に祖国への帰還があったように、「罠に落ちた」後に「救出」があったように、火薬陰謀事件でも事件という危険があったが、それが未遂に終わり、イギリスは「救出」された。バビロニア捕囚は火薬陰謀事件の予型となっている。

予型論的にバビロニア捕囚の対型が火薬陰謀事件となるが、更に、ダンは王国を神の国とのタイポロジーの中に見ようとする。これはジェームズ一世王朝に対する揺るぎのないダンの支持・擁護となり、ダンのこの説教で最も重要な点である。ダンは、王の予型は神である、と明言する。

Of all things that are, there was an *Idea* in God; there was a *modell*, a platform, an exemplar of everything, which God produced and created in Time, in the mind and purpose of God before; Of all things God had an *Idea*, a preconception; but of Monarchy, of Kingdome, God, who is but one, is the *Idea*; God himselfe, in his Unity, is the *Modell*, He is the Type of *Monarchy*. (Vol.IV. p.240)

神は地上の王国の「予型」である。しかもその王国には一人の統治者しかいない。

All forms of Government have one and the same *Soul*, that is, *Soveraignty*; That resides somewhere in every form; and this *Soveraignty* is in them all, from one and the same *Root*, from the *Lord of Lords*, from God himself, for *all Power is of God*. (Vol.IV. pp.240-1)

この一節で王の絶対権、神聖が雄弁に語られ、王権神授説を唱えるジェームズ一世にとっては心強い援護となる。王国のモデルは神であり、「神によらない権威はない」とも言う。更に、ダンは神と王国の関係を述べ、神は王国の「予型」であると言明する。

All formes of Government have this Soule, but God infuseth it more manifestly, and more effectually, in that forme, in a *Kingdome*: ... All governments may justly represent God to mee, who is the God of Order, and fountaine of all government, but yet I am more eased, and more accustomed to the contemplation of *Heaven*, in the *notion*, as *Heaven is a kingdome*, by having been borne, and bred in a Monarchy: God is a Type of that... (Vol.IV. p.241)

現世の王国の予型は神であり、これは現世の王国は神を表すという意味に他ならない。ダンも個人的にエリザベス女王とジェームズ一世の王国に生まれ、育ったことにより、天国は王国であるという考えに安堵をおぼえ、その考え方に順応していると言っている。最後にダンも「神は王国の予型である」と断言する。

ダンの王国賛美はこの後も続く。王国は真に地上における最善の国家である。そして、象徴的には天国の最善の予表、予型である、とも言う。(Vol.IV.p.243) ダンがこれほどまでに王国を支持する説教は他には類を見ない。ダンからすれば神の王国の対型である地上の王国を破壊しようとした火薬陰謀事件は神への反逆であり、神の王国の破壊にも通ずる行為である。丁度神の選民イスラエル人をバビロンに捕囚したネブカドネザルの行為が神に対する反逆であるのと同じである。それ故、王と王国の切断と王なしでの王国の安寧を主張することは神の建物を揺るがし、解体することになる。王と王国は魂と肉体同様切り離せない関係にある。王を王国から取り除くことは王国の死を意味する。ダンも「哀歌」の一節によってジェームズ一世王朝のイギリスをもタイポロジー的に扱っており、ジェームズ一世王朝が直面した難題の解決を試みている。

「哀歌」4章20節は、イスラエル人のバビロニア捕囚が嘆きの対象であるが、とりわけ王 *Josiah* をエレミアは嘆いている。「良き王」である *Josiah* の死に際し、王国は致命的重傷を負い、外国の君主の属国になった。ダンもしきりに *Josiah* 王の善良さを強調するが、それもダンも *Josiah* 王をジェームズ一世の予型としているからである。ダンも、「我々の時代の *Josiah* に適応すれば」(if we apply it to the *Josiah* of our times) [Vol.IV. p.247] という表現を度々使用するが、「我々の時代の *Josiah*」がジェームズ一世を指していることは言うまでもなく、この説教では *Josiah* としてのジェームズ一世は9回言及されている。ダンも、火薬陰謀事件記念説教での彼の任務は「哀歌」の一節を説教日に適応することであると述べて、次のように言う。

Those men who intended us, this cause of lamentation this day, in the destruction of *our Josiah*, spared him not, because he was so, because he was a *Josiah*, because he was good; no, not because he was good to them, his benefits to them, had not mollified them, towards him. (Vol.IV. p.248)

「我が *Josiah*」とはジェームズ一世であり、ジェームズ一世はカトリック教徒に対して良き王であったが、それがカトリック教徒の気持ちをなだめるには至らなかった。その王を殺害するとすれば人々にとってどこに誰が何が慰めの対象となるのか、と言う。ジェームズ一世は息子チャールズのスเปน王女との結婚によるスเปนとの和平を希求し、カトリック教徒に対する誹謗・中傷を禁じていたが、その事情を察してかダンも反カトリック

教の姿勢を前面に出さない。火薬陰謀事件を宗教的次元からではなく政治的な次元からとらえ、もっぱら事件をジェームズ一世の王としての権威への反旗として強調している⁽²⁷⁾。いかにして国家の安定が維持されるか。火薬陰謀事件記念日に際し、ただカトリック教徒を非難するだけでは何の解決にもならない。むしろ地上における神の代理人たる王への忠誠によってこそ国の安定は維持される。王への忠誠なくしては国家はただ混乱に陥るだけである。ところがその正しき混乱を目論んだのがカトリック教徒であった。ダンが本説教で神に由来する王国、神の代理人たる王を強調し、王や王国はいかなる攻撃の対象となてはいけないことを力説するのはジェームズ一世とジェームズ一世王朝のためである。

...if they [the plotters of the Gunpowder] had removed our *Iosiah*, and his *Royall children*, and so, this form of government, *where*, or, *who*, or *what* had been an object of Consolation to us? (Vol.IV. p.248)

過激なカトリック教徒達はジェームズ一世とその子供達の殺害を計画したが、ダンにとって王なき王国は考えられない。エレミアが *Josiah* 王の死を嘆いたように、もし王が火薬陰謀事件の犠牲者になっていたら、我々は王を嘆かなければならなかつたろう。しかし、幸いにも神の摂理により計画は無に帰し、ジェームズ一世は犠牲者となることはなかつた。ダンは終始ジェームズ一世をこの説教で擁護するが、王なくしてイギリス国家の安定はありえないことを力説し、カトリック教徒攻撃を抑えることによりジェームズ一世の意向に沿う内容の説教としている。しかし、ジェームズ一世がカトリック教徒が言うように「悪い王」*Zedekiah* であつたらどうか。その場合でも我々は王を守らなければならない。なぜなら王を失うことには危険があり、嘆きが伴い、*Zedekiah* 王の死に際しても「嘆き」があつたからである。ジェームズ一世殺害を狙った過激派カトリック教徒はジェズイットであつた。彼らはジェームズ一世の王権神授説に真っ向から反対し、民衆からの権力委譲としての王権説を信じていた。彼らの見解によれば王はただ民衆からの権力の代理人にすぎない。これに反しジェームズ一世は王権の神からの由来を頑なに信奉し、たとえ王が悪王であろうとも悪王を神の人間への罰として受け入れねばならないとした。火薬陰謀事件の首謀者とジェームズ一世とは王権に関しては全く異なつていた。ここではダンはジェズイットの王権論に反論し、悪王でも王であるという考えに立脚した主張をしている。このようにダンは「哀歌」4章20節を火薬陰謀事件記念説教の題材として、エルサレム陥落を扱うが、それを、また、ジェームズ一世の時代に適応し、ジェームズ一世を「哀歌」の悲劇の主人公 *Josiah* に対応させている。王権、王国の擁護を全面的に取り上げ、*Josiah* 王の死と *Zedekiah* 王のバビロン捕囚をジェームズ一世へのカトリック教徒の火薬陰謀事件の中にとらえ、タイポロジー的に解釈し、ジェームズ一世への全幅的な忠誠を表明している。ここで忘れてならないのは「哀歌」4章20章の「主の油注がれた者、わたしたちの命の息吹」としての王である。エレミアが嘆いている者が *Josiah* であれ *Zedekiah* であれ、その人物は「主の油注がれた者」(the Anointed of the Lord)であり、「わたしたちの命の息吹」(the Breath of our Nostrils)である。「油を注ぐ」ことにより王、祭司、預言者は特別な任務を得ることになる。「哀歌」の一節では、油を注がれた王は神からの特別な権威を授けられていることを示す。「油を注ぐ」ことは宗教的に一般人と区別するためだったが、「主

の油注がれた者」は当然我々に「イエス・キリスト」を思い起こさせる。キリストは文字通り「主の油注がれた者」であったからである。ダンは次のように言う。

An Anointed King...and he that is anointed...above his fellow Kings, ...The anointed of the Lord, who in this Text hath both those great names, *Mesiah Jehovah, Christus Domini*,... (Vol.IV. p.258)

「油注がれた者」はメシアであり、その英訳がキリストである。ダンは、「哀歌」の「主の油注がれた者」が誰であるかは限定していないが、エホバとキリストとを連想させていることは明白である。つまり、「哀歌」の「主の油注がれた者」はキリストの予型となっており、それが、また、ジェームズ一世に適應されるのである。この説教ではジェームズ一世は *Josiah* 王の対型となっていたが、今度はキリストの対型ともなっている。「哀歌」の「油注がれた者が畏に捕らえられた」は *Josiah* 王の死か *Zedekiah* 王のバビロン捕囚を指すが、対型としてはキリストの受難となり、それが更に政治的にジェームズ一世に適應され、カトリック教徒の火薬陰謀事件によるジェームズ一世殺害未遂事件に適應されているのである。*Josiah (or Zedekiah) → Christ → James I* という図式である。本来のタイポロジーとは異なる形で「旧約」がジェームズ一世に対型を見出している。この予型、対型には無理があることは確かである。なぜなら *Josiah* 王はエジプト人との戦いで死に、*Zedekiah* は捕囚先のバビロンで獄死しているからである。これに関してダンは詳細に論ずることはしないで、「彼らは (*Josiah* と *Zedekiah*) は捕らえられ、(ユダ王国には) 連れ戻されなかった。彼らは二人とも死んだ。彼ら二人にあつては永遠の永久の嘆きの正当な理由があり、他の感情を働かせる余地は何もない。」(Vol.IV.p.260) と言っている。そして、「哀歌」4章20節をジェームズ一世に移せ、と言う。

But transfer it [Lamentation 4.20] to our *Josiah* [James I], and then, *Hee was taken, is, Hee was but taken; God did not suffer his holy one to see Corruption, nor God did not suffer his Anointed, to perish in this taking;* (Vol.IV. p.260)

ここでの "transfer" は「適應」に近い意味を持っている。*Josiah* や *Zedekiah* とは異なり、ジェームズ一世は「捕らえられただけであり」、「神は神の聖者が朽ち果てるのを、お許しにならないであろう。」(使徒行伝：2章27節)又、神は油注がれた者が捕らえられて死ぬことを許しはしなかった。ジェームズ一世は「畏に捕らえられた」が死ぬことはなかった。それは神の加護があつたからである。だから嘆きは祝福となり、叫びが賛嘆となる。神はジェームズ一世を畏に捕らえさせたが、王を救出させたと言って、次のように言う。

And by making his [God's] servant, and our Sovereign, the blessed means of that discovery, and deliverance, he [God] hath directed us, in all apprehensions of dangers, to rely upon that *Wisdom*, in civill affaires, affaires of State, and upon that *Zeale*, in causes of Religion,... (Ibid. p.260)

国内問題、国家問題では王の智恵、宗教問題では王の熱意に我々は依存しなければならない。王の智恵、熱意によって今後再度生ずるであろう国内の様々な問題を乗り切ることができるのである。過激なカトリック教徒と異なり、ジェームズ一世はあくまでも平和的手段に訴える。

If God had made him [our Josiah = James I] his *Rod*, to scourge others with Warres and Armies, we might be afraid, that when God done his worke by him, he would *cast the rod in the fire*; God doth not alwayes blesse those Instruments, who love blood, though they pretend his Glory. But since God hath made him *his Dove*, to flie over the world, with the Olive branch, with indeavours of Peace, in all places, as the Dove did, so he shall ever bring his Olive branch to the Arke, that is, endeavour onely such peace, as may advance the Church of God, and establish peace of Conscience in himself. (Vol.IV. p.261)

この一節は "Peacemaker"としてのジェームズ一世の姿をよく表している。たとえ神が王に戦争や軍隊で他者を罰せさせてもジェームズ一世はそのむちを火中に投げ捨てると言う。むしろジェームズ一世はノアと同様オリーブの枝を箱船にもってくる人物である。後半でダンはタイポロジーを使用し、「旧約」のノアの鳩をジェームズ一世の予型としている。既に取り上げたノアの箱船が教会の予型ともなっている。火薬陰謀事件を企てたカトリック教徒は平和とは無縁な人々である。「神の教会を促進し、心に良心の平和を確立する」ような平和にジェームズ一世は励むのである。ダンからすれば過激なカトリック教徒は平和を破壊する人達で、神からの祝福は受けることはない。

ダンは「哀歌」4章20節の説教で巧みに聖書をジェームズ一世の時代に適応する。その適応は Josiah や Zedekiah のジェームズ一世への適応のように無理な適応もあった。しかし、ダンは、Josiah (or Zedekiah)からキリスト、ジェームズ一世へと適応を続け、ジェームズ一世に対する全面的な支持の態度をここで表明している。結局、火薬陰謀事件のような国家転覆を図る事件を回避するにはどうすべきなのか。それは「神への忠誠」と「ジェームズ一世への忠誠」によるしか方法はない。ダンは説教の最後で、ジェームズ一世の背後での国民の悔い改めと統一を訴える。そしてジェームズ一世から宗教的及び世俗的な問題における方向性が国家と宗教の安全への方法として生まれてくるのである⁽²⁸⁾。(ジェームズ一世の聖と俗における指導性のもとで国家は安泰となるのである。

ダンの火薬陰謀事件記念説教の検討から我々は本来のタイポロジーとは異なるタイポロジー、「政治化されたタイポロジー」をダンがいかに利用していたかを見てきた。17世紀には普通であった聖書解釈の一つであるタイポロジーの「予型」としての「旧約」と「対型」としての「新約」との対応ではなく、ジェームズ一世の時代の人物や出来事に対型を見出すというタイポロジーをダンは使用し、「哀歌」に火薬陰謀事件の「予型」を見出した。言わばダンは、「旧約」を1605年11月5日のロンドンの国会議事堂爆発未遂事件に適応したのである。そして、過去の「旧約」の記述から現在の火薬陰謀事件を照らし合わせ、事件の不当性を指摘し、あわせてジェームズ一世及びイギリスの賛美・称賛・擁護に終始するのである。

VII おわりに

ダンのヴァージニア説教から論を進め、その手法をタイポロジーの一種にまで突き止めた。ダンの「使徒行伝」のヴァージニア植民者への適応はタイポロジーを利用したものである。宗教的なタイポロジーは「旧約」を予型としてその対型を「新約」に見つける。「新約」の人物、出来事、制度の予型が「旧約」に見つけられる。このタイポロジーは本来はキリスト教の救済史のなかに位置づけられる聖書解釈であった。それが17世紀に入り、歴史を書き換える事件が次から次へと生じるにあたり、人々は聖書をその事件、人物に適応し、自らの行為を正当化しようとした。ダンや他の説教家達のヴァージニア植民擁護の説教はまさしくこれであった。つまり彼らは聖書の一部をヴァージニア植民に適応したり、聖書を援用してイギリスのヴァージニア植民の正当化を試みたのである。ヴァージニア植民は、キリスト教の普及、領土拡大による国内の人口急増問題の解消、国内失業者への雇用創出、物資の供給等様々な問題を抱えた植民事業であり、単なる「福音」の普及を目指した植民ではなかった。これまで見てきた説教を見ても、又、会社の公式文書を見ても、ヴァージニア植民の目的は異境の地における神の国建設がそもそもの目的であった。しかし、実際は植民という名を借りた他国への侵略であったと言えよう。ヴァージニア会社関係者は、その侵略を覆い隠す大義名分が必要であったわけで、それが「福音」の普及、異教徒の改宗という宗教的使命であった。そのために彼らが利用したのが聖書であり、また、説教家達からは聖書の記述と合致した事としてヴァージニア植民を擁護してもらった。ヴァージニア植民という歴史に先例がない事業に加わる者達にとって彼らの先例が聖書に見出されるのは他の何にもまして心強い援護射撃であったはずである。彼らは、イギリスは神の選民イスラエル人と同じことをしているのだから、イギリスのヴァージニア植民に誤りがあるはずはなく、又、他国から原住民の領土侵犯を批判される心配はない。ヴァージニア会社関係者は言わば聖書からのお墨付きをもらうことによって植民事業を堂々と大手を振って推進でき、又、植民者は何ら迷うことなく植民に専念できるのである。この裏付けを説教家達はタイポロジーを利用することによって行ったのであった。ダンを始めヴァージニア植民を擁護した説教家達がすべて聖書の適応というタイポロジーの利用を行っているのは興味深い。なぜ彼らは聖書をヴァージニア植民に適応したのか。聴衆を説得するのに最も効果的だったのは聖書であったことを聖書の適応は示しているが、それは裏を返せば徐々に聖書の権威が失墜していく中で、17世紀前半にはまだ聖書が権威ある神の声として大きな影響力を社会において及ぼしていたことの証であろう。又、ヴァージニア植民がジェームズ一世の特許状により、国策の一部として認可されたが、ジェームズ一世も聖書を国家の様々な問題に適応していたという事実も説教家達の聖書のヴァージニア植民への適応との何らかの関連が指摘されるかもしれない⁽²⁹⁾。ダンの説教からダン以前の説教を見、彼らが皆宗教的なタイポロジー利用することによって、いかにヴァージニア植民の宗教性・正当性を主張しているかを検討してきた。ヴァージニア植民はその始めから幾多の困難・危機に直面しながらも、入植者はそれを乗り越え植民を続行し、それが現在のアメリカ国家の繁栄の基盤となったのは彼ら説教家達の雄弁な聖書の適応によるヴァージニア植民擁護のためであったかもしれない。

注

- (1) ダンは、聖書の社会的適応の他にも、聖書を自らに適応することにも言及している。(G. R. Potter and E. M. Simpson, eds. *The Sermons of John Donne* [Berkeley: University of California Press, 1953-62], Vol.III. p.367 参照。以下本論で使用するダンの説教はこの版による。)
- (2) Vol. IV. p. 265.
- (3) Vol. IV. p. 265.
- (4) "Great Massacre" については、Alden T. Vaughan: *American Genesis* (Boston: 1975), Chap. IX 等参照。
- (5) Vol. IV. p. 266.
- (6) Vol. IV. p. 269.
- (7) Vol. IV. p. 269.
- (8) 例えば、救世主の神の約束は実現するのに4千年要したとか、神が約束の地を示すのに2千年かかったとかである。
- (9) Vol. IV. p. 275.
- (10) Vol.IV. p. 275.
- (11) William Crashaw: *A Sermon Preached in London* (London, 1610), C3. 以下 Crashaw の引用はこの版により、頁数のみ記す。
- (12) William Symonds: *A Sermon Preached at White-Chapel* (London, 1609), p.9. 以下 Symonds の引用はこの版により、頁数のみ記す。
- (13) Robert Gray: *A Good Speed to Virginia* ed. Wesley H. Craven (New York, 1937). 以下 Gray の引用はこの版により、頁数のみ記す。
- (14) この説教は1609年 London 出版である。以下 Price の引用はこの版により、頁数のみ記す。
- (15) Alexander Whitaker: *Good Newes from Virginia* ed. Wesley F. Craven (New York, 1937). 以下 Whitaker の引用はこの版により、頁数のみ記す
- (16) Whitaker, p. 11.
- (17) Whitaker, p. 7.
- (18) Patrick Copland: *Virginia's God be Thanked* (London, 1616). 以下 Copland の引用はこの版により、頁数のみ記す
- (19) ブルトマン著作集聖書学論文集 III 9 (新教出版社: 1994), p. 3.
- (20) アウグスティヌス著作集 6 (教文館: 1988), p. 180.
- (21) 出村彰・宮谷宣史編『聖書解釈の歴史』(日本基督教団出版局、1986), p. 191.
- (22) John Donne: *Devotions upon Emergent Occasions* A. Raspa ed. (Montreal and London, 1975), p. 99.
- (23) John Donne: *Essays in Divinity* E. M. Simpson ed. (Oxford, 1967), p. 8.
- (24) Steven N. Zwicker: *Dryden's Political Poetry* (Providence, Rhode Island, 1972) 参照。
- (25) Earl Miner ed.: *Literary Uses of Typology* (Princeton, 1977), p. xiii.
- (26) John N. Wall, Jr. and T. B. Burgin, "This Sermon...upon the Gun-powder day": The Book of Homilies of 1547 and Donne's Sermon in Commemoration of Guy Fawkes' Day, 1622" (South

Atlantic Review 49.2 (1984), p.28.

(27) Wall and Burgin, p. 24.

(28) Wall and Burgin, p. 24.

(29) John Morrill et al. eds.; *Public Duty and Private Conscience in Seventeenth-Century England: Essays Presented to G. E. Aylmer* (Oxford, 1993), p. 90.

References

- K.R. Andrews, N.P.Canny and P.E.H.H.Hair eds.: *The Westward Enterprise* (Detroit, 1979)
- Ursula Brumm: *American Thought and Religious Typology* (New Jersey, 1970)
- Stephen Baskerville: *Not Peace but a Sword The political theology of the English revolution* (London and New York, 1993)
- S. Bercovitch: *Typology and Early American Literature* (Massachusetts, 1972)
- S. Bercovitch: *The American Jeremiad* (Wisconsin, 1978)
- J.W. Blench: *Preaching in England in the Late Fifteenth and Sixteenth Century A Study of English Sermons 1450-c.1600* (Oxford, 1964)
- Chana Bloch: *Spelling the Word George Herbert and the Bible* (London, 1985)
- Mark S. Burrows and Paul Rorem eds.: *Biblical Hermeneutics in Historical Perspective* (Michigan, 1991)
- John S. Chamberlin: *Increase and Multiply* (North Carolina, 1976)
- Jean Danielou, S. L.: *From Shadows to Reality Studies in the Typology of the Fathers* (London, 1960)
- Horton Davies: *Like Angels from a Cloud The English Metaphysical Preachers 1588-1645* (San Marino, 1986)
- G.R.Evams: *The Language and Logic of the Bible The Earlier Middle Ages* (Cambridge, 1984)
- James Doleman: *King James I and the Religious Culture of England* (Cambridge, 2000)
- Lori Anne Ferrell: *Government by Polemic* (California, 1998)
- Lori Anne Ferrell and Peter McCullough eds.: *The English sermon revised* (Manchester and New York, 2000)
- David H. Fischer: *Historians' Fallacies Toward a Logic of Historical Thought* (New York, 1971)
- R.T. France: *Jesus and the Old Testament* (London, 1971)
- Kate G. Frost: *Holy Delight* (Princeton, 1990)
- Joseph A. Galdon, S.J.: *Typology and Seventeenth-Century Literature* (The Hague · Paris, 1975)
- C. H. George and K. George: *The Protestant Mind of the English Reformation 1570-1640* (Princeton, 1961)
- Oscar Gullmann: *Christ and Time* (London, 1951)
- William Haller: *The Rise of Puritanism* (Philadelphia, 1972)
- A. F. Herr: *The Elizabethan Sermon A Survey and a Bibliography* (New York, 1969)
- J.N.D.Kelly: *Early Christian Doctrines* 2nd ed. (San Francisco, 1978)
- N. Frye: *The Great Code The Bible and Literature* (London, 1982) (『大いなる体系 聖書と

- 文学』伊藤誓訳、法政大学出版局、1995年)
- P. J. Korshin: *Typologies in England 1650-1820* (Princeton, 1982)
- P. J. Korshin: *From Concord to Dissent* (Yorkshire, 1973)
- James L. Kugel and Rowan A. Greer: *Early Biblical Interpretation* (Philadelphia, 1986)
- G. W. H. Lampe and K. L. Woolcombe: *Essays on Typology* (Illinois, 1957)
- B. K. Lewalski: *Protestant Poetics and the Seventeenth-Century Religious Lyric* (Princeton, 1979)
- B. K. Lewalski: *Milton's Brief Epic* (Providence, Rhode Island, 1967)
- K. Matsuura: *A Study of Donne's Imagery* (Tokyo, 1953)
- P. E. McCullough: *Sermons at Court* (Cambridge, 1998)
- R.L.P. Milburn: *Early Christian Interpretations of History* (London, 1954)
- W. F. Mitchell: *English Pulpit Oratory* (London, 1932)
- W. R. Mueller: *John Donne: Preacher* (Princeton, 1962)
- Hughes O. Old: *The Reading and Preaching of the Scriptures in the Worship of the Christian Church* 3 Vols. (Cambridge, 1998)
- Linda Levy Peck ed.: *The Mental World of the Jacobean Court* (Cambridge, 1991)
- David B. Quinn: *New American World A Documentary History of North America to 1612* 5 Vols. (New York, 1979)
- David B. Quinn and A.N. Ryan: *England's Sea Empire 1550-1642* (London, 1983)
- Calorine F. Richardson: *English Preachers and Preaching 1640-1670* (New York, 1928)
- Jeanne Shami ed. *John Donne's 1622 Gunpowder Plot Sermon* . (Pennsylvania, 1996)
- Beryl Smalley: *The Study of the Bible in the Middle Ages* (Paris, 1964)
- Charles Smyth: *The Art of preaching A Prctical Survey of Preaching in the Church of England 747-1939* (London, 1953)
- Edward Taylor: *Upon the Types of the Old Testament* 2 Vols. ed. Charles W. Mignon (Lincoln and London, 1989)
- Earnest Lee Tuveson: *Redeemer Nation* (Chicago and London, 1968)
- Peter White ed. *Puritan Poets and Poetics Seventeenth-Century American Poetry in Theory and Practice* (University Park and London, 1985)
- Louis B. Wright: *Religion and Empire* (New York, 1965)
- M.ウォーザー 荒井章三訳『出エジプトと解放の政治学』(新教出版社、1987)
- 高森昭『解釈学の諸問題』(日本基督教団出版局、1974)
- 手塚儀一郎他編『旧約聖書略解』(日本基督教団出版局、1957)
- 日本聖書教会『聖書』(東京、1992)
- 山形和美編『差異と同一化』(研究社、1997)
- 山谷省吾他編『新約聖書略解』(日本基督教団出版局、1976 増訂新版)